
「わたしの恐怖をみななければならない」

現代日本における「慰安婦」証言の受容

三宅 美千代

目次

序

第1部 わたしの恐怖をみななければならない

第2部 インタビュー・スクリプト

第3部 日誌

引用文献

今私が或る痛みを感じ、その痛みだけに基づいて、というのは例えば眼を閉じたままで、それは私の左手先の痛みだと言うような痛みだったとする。誰かが私にその痛い場所を私の右手で触ってみよと言う。私はそうする、そして〔眼をあけて〕見まわすと、隣りの人の手（隣りの人の胸につながっている手の意味）に触っているのを認識する。

（ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン『青色本・茶色本』）

決して折り合わせることのできないズレ、〈出来事〉の暴力の痕跡を疵として現在の物語のなかに書き込むこと、そこに、〈出来事〉の記憶の分有の可能性が賭けられている。

（岡真理『記憶／物語』）

私の髪は抜け落ちる。歯も抜け落ちる。発疹が出る。恩赦申請の締切日のあと、私は見知らぬ者のように自宅に入った。虚ろな様子で。何日もただ座っていた。じっと見つめながら。〔略〕

いかなる詩もここから生まれるべきでない。これを詩に書けば、私の手が落ちますように。

そうして私は座っていた。自然なことか、不自然なことか、言葉はなく。人々が自分の言葉に支払った代償を知って、茫然としながら。もし私が書けば、それを不当に利用し、裏切ることになる。もし書かなければ私は死ぬ。突然、祖母のモットーが心に浮かんでくる——絶望したら、ケーキを焼きなさい。

（アンキー・クロッホ『カントリー・オブ・マイ・スカル』）

証言者の役割、というよりも、語られている過去に聞き手がどのような態度で向きあうのか、ということなのだと思います。どのようにして、その想起のプロセスに関与していくのか。自ら体験していない過去を、どうやって「一緒」に思い出すのか。もともと共通の地平などない共同の想起といってもいいかもしれませんが、それが「いま」に介入する過去をつくることになるのでしょう。

（米山リサ、富山一郎編『記憶が語り始める』収録「座談会」での発言）

一国の文学は、自国民にその罪をも含めて真実を語らなければなりませんし、文学は罪を背負った過去との対決にみずから参画しなければなりません。わたしはそう確信しております。

（クリスタ・ヴォルフ「日本の読者へ」）

こうした試みは、まず死者の多様性と戦争経験の複雑さを認識することから始めなくてはならない。「我々の死者」と「彼らの死者」との境界をまたぎ越すこと、その経験の違いを否定することなく共に記憶すること、その方法が見出されなくてはならないのだ。

（テッサ・モーリス＝スズキ「記憶と記念の強迫に抗して」）

序

1930年代から40年代に旧日本軍の「慰安婦」となった女性たちの証言の存在が公に知られるようになった1990年代以降、戦後世代による第二次世界大戦の理解は批判的に再検討される必要があるということが明らかになった。現在にいたるまで、日本社会でもっとも広く共有されている戦争のイメージは、原爆、東京大空襲、沖縄戦の生存者によって語られた話に基づくものであり、それは戦争の残酷さと平和主義の重要性を伝える語りとして継承されてきた。いわゆる従軍「慰安婦」証言は、日本の学校教育、マスメディア、文化活動において、第二次世界大戦が話題になるとき、そこで敢えて触れられることのない記憶の領域が存在するという事実を人びとに突きつけた。

「わたしの恐怖をみなければならない」は、旧日本軍の「慰安婦」となった女性たちの証言の社会的受容を検討し、日本の戦後世代が帝国時代の日本軍兵士の残虐行為や戦争犯罪を語る言葉をどのように受けとってきたかに焦点をあてる試みである。従軍「慰安婦」の問題については1990年代以降知られるようになったが、本プロジェクトのおもな関心は、前の世代が行なった戦争犯罪についての歴史的事実に個人がどのように反応したか、過去の植民地支配とその記憶との向き合いを、その多様性を含めて明らかにすることにある。この問題をめぐる世代間の意見の相違、事実を知ることの当惑、証言に対するさまざまな応答、あるいはその不在と無関心、証言との接触が個人の戦争観にどのような変化や軌道修正をもたらしたか、被害者と加害者の子や孫たちの出会いはどのように可能であるのか。それらを探ることにより、日本社会における戦争記憶の形成とその継承について考察することを目指している。

個人的な話をすれば、2010年に元「慰安婦」たちの証言を聞く機会をもったことが、このプロジェクトを構想する直接的契機となった。証言者の身体と声に対峙することは、文書としてまとめられた証言を読むことや、映像で知識を得る経験とは大きく異なる。証言が差し出される場の圧倒的強度に衝撃をうけた私は、聞き手の一人として経験した出来事をどのように受けとり、それをいかなる言葉で語るができるのか分からなかった。支援活動関係者の真摯な訴えから、歴史修正主義者の事実否認の発言にいたるまで、政治問題として「慰安婦」を語る言葉は無数に存在する——この問題をめぐる中心的言説は政治的なものである——のに比べ、一個人がどのように「慰安婦」証言に耳を傾けてきたのか、あるいは、それを家族や共同体単位で継承してきた戦争記憶との関連性のなかでどのように受容しうるのかという問いは軽視されているように思われた。そのような問題意識とともに、私は録音機を抱えて「慰安婦」証言に触れた経験をもつ方々を訪ねるようになった。

インタビューでは、何らかのかたちで「慰安婦」証言に触れた経験をもつ、さまざまな年齢層、職業、ジェンダー、国籍からなる方々にご協力いただいた。実を言えば、この問題に関して、人びとの反応を得ることは容易ではなかった。現在の日本社会では、意見の対

立を恐れるためなのか、社会問題に対する無関心のせいなのか、厄介な問題には関わりたくないという防衛本能なのか、親しい友人同士であってさえ政治的話題を忌避する傾向が強い。回答者の多くが、国際的な政治問題に発展し、メディアでも論争的になっている「慰安婦」問題について話すことにあまり積極的ではないようだった。また、さまざまな事情により、いくつかのインタビューは本書に収録することができなかった。最初の面会後に回答者が申し出を辞退されたり、あるいは、活字として内容を公開することに躊躇をしめされる場合もあった。これらの経験は、女性たちの痛みを自分のものとして感じ、この問題について本当に言うべきことを持っている人ほど、沈黙を選ぶ傾向にあるという事実を私に実感させた。

以下は、そのようにして集められたインタビュー・スクリプトに加え、証言に臨場することをめぐる詩的エッセイ、日誌から構成されている。当初の計画では、私的なコメントは極力差し控えるつもりでいたが、その方針を一部修正したのは、一方的に質問を投げかける取材者の立場に身を置くことに後ろめたさを感じるようになったためである。もう一つの理由は個人的なもので、回答者との対話を通して、数十年前に経験したある個人的な出来事を歴史化する手がかりが得られたと感じ、そのことを何らかの形で記しておく必要があると考えたためである。そのような理由から、作業状況についての記録、報道記事からの引用、読んだ本についての覚書などに加え、個人的な記述や自伝的回想を日誌に含めることにした。

本プロジェクトの実施にあたっては、インタビューとスクリプト作成の過程を回答者たちとの共同作業の場として立ちあげ、この問題についての知識を共有することを心がけた。このような着想は、少なからぬ回答者が信頼できる情報を探すことの難しさを語ったことから生まれた。実際、日本政府はメディアに対する統制を強めているほか、とくにネット空間を利用した修正主義者たちの宣伝活動は勢いを増しており、回答者たちがそのように考えるのにはもっともな理由があった。そこで、具体的な作業の過程で、回答者たちとのあいだに、歴史的事実についての知識の共通基盤をつくることが非常に重要になった。本や映像、展示資料を共有して、その内容について意見を交わし、スクリプトの作成方法についても話し合った。このような経験の結果、書く行為を他者との出会いや対話の場として実現しうるとしたら、それこそがこの問題を取り巻く現状に相応しいものではないかという考えを自然に抱くようになった。

(2014年8月14日)

付記

タイトルは朝鮮民主主義人民共和国の証言者、朴永心氏の言葉「わたしは真実を話している。わたしの恐怖を、あなたは見なければならぬ」からとった（西野瑠美子「証言にどう向き合うか」246頁／表記は一部改めた）。プロジェクトの実施にあたり「女たちの戦争と平和資料館（wam）」に大変お世話になった。この場をかりて、感謝の意を表したい。

第1部

わたしの恐怖をみななければならない

わたしの恐怖をみななければならない

1

出来事について語る。あるいはその不可能性。語ることを決意した者も、それを完全に所有することはできない。語り手はひたすら受動的であり、その語りは未遂に終わることを運命づけられている。屈曲した身体から漏れるうめき声。生存のための記憶喪失。語りの汀にうづくまる。形象化されそうになっては逆流し、体内に引き戻っていく出来事の記憶。それは語り手を執拗に脅かし、波打ち際に横たえられた身体が闇に浸食されるのを止めはしない。

直視しないことがたったひとつの生存の可能性であるような傷。行き場をうしなったエネルギーはみずからの細胞を攻撃する。あなたはだれかの両肩を揺すぶり、大声で叫びたい衝動にかられるが、現実には、小声で助けを求めることさえできないことを知っている。沈黙により消尽される膨大なエネルギー。半世紀ものあいだ放出されることなく、身体の奥にしまい込まれた異物は、内臓のかたちを歪め、医学的に説明のむずかしい無数の痛みや不快を引き起こしてきた。それは細胞という細胞すべてに働きかけ、身体の主であるあなたを敵とみなすよう仕向ける。全身の細胞が牙を剥く。異物を身体に沈めたまま耐える、気の遠くなるような長い時間。

2

言葉が命がけで発せられるとき、言葉が血を流しているとき、どのようにそれらの言葉とともにあることができるだろう。とりわけ、息を殺して耳をそばだてるわたしと、苦悶に顔をゆがめ、流れおちる涙にもかまわず、痩せた身体から言葉を振りしぼるあなたが過去の暴力の構図を再現してしまうとき。それらの言葉が何度でも必要とされなければならない責任の一端がわたしにあるとき。それは生存のための記憶喪失に手をつっこんで、言語化を阻もうとする生の作用に抗い、記憶の肉塊をえぐり出す作業となる。証言する者とそれを受けとる者。そのとき、わたしはあなたとのどのような関係を生きるのだろうか。

痛みを語る言葉がぎこちなく不器用であるのにたいし、身体はあまりに雄弁だ。それについて語ることが生存を危うくする、ある出来事の記憶とともにあなたがそこに立つだけで、その身体を震わせている情動はわたしにとりつく。内臓を圧迫しせりあがってくる声。あなたの話す言語を理解しないわたしのような者にも、記憶の封印を解き、出来事を語ろうとするあなたの憤怒、絶望、憂鬱を感受することはできる。証言者はやっとの思いで引き剥がした肉塊を震える手でさしだす。わたしの両手はそれを夢中でつかむ。あなたの恐怖をみるとはどのようなことだろう。わたしはそれをみることができのだろうか。

長い歳月、身体の奥にしまい込まれていた出来事に声が与えられ、それがひとつの言語から別の言語に移しかえられていくのをあなたは目撃する。通訳者は血を流している言葉をじかに受けとり、瞬時に咀嚼して、異なる言語で吐き出さなければならなかった。南アフリカの真実和解委員会公聴会の通訳担当者の一人が、次のように言ったことを思い出す。「つねに一人称を使いますから、『私』と言うとき距離がとれない。……私という言葉とともに、自分の身体を証言者が通りぬける」¹。沈黙、呻き、嗚咽。それらを身体にひき入れ、別の言語に組み替え、みずからの声にのせて発話するとき、通訳者の身体は誰の記憶を生きるのだろう。正確と迅速を要する作業。自分の声が伝達する内容への衝撃とたじろぎ。情動的反応と伝染。通訳者の身体もまた過酷な条件下におかれる。

大講堂の客席にて。許可証を首から下げた人たちが壇上の人物にむらがり、武器のように構えたカメラから閃光がくりだされた瞬間、あなたは身体中の血液が逆流をはじめ、地面がぐらつくのを感じ、近くの手すりにつかまって、呼吸を整えなければならなかった。証言者は舞台に立ち、いつせいに焚かれたフラッシュライトに身をさらしていた。きつくなでつけた束髪、深い皺におおわれた面長の顔、それを支える骨張った首筋、男物のシャツから突きでた細い腕。カメラはそれらを「被害者」の特徴として記録しようとしていた。壇上には身を隠すことのできる場所はなく、証言者は立ちすくんだ。毅然としていた表情は消え、殻がさっと閉じられ、顔をもったまま顔が失われたようにあなたにはみえた。あなたの視覚からも、いつしか色が失われていた。

証言する者とそれに耳を傾ける者の関係性に内在する根源的暴力。見知らぬ人間の視線を意識しつつ、出来事の記憶に何度でも向き合わなければならない証言者の苦悩を想う。その瞬間、空間を切り裂くフラッシュライトが、壇上の人物にある徴しを刻印し、それ以外のすべての属性を奪ったようにあなたにはみえた。カメラは壇上をみつめる者がいだけ疾しさを視覚化してみせただけでなく、あなた自身の内層をも思いがけず露出させた。視覚は色を失い、存在はかろうじて混沌を生きのびようとする。出来事をめぐる責任の所在は余所にあると知りつつ、やはり沈黙することを選んだ無数の匿名者たちの慄きをあなたは目撃していた。

あなたの恐怖をみること。メビウスの帯のようにぐるりと廻って、それがわたしの不安と戦慄を凝視することでもあるとしたら……。出来事の混同でもなく、共感や感情移入とも異なる名づけがたい経験の領域。わたしからあなたに投射された閃光の暴力は、わたしの

身体に沈めてあるガラス製の密閉容器をも粉碎する。飛散したガラス片の輝きに目をほそめた、あなたの視線の先にあったもの。それはまぎれもなくわたしの血液であり内臓であった。あなたのすべての行動を不気味に方向づけてきた出来事の記憶。それらはいま封印を解かれ、歴史を構成する出来事の断片として、わたしの手に握られている。

証言者たち、沈黙することを選んだ者たち、出来事をかかえもつすべての者たちへ。

「わたしの恐怖をあなたはみななければならない」とあなたは言った。

わたしにはそれをみる用意があるだろうか。

¹ Krog 195 頁。本作品における同書からの引用はすべて、山下渉登訳『カントリー・オブ・マイ・スカル——南アフリカ真実和解委員会〈虹の国〉の苦悩』（現代企画室、2010 年）を参考に、著者が訳した。

第2部

インタビュー・スクリプト

Y.U. (学生)

最初に「慰安婦」という単語を聞いたのは、中学校の世界史の授業でした。従軍「慰安婦」のことは教科書には載っていませんでしたが、南京大虐殺について習っている時に、先生が説明してくれて、衝撃的だったのを覚えています。その後は、自分から積極的に詳しく知ろうとは思っていませんでしたが、新宿で行われていた従軍「慰安婦」の写真展をたまたま知って見に行った²。その後、知り合いから早稲田にある従軍「慰安婦」に関する資料館についてうかがい、そこに足を運んで、さまざまな資料を読みました³。

中学校の世界史の先生から、南京大虐殺の話、その影には戦争の犠牲になった女性たちもいて、それが従軍「慰安婦」と呼ばれていて、性的に虐待された女性たちがいたということを知った。びっくりはしたんですけど、想像できない範囲ではなくて...。そういうふうな犠牲になった人たちにちゃんと「名前」がついているんだな。そういう印象でした。従軍「慰安婦」って、聞き慣れない感じの単語だったけど、名前がちゃんとあるんだなと思いました。そのときの歴史の先生は女性で、若い方でした。20代前半くらい。本当は日本史を担当している先生が、世界史も教えていた。学校は女子校で、生徒は女の子だけ。今考えると、もし女性の先生じゃなかったら、「慰安婦」のことも言わなかったかなという気がします。

そのことについて、友だちとは話さなかった...。「慰安婦」のことについて、まったく人と話したことはないです。早稲田の資料館にも行ったんですけど、そのあともその資料館のことを教えてくれた知り合いと話したくらいで、友だちとは話したことはないですね。写真展も一人で行ったし。なんでだろう？そう聞かれると、なんで人と話さないんだろうって思います。自分のなかでいろいろ知ってびっくりはするけど、自己完結しちゃっていて、人に伝えることはないような気がする。

安世鴻さんの写真展について知ったのは、高校のときに自分も写真をやっていたので、それで...。写真展に行くと、別の展覧会のチラシがいっぱい置いてあるじゃないですか。それを取る習慣があつて。何かの写真展に行ったときに、ポスターかチラシがあつたんだと思います。写真展には一人で行きました。会場には何度も行ったことがあつたんですが、あんなに混んでいるときは一度もなかった。いつも人が少ないのに、その日は外から見てわかるくらい、すごく人が多くて「なんだこの騒ぎは！」と思った。写真展の前だけじゃなく、建物の外にも警察がいました。荷物チェックされて、飛行機に乗るときみたいに金属探知機もあて

²2012年6月26日から7月9日まで、東京新宿のニコンサロンで開催された安世鴻氏の写真展「重重—中国に残された朝鮮人元日本軍『慰安婦』の女性たち」。ニコンサロンの審査で選ばれ、写真展開催が決定されたにもかかわらず、開催前にニコン側からの一方的な中止通告があつた。写真家が仮処分申請を出し、それが裁判所に認められて、展示は行われることになったが、過剰な警備や金属探知機の導入など、正常ではないかたちでの展示を強いられた。

³東京西早稲田にあるアクティヴ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館 (wam)」。

られた。ギャラリーのなかに立っている人たちも「この人たち絶対写真が好きじゃない」という感じの人ばかりだったんです。全然写真の方も見ていなかったし。すごい違和感があった。

私そもそも、従軍「慰安婦」だった方たちがいまも生きていることを知らなくて、その写真展をみたときに、生きている方たちだったんだと思って、それでびっくりしたんです。その方たちがいま生きていて、写真展で顔なんかも見えるんだと思うと、過去の話だと思っていたのが、同じ時代に存在しているということがびっくりでした。写真をみると、その方たちはすごく質素な生活をしていて、国からお金は出ていないのかなと思った。会場に少し説明もあったと思うんですが、国に帰れていない人たちもいるんですよ。韓国から連れてこられて、いまもまだ中国に残っていて、どっちの国の言葉もよく話せない方もいる。小さいときに韓国から連れてこられて、中国語も中途半端だし、それでも家族に会う顔がないと言って、いまもずっと中国に残っている。すごくかわいそうだなと思った。だって、自分のせいではないのに、家族に会う顔がないっておかしいですよ。

〔安世鴻『重重——中国に残された朝鮮人日本軍「慰安婦」の物語』をみながら〕この写真も覚えている⁴。どこを見ているんだろうと思って…。えっ、男性〔の写真家〕なんですか？女性だと思っていた。よくこのおばあさんたちも話してくれましたね。ルワンダで虐殺があったときに、フツが人数が少ないにも関わらず優勢だったじゃないですか⁵。ツチをレイプするということがたくさん起こった。レイプされた女性は大体子どもを中絶したんですけど、なかには子どもがかわいそうだと思って、産んだ人もいた。その子どもを産んだ女性たちの写真をまとめた〔ジョナサン・トーゴヴニクという〕人がいて、その人も男性なんですけど⁶。それも私はびっくりした。男性がインタビューして、女性が答えるというのが…。インタビューしているところも想像できないし、どういうきっかけで心を開くんだろうって思います。その女性たちもかわいそうで、家族からは家を追い出されて、誰にも知られずに子どもとだけ暮らすんですけど、その女性たちが「ときどき自分はこの子どもを愛しているかどうかかわからない」って言うんですよ。レイプされた人の子どもで、そのせいか自分の子どもが凶暴のような気がするとかえたり。

早稲田にある資料館でのデータが最初に証言に触れた機会です。痛々しい話を読んでいるうちにまるで自分の体が痛み出すような錯覚を覚えました。しかし、読むことをやめられず、すべての証言を読み終え、強烈な吐き気と憂鬱な気持ちに襲われました。普段の生活において、〔彼女たちのことを〕思い出すことはありません。しかし、日中の対立や、韓国との対立を見ていると、彼女らの存在を無視した議論が続いていることに違和感を覚えます。そし

⁴安世鴻『重重——中国に残された朝鮮人日本軍「慰安婦」の物語』大月書店、2013。

⁵回答者の記憶違い。実際には、ルワンダではフツが多数派で、少数派のツチを迫害した。

⁶ジョナサン・トーゴヴニク『ルワンダ ジェノサイドから生まれて』竹内万里子訳、赤々舎、2010。

て、彼女たちが亡くなった後は、だれもその存在を確かなものとして断定できなくなるのは、悲しいことだと思いました。

従軍「慰安婦」の話は、普段の生活のなかでは全然出てこない。例えば、うちのお母さんはスナックをやっているんですが、中国人のお店っていうことを売りにしていて、雇っているのも全部中国人の女の子なんです。たまに島のことが問題になると、お客さんが冗談で「お前らは悪いことしている」みたいなことを言うんですよ。まあ冗談だっただけでわかっているから、女の子たちも「お店のなかではそういうことは関係ないんです」とか言って、ごまかすんです。でも、そういうときに従軍「慰安婦」とか、そういう話って全然出てこない。たぶんその存在を知っている人もいないだろうし、陰に隠れているんだなあって思います。なんでだろう。そういう政治的な話って無機質じゃないですか。人間対人間の話であるはずなのに。傷ついている人も多し、こういうことの方が本当はもっと重要視されなくてはいけないのに…。生々しいから隠れちゃうのかもしれないと思う。そういうものって、みんな眼を逸らそうとするじゃないですか。

お母さんと「慰安婦」のことについて話したりすることまったくないですね。でも、南京にはたまたま行ったことがあって。お父さんと一緒に行ったんですけど。お父さんの出張についていった。そのときに、お父さんが「南京の人は日本人にあまり好感を持っていないから、日本語はできるだけ喋らないようにして。ちょっと危ないから」って、そういう話をしたりはしました。それはまだ「慰安婦」のことを知る前で、南京大虐殺のことを知っていたかなあ？中学でそれを習う前に行ったので。だから、中学校の授業では、あのときに行った南京でこういうことが起きたのか、という感じでした。

(2013年10月 早稲田)

K. O. (文学部教授)

「慰安婦」問題については、新聞なんかの記事が出れば読むけれど、それで自分が何かしようとか、行動を起こそうというほどの関心はなかった。報道や新書程度のもを読んだくらいかな。学校教育では受けたことはない。当時の小学校や中学校で教えるにはちょっとね……。今は教えているのか知らないけど。どのような認識をお持ちでしたか、って聞かれると困るんだよね……。自らすすんで喜んでやった人はいないと思うんだ。ただ、日本の国内でも、東北の飢饉なんかで、娘を東京に売って金をもらって、そういう仕事をさせたという話はよく聞いていたし、いろんな要素が絡み合っているんだと思う。それから、当然、嫌だけれど他に生き方もなくて諦めていた人もいたんだろうし、今日の展示にあったように、

何がなんだかかわからないうちに連れて行かれて、行ってみたらそういうことだった、という人もいたんだろうな⁷。それに対して「お前どう思う」と言われても、「うーん」と思うだけで言葉が出ない。

それは「慰安婦」のことだから、というわけではなくて……。舞鶴は大陸からの引揚者が上陸した港なんだね。その近くに、引き揚げ経験を扱った博物館があつて、こっちは逆に、シベリアに抑留された日本の兵士が犠牲者なんだ。そういうものを見て歩いても、結局、言葉は出ないんだよね。時代の流れのなかで、個人がどうにもならない力に引きずり回されて、運のよかった人は助かって帰ってきたけれども、向こうで死んでしまった人もたくさんいる。広島平和記念資料館をみたときも、そう思った。とにかく一筋縄ではいかない状況のなかに搦めとられて、悲劇的としか言いようのない人生を送った人たちがいる。小林秀雄の「歴史とは、人類の巨大な恨みに似ている」という言葉がふと浮かんできたのを思い出すね。こういうことかな、と思う。

元「慰安婦」の証言に触れたのは今日が初めてだけど、展示をみて、ここにそういう具体的な人がいるんだな、という感じをもった。だから、これからこういうことが話題になったときに、今日見たことを絶対思い出さずと思う。今まではどっちかという一般論の問題としてとらえていたからね。そういう意味では、こういうのを見ておくのはいいことだね。wamの入り口に並んでいる証言者の写真を見ていた。もうみんなおばあさんになった顔だけど、ちょっと今のうちのおふくろに似ている人もいるしね。若い頃はみんなきれいだったんだろうな。知覧の特攻平和会館に行ったときも、飛び立った兵士たちの写真がたしかあんなふうにならなくていいと思う。いや、あそこは名前がずらっと書いてあつたかな。あのときもやっぱり言葉は出ないわね。見ていだけかな……。こういう経験をされた人の前に立つと、何を言っても空々しい。そういう気持ちのほうが強くてね。気の毒だなと思うけど、「気の毒」という言葉も軽いでしょう？ でも、ほかにどんな言葉が出てくるのか。「運が悪かった」なんて他人事みたいだしね。

人間って、いろんな悲惨な事態が生じて、自分と直接関わっている人でないかぎり、「気の毒だな。かわいそう」という気持ちと同時に、「自分でなくてよかった」という気持ちを持つ。エゴイスティックに聞こえるから、誰もそう言わないけど、誰でもそう感じていると思うんだ。トルストイの『イワン・イリッチの死』という小説がある。主人公が45歳くらいで死ぬんだけど、冒頭の章に何が書いてあるかというと、同僚たちの反応なんだね。「死んだのはあいつで、俺じゃなかった」と言う。〔表面的には〕みんな「気の毒だ」とか「かわいそうだ」とか言うんだけど、そこはトルストイだから、人間のエゴイズムをえぐっているよね。

⁷アクティヴ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」(wam), 第11回特別展「台湾・『慰安婦』の証言——日本人にされた阿媽たち」(2013年7月～2014年6月開催)。

それから、とくにこれは女性の問題だけど、「これが私だったらどうだろう」とまで考えられるかどうかだね。時代や状況によってはわからないもんな。俺だって銃を担がせられた可能性だってあるわけだ。『人間の条件』という映画を学生時代にみて、あれは五味川純平の原作も読んだけど、非常に印象的な作品の一つだった⁸。淡島千景が売春宿の女将さん役だったのかな。梶というのが主人公で、梶だけはそこ〔売春宿に行く兵士たち〕に交わろうとしないんだよね。映画だから、理想的な主人公にしてあるわけだけど……。そうすると、卑しい顔をした兵士たちがぞろぞろと売春婦の部屋に入っていき姿が映るわけだよ。たしかに映画でみて、醜いよな。そりゃ、梶のように振る舞った方が恰好いいよ。映画というのはそういうふうにできているからさ。その辺は、現実はどうなんだろうなと思いつつ観たけど。そういう状況はあったんだろうと思う。なかには、そこに行かない兵士もいたかもしれないけども、おおよそは行ったんじゃないかな。そういう状況に自分がいたら、どうだったろうかと……。あまり考えたくないけどね。

うちの親父は台湾にいたからね。敗戦末期の頃になって、台北の高射砲部隊かなんかにいたそう。うちの親父の話なんかは、わりあいのんびりした話なんだよな。親父の下に弟が二人いたけど、すぐ下の弟は幼くして死んでいて、もう一人の僕の叔父さんにあたる人はビルマで戦死している。親父は長男だったから、赤紙がくるのが遅かったんだろうとは思う。台北の高射砲部隊に配属されたという話は聞いたな。二等兵で。それで、うちの親父に妹がいて、戦争末期くらいに結婚したのかな。その相手が親父より年齢は下なんだけど、階級は上だったんだよ。上等兵だったかな。だけど、うちの親父の妹のフィアンセだから、親父の方が威張ってるんだよ。外出なんかすると、上等兵が二等兵の親父を自転車の後ろに乗せて、時間に遅れないように、一生懸命漕いだりなんかして。門番の兵隊がびっくりして目を丸くした、とかね。そんな話を聞かされているからね。戦後、会うと思ひ出話をするわけだけど……。慰安所の話は聞いたことはないな。その頃は、うちの親父ももう結婚してたのかな。「敵機が来たときはどうだったの？」と聞いたりして、そういう話はしたけどね。こっちからパンパンって高射砲あてるんだけど、全然当たらないんだって。あんまり長時間照らしていると、今度は探照灯を照らしている自分が敵の的になって、危ないから「退避、退避」となる、とか。まあ、うちの親父は陽気だったからね。そういう笑い話風な思ひ出話は聞かされたけど、「慰安婦」とかそういう話は聞いたことがない。

僕はとにかく戦後の生まれだから、具体的な戦争は知らないわけだけれども……。テレビが入った頃だから中学生のときかな。最初に記憶に残っているのは、戦争物の実写版ドキュメンタリー番組だね。真珠湾攻撃、ミッドウェー海戦、ガダルカナル島の戦いとか、テーマを定めた30分番組があって、そういうものを毎週見た記憶がある。最初の関心は、子どもながらに戦闘だった。「ここで負けたのか、チクショウ」とか感じたよね。それからあとは映

⁸映画『人間の条件』（小林正樹 監督、仲代達矢 主演）は、1959年から1961年のあいだに製作された全6部から成る映画。五味川純平の同名小説が原作。

画だね。当時『ハワイ・ミッドウェイ大海空戦 太平洋の嵐』という映画があった⁹。そういうものとか、『明治天皇と日露大戦争』とか¹⁰。歴史の勉強みたいで面白かったけどね。小学校か中学校の頃だったんじゃないかな。高校生になってからは、そういうものは観なかった。

あとは、日本の戦争の問題を考えると、いくつかのレベルがあったんだよね。一種の技術論みたいなもの——ミッドウェーで勝ってれば、その後の戦局は違っていたとか、そういう技術論。もうちょっと大きくなってからは、世界史の流れのなかでの日本の動きだよ。こっちは専門家ではないから、誰の書いたものを読むかによって、全然変わっちゃうんだけど。ものによっては「無茶なことやったよね。ここで妥協できなかったのかな？」と思うこともあるし、「やっぱり仕方なかったのか。当時の状況としてはこうなるか」と思うこともある。そういう大きな流れと、具体的な戦術論と、「慰安婦」のような問題とみんな絡んじやっているからね。銃をぶっぱなして、逃げようとする「慰安婦」を脅した人たちだって、ただサディスティックな趣味でやっていたわけではなくて、戦争の中で責任が与えられているわけでしょう。それを守ろうとすると、統制はとらなくちゃいけない。「慰安婦」たちが言うときかないような状況になれば、監督官が上から懲らしめを受けるに決まっているから、多少の暴力を使ってでも秩序を維持しようとする。そんなようなことがいろいろ感じられちゃうのね。だから、このような問題にしても、これだけを単独で取り出して聞かれても、という気がしてしまう。実際にそういう酷い目にあった人に対してはもちろん気の毒だと思うんだけど.....。

あとは、たまたまそういう状況のなかで、歴史の類いを映画でもなんでも見て思うのは、俺たちの世代は恵まれた世代だなんてこと。でも、それは自分たちが正しかったからそうだったのではなくて.....。親の世代は戦争中にあれだけ苦労して、犠牲者も出ている。その結果、次の世代は——ぼくももう 66 歳になるけど——そういう意味での大きなことはなく生きてきたけど、今後はわからないという感じがするね。

「慰安婦」問題については、誰とも話したことはない。女房とは話したけど。「いまこんな問題を三宅君から与えられている」って（笑）。タブーということについては、僕はだいたい世の中のタブーというのは気にしない方だけどね。僕がもしこれをタブーととらえていれば、きみとこういう話はしない。「なんか他の話題にしよう」って言うはずだから。あまりタブーは気にしない。だから、ときどき女房と話しているときも、かなり不謹慎なことを話して女房の顰蹙を買ってる（笑）。

(2014年2月 新宿)

⁹映画『ハワイ・ミッドウェイ大海空戦 太平洋の嵐』（松林宗恵 監督）は東宝製作の特撮戦争映画。1960年公開。

¹⁰映画『明治天皇と日露大戦争』（渡辺邦男 監督）は新東宝製作の戦争映画。初めて役者（嵐寛寿郎）が天皇役を演じたことで話題になった。1957年公開。

S. N. (歌い手)

「慰安婦」問題について、最初に聞いたのがいつだったか、あまりちゃんと覚えていないんだけど、「慰安婦」と「中国残留孤児」の話を混同していたみたい。そのふたつが記憶のなかでつながっている。高校生くらいだったと思うんだよね。社会の授業かなにかで、「中国残留孤児」の方たちが日本に来て、家族に会ったり、戦争によって家族が引き裂かれたという話題になったことがあった。そのときに「慰安婦」という人がいたという話になった。それが初めだっただろうなと思う。

私も近代史の授業を受けなかったので、太平洋戦争とか、あの戦争のことを授業で勉強していない¹¹。だから、もっと前の歴史の授業だったのか、どこでだったのか〔はっきりしたことは〕忘れてしまったんだけど……。たまたまその日、朝のテレビのニュースかなにかで、それは「残留孤児」の方だったと思うんだけど、おばあちゃんが出てきて、家族と出会っていて、この方は中国から来た方です、という場面があった。その話を先生が〔教室で〕トピックとして出してくれた。それで、誰かが質問をしたのかなあ……。そのときに「慰安婦」という言葉を初めて聞いたんだよね。朝ニュースで見た光景と、教室で聞いた話の内容がつながったんだと思う。実際に、そういうことが起きているということが妙に現実的というか、その怖さが現実を感じられた気がした。

〔授業中は〕「慰安」という言葉の内容とか、全然そういう話はなかった。ただ、「『慰安婦』の問題がある」ということだけさらっと流して言ったような感じ。「慰安婦」の「慰安」ということがどういう意味かとか、そういう説明は先生も濁していたんじゃないかと思うんだよね。その言葉しか言わなかったと思う。そのあとになって、「慰安婦」ということがどういうことなのかを自分で知ったのかな。家に帰って、母親に聞いたとか、そういう感じだったと思う。そのときは「慰安婦」ということが、まだよく理解はできていなかったけど、日本という国がそういうことをやらせたということにとっても憤りがあったという覚えがある。それでそういうニュースを「どうやって受けとめたらいいんだろうな」っていうふうにしたのと、そこまですごく問題視するというよりは、対岸の火事じゃないけど「大変なことがあったんだな」〔とは思いつつも〕そことは切り離された自分になってしまっていた。

〔残留孤児のおばあちゃんの家族との再会の場面は〕すごく印象的だったから覚えている。戦争というもので引き裂かれていた家族が何十年ぶりに再会するということがショッキングだったのね。家族と引き離されたという体験は、当時の自分でも想像できたからなんだと思うんだけど。いまニュースで起きていることが、何十年も前のことが原因に〔なっていて〕、おばあちゃんがやっと家族に出会えた。過去と自分がつながっているという感覚を肌で感じ

¹¹ 中学・高校の日本史の授業では、古代から時系列的に学習するのが一般的であるため、授業日数の関係で近現代がしばしばおざなりになるのは問題だという認識が共有されている。

た。

このプロジェクトのテーマが「慰安婦」だと聞いたときは、〔自分は〕そこまで問題視してこなかったなあと思った。正直なところ、どういうふうを考えたり、とらえたりしていったらいいのか、迷ったりはしていて……。そういう実際に起きていること、起きてしまっているし、その問題に対して、日本のメディアだったり、人々のとらえ方だったり、全然塾度が増していないという思いがあるし、自分もそうだなと思った。社会問題への意識が自分は低いなあとあらためて思った。だから、問いかけられた「慰安婦」という問題について、自分がそのことをどのくらい学んで、知ったことに対してどれだけ意見を持てるか、となったときに、なかなか自分の意見になっていかないなあと思った。

自分のなかでは、スクリプトを読ませてもらった体験のほうが大きいのね¹²。読んでいるとだんだんその人になっていくというか……。その人の経験が自分の経験になっていくというか……。その人の口調を読んでいくと、その人の体験が自分のなかにもあったり。自分と似通っている部分はほんのちょっとかもしれないけど、〔自分のなかにもある〕感情の経験みたいなものが記憶として出てきたりする。それがすごく怖いというか……。そういう怖さがあったりする。しかも、〔おばあさんたちの〕の抑圧された経験というのは女性的なもの。抑圧されているというか、〔女性であるという〕その部分でつらい体験をしているということは、自分も女性として、どういうふうを考えていけばいいのか。答えは出ないものの、やっぱり起こったことに対して、一女性として、これは考えるべきだなあと思った。

wam の展示を見にいった、そのときのことで一番印象に残っているのは、証言の書かれた展示のパネルを一つ一つ読んでいったこと¹³。実際に、一人一人のなまの言葉をみると、文章で説明されるというよりは、目の前で話をしていただいたときと同じような感じがした。スクリプトを読んだときと同じで、言葉が身体に入ってくる感覚があった。自分は同じ体験をしていないんだけど、話をしている人をみたら涙がでてくる。それと同じような感覚があって、それは許してはいけないことだろうという、絶対にわき起こる憤りみたいなものが自分のなかにはつきりあるんだな、と感じた。そこから「慰安婦」問題に対して、実際に意見をもつ、というところまでは話せないんだけど……。でも、そういうことが現実には起きているし、おばあちゃんたちが幸せになるような方向に、今からでもサポートができるのか。どういう活動ができるのか。それに対して、何ができるかわからないけど、とにかく、そういう状況になっているということに憤りを持っている自分に気づいた。それをうまく「こうすべき」とかそういうことはうまく言えなくて、肉体的な意見しか言えないんだけど……。

(2014年2月 原宿)

¹²企画者の依頼で、回答者には「慰安婦」に関するテキストの朗読と録音をお願いした。

¹³アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」(wam)、第10回特別展「軍隊は女性を守らない——沖縄の日本軍慰安所と米軍の性暴力」(2012年6月～2013年6月開催)。

K. B. (大学非常勤講師)

最初に「慰安婦」という言葉を目にしたのがいつだったか、残念ながら失念してしまい、気がつくと、日韓の間で、あるいは国際的に問題になっているテーマとして浮上していた。日本政府が認めたがらないことから日本の負の財産であり、南京とともにないことにしたい事実だろうと考えていた。情報源としてはとっている朝日新聞と週刊『金曜日』だが、むしろ『金曜日』から得る情報のほうが多い。ただ正直言って映画「ナナムの家」を観たあとの20年ほど、常に深い関心を寄せていたとは言えない。水俣病、沖縄、南京などと並ぶ重要な問題のひとつであり、常に国が忌避し、責任の所在の曖昧化を図ってきたもののひとつとは認識していたが、それ以上ではなかった気がする。

元「慰安婦」の方の証言に初めて触れたのは、『ナナムの家』という映画を見て元「慰安婦」の方々の話を聞いたとき¹⁴。本当に申しわけないと思うとともに、このような組織的・暴力的な非道を、日本政府（あるいは日本軍）は認めたくなくても認めるべきだと思った。『ナナムの家』を観たのは1993年から1995年あたりかなと思われる。娘と一緒に観たのだが、娘は当時小学校高学年から中学生の間だった。当時川崎市職員の労働組合に青年部という活発な部署があって、連れ合いがそこにおり、その中にこの問題に取り組んでいた人が上映運動をした関係で観に行った。（連れ合いはすでに観ていて、受付か何か？をしていた。）上映された場所は覚えていないが、川崎市のたとえば中原区の市民会館みたいなのところだったと思う。上映の前後にこの問題についての話・アピールがあった。

ただ残念ながら、映画を観たあとに娘とそのことについて話し合った記憶がなく、娘も観たことを覚えているのかどうか...。今度聞いてみたくなった。たぶん当時は、これは観なきゃいけない映画で、子供にも観せたいと考えたのだと思うが（息子たちは中学高校の部活で忙しくしていたので）、娘も微妙な年齢で微妙な問題？なので、率直な話がしにくかったのかな、と思われる。私自身は、ハルモニの名前やはっきりした顔は覚えていないが、あの家の雰囲気や彼女達が訥々と話す様子が頭に残っている。胸が痛むとともに、地獄のような状況をくぐり抜けた彼女達に、諦念とは違う不思議な明るさがあり、それは苦労した果てに得た、突き抜けたたくましさなのか、とも思った。

今までは比較的感情的に考えていたが、wamの展示をみたことで、かなりの全貌が見えた気がする¹⁵。例えばどういう人々がいつ頃どういうルートで、どういったやり方で連れて行かれたのか、数はどれくらいだったのか、世界でも性暴力は絶えないがこうした規模や方法

¹⁴映画『ナナムの家』は、ソウルの「ナナムの家」に住む元従軍「慰安婦」だったハルモニ（おばあさん）たちの日常を記録したピョン・ヨンジュ監督のドキュメンタリー作品。1995年公開。続編として『ナナムの家2』（1997）『息づかい』（1999）がある。

¹⁵アクティヴ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」（wam）、第11回特別展「台湾・『慰安婦』の証言——日本人にされた阿媽たち」（2013年7月～2014年6月開催）。

はあったのか、など。詐欺や偽の勧誘があるとは聞いていたが、証言者の話の中でその具体的な様子がわかった。武器をもった軍人に脅されながら連行され、拒めば暴力が待っている状況の中で「強制性はなかった」とはとても言えないと感じた。展示は資料に基づいた事実を扱っていると思うので、この歴史的事実を勉強する場として重要だと思う。

今までは「事実関係」を詳しくは把握していないのに、「また国がごまかしてるに決まってる」と不信感だけがついていた。これは私の悪い癖？で、こうした“直感”や“感情”が間違っていたとは思わないが、これは「事実関係」の問題なので、「事実関係」を知ることが大事だ。そうした意味で、展示を見てそれまでより細かい事実を知ったことは収穫だと思うし、“裏付け”を得たことで人に話しやすくなった気がする。逆にこの「事実関係」を否定したい人は、「感情」だけに訴えるということだろうか。

これまで「慰安婦」問題については、残念ながら、その関係の活動をされている方以外とはほとんど話したことがない。身近な人たちのなかにも、日本軍がやったことだから、きちんと向き合わなくちゃいけないと考える人も一定数いると思うが、普段の会話のなかにそれを持ち出すことがとても難しい雰囲気を感じられる。それを持ち出そうと思って失敗したとか、とくにそういう経験はないが、不思議とその話題にならない。橋本発言のときはさすがに「恥ずかしいわね」とか「バカなこと言ってるわね」とかそういう話はあったが、それ止まりという感じだった。そういうことを言った人に対して、もっと突っ込んで話を聞けば、いろんな話が出てきたのかもしれないが……。その辺は私の限界でもある。でも今回いろいろな細かい事実を知ったので、これまでよりは話すきっかけができたように思う。

この問題が南京大虐殺以上にタブー視されている気がするの、やはり性に関わることだからではないだろうか。もともと日本社会では、自分も含めて、率直に性のことを語る文化がない。その上、長く日本社会で当然視されてきた公娼などの暗部につながる問題であることが、いっそう禁句にさせているのではあるまいか。それが、これだけの「犯罪」を黙認することにつながるとしたら、被害者の方々に申しわけない。

(2014年3月 鷺沼)

M. M. (語学講師)

従軍「慰安婦」という言葉を最初に知ったのは、中学生か高校生のとき。日本史の授業がすごく退屈で、かといって他に何かするでもなく、その日の授業とは関係ない教科書のページをめくって読んだりしていた。小学生の頃から、太平洋戦争のことには関心があって、戦争

について書かれた本や小説なども読んでいたので、学校の教科書にはどんなふうにかかれてあるのかなという興味があった。そのときに、日本軍従軍「慰安婦」という語を見つけた。私が中学・高校時代を送ったのは 1990 年代。ちょうど小学校から中学校に上がったのが 1991 年で、韓国で一人目の元「慰安婦」女性が名乗りでた年。当時は、日本史の教科書には従軍「慰安婦」についての記述があったが、金学順さんが名乗りでたというニュースは知らなかった。家庭でも学校でも「慰安婦」のことについて聞いた記憶はない。

したがって、従軍「慰安婦」問題との最初の出会いは、純粋に言語上のものだった。教科書で見つけた「慰安婦」という言葉の響きと字面には強烈な違和感があったけれど、その語が指し示す正確な内容はわからなかった。それが女性を指していることは想像できたけれど、「従軍」とか「慰安」とか、不自然に堅苦しい語が与えられているせいで、具体的な存在のイメージを抱くことができない。彼女たちがどんな顔をもち、どんな声で話すのかを思い描くことができなかった。生ある人間を抽象的な観念にしてしまう、そんな言葉のように感じた。しかも、「慰安」が性的なことを指すことはなんとなく察しがついたので、重圧感のある語と、そこから連想される行為の生なまじさのつくり出すギャップに衝撃を受けた。これは一体何だろう、と。当時はそれが性暴力であり、植民地支配下での性奴隷制度であることには気づいていなかったけれど、その語が前提とする考え——戦場で女性が兵士に「慰安」を与えるという発想に吐き気をおぼえた。その吐き気は、社会が自分の性をみる視線や、自分の性に期待する役割について、普段なんとなく感じていた違和や不満とも通底するものだったが、当時はそれに言葉や思考を与えるというよりも、むしろ、自分の身体の性的特徴などを否定すべきものとして消去したいという衝動となって表われていたように思う。

そのあとしばらく「慰安婦」のことは意識に上らなかったが、大学院生時代、英文学を専攻していたときに、イギリスの帝国主義の歴史や植民地の独立運動、歴史認識の問題などを勉強した。ポストコロニアリズムや帝国主義研究を踏まえた文学研究に少し関心があったので、そのなかで、日本の帝国主義についても勉強するようになって、「慰安婦」問題に出会った。

子どもの頃から、太平洋戦争の証言や体験記などを読んでいて、戦争記憶の継承ということにも一定の関心はあったが、「慰安婦」問題を意識するようになる前は、日本軍の加害の側面もあわせて考える視点を獲得できていなかった。原爆や沖縄戦、東京大空襲の証言集を読んで、戦争がいかに残酷なものであるかを知ってはいたけれど、日本が受けた被害という側面に特化して理解していたように思う。元「慰安婦」の方が名乗りでて、日本軍の行なった残虐行為のことが知られるようになったことで、戦後の日本で作られてきた戦争のナラティブ——日本政府の帝国主義や天皇制に対する批判の視点を欠いたうえで、被害の側面に特化して戦争を語る姿勢の不当性に気づくことができた。戦争は殺し合いだから、必ず両方の側面があるはずなのに、被害の事実と比較して、加害の事実は忘却されやすい。日本社会における戦争をめぐるナラティブがいかに被害性に特化した一面的なものであったか、それを自分がいかに深く内面化してきたかに気づいた。

私の心をもっとも揺さぶったのは、慰安所に吊り下げられた女性たちの名前を記した木札の写真。ある本に載っていたもので、戦争時代に撮影された写真資料だと思うが、木札に墨で黒々と日本の女性の名前が書かれてあった。「愛子」のほかにもどんな名前があったか失念したが、現在でも同じ名前をもつ人は多くいる、日本でよくある女性の名前を書いた札がずらりと並んでいる写真だった。慰安所で働かされていた女性に日本名が与えられていたことや、朝鮮に対する創氏改名のことも知識としては知っていたが、ずらりと並んで吊り下げられた木札の写真を目にしたのは衝撃的だった。家族や友人の名前をそこに見つけることができた。私の名前はたまたまその写真に見つからなかっただけで、無数に存在した日本軍慰安所のいずれかの場所で、誰かが私と同じ名で呼ばれていたであろうことは想像できた。彼女たちから名前を奪い、「私」の名前を与えたのは誰なのか？ 疑問と怒りが湧いてきた。「慰安婦」制度をつくって運用した人間に対する怒り、それを当たり前のものであるとして受け入れた人間に対する怒り、女性たちの性を蹂躪し、名前を奪い、性奴隷の状態につなぎとめたことに対する怒り。それ以来、証言を読むときには名前に注目するようになった。「あいこ」「みつえ」「かよこ」「なみこ」など、慰安所の女性たちに与えられていた名前をとおして、身体的にこの問題に結びつけられるような気がするし、私もこの問題の一部なのだと感じる。

元「慰安婦」の方の証言を初めて聞いたのは、女性国際戦犯法廷の10周年を記念する国際シンポジウムのとき¹⁶。その日の前と後で、何かが決定的に変わってしまったような、そんな経験になった。それ以前にも、本などで証言に触れたことはあったし、この問題についてそれなりに勉強もしていたが、ご本人が直接語られる場に積極的に身を置こうとしたことはなかった。どうしてそのシンポジウムに行くつもりになったのかはわからない。その日のことは、情報として友人から聞いていたが、当日の朝ギリギリの時間まで迷っていた記憶がある。勇気が出なかったというか……。行けば決定的な経験になることを予期して恐れたのかもしれない。

第二部の証言が始まる少し前に会場に到着した。大学の講堂の外には、警備の人たちが多く立っていて異様な雰囲気があった。IDカードを首から下げていない人は会場に入れないという厳重な措置がとられていて、私もカードをつくった。そんな手続きを必要とするシンポジウムは初めてだったので、その物々しい雰囲気に驚いた。右翼団体や差別主義者を会場に入れないための措置だということは知っていたが、その妨害活動や嫌がらせがそこまでひどいものだとは知らなかった。とにかく、会場の厳重な警備はとても印象的だった。これから聞くことになる証言の苛烈さを予告しているようにも感じた。

¹⁶2010年12月5日に東京外国語大学で開催された、女性国際戦犯法廷10年・国際シンポジウム「『法廷』は何を裁き、何が変わったか～性暴力・民族差別・植民地主義～」第2部「アジアの日本軍性暴力被害者の証言を聞く」に、韋紹蘭氏、羅善学氏（中国・桂林）、ナルシサ・クラベリア氏（フィリピン・ルソン島）、エリザベス・コックス氏（バプア・ニューギニア）が証言者として登壇した。

その日は、中国とフィリピンとパプア・ニューギニアから4人の証言者が登壇した。中国・桂林から来たという親子——日本軍によって「慰安婦」にさせられた女性と、彼女が慰安所生活のなかで身ごもったという息子の証言が心に突き刺さった。「日本鬼子」と周囲から蔑まれ、日常的に虐待を受けてきたという男性が「自分の人生についてはもう諦めているから、せめて母親に対する日本政府の謝罪を望んでいる」というようなことをおっしゃった。親子のあいだでも（であるからこそ？）互いに触れることのできない話題（それこそが二人の痛みを結びつけているものであるにもかかわらず）があるようだった。男性は私の父親くらいの年齢にみえたが、その物腰や話しぶりから、彼の苦悩が生年の年数と同じくらい長く、深いことが見てとれた。

証言を直接聞くのは、この日が初めてだったが、証言の差し出される場に臨むのがそこまで肉体的に消耗するものだとは思っていなかった。もちろん、証言者の方がもっとしんどいだろうが、椅子に腰かけて聞いていただけの私も、4名の証言者の話が終わる頃には虚脱状態になってしまい、その日は会場を後にしてからもずっと安心してた。ただ聞いていただけのように思っていたけれど、私の身体もずっと何らかの情動的反応を返そうとしていたのかもしれない。それくらい肉体が消耗した。会場は大講堂のような場所で、私は舞台からは遠く離れた2階席に座っていたが、まるで目の前に証言者がいるかのように感じていた。

通訳を介して、証言を聞いたので、声と意味の受けとりにタイムラグが生じたためかもしれない。証言者が話しているあいだは、意味を追うことから解放されていたために、そのくぐもった声の調子や、証言が差し出される空間の震え、絶望の深さ、頬をつたう涙、語りがもっとも辛い部分に到達する直前の表情の陰しき、緊張感、発言後の安堵の表情などが印象的だった。同時に、おばあさんの話している言葉を即時的に理解できないことがもどかしかった。日本語に翻訳されたかたちではなく、おばあさんの話している言語の響きや感受性として受けとりたいとも思った。そうすることで、おばあさんたちの痛みにも少しでも近づくことができるかのような気がしていた。もちろん、言語さえわかればいいというわけではないけれど、おばあさんの話す声や言葉を、そのままのものとして自分の身体に取り込みたい、のみ込みたいという衝動のようなものがあった。

証言以外のことで衝撃的だったのは、舞台中央に進み出た証言者に向かって、報道担当者のカメラのフラッシュが山ほど焚かれたこと。証言を聞くのが初めてだったから、もしかすると私の感じ方はナイーブすぎるのかもしれない。でも、できることなら話したくない話を取ってくださっている証言者の心情を想像すると、みんなの前ではたとえ気丈に振る舞っていたとしても、元「慰安婦」として被写体になるのは複雑な気持ちではないかと思う。もし舞台に立っているのが自分だったら、カメラの暴力に傷つくかもしれないと想像して、不安な気持ちになった。

シンポジウムに行ったあとは、受けとった証言をどうしたらいいのだろうと考える日々が続

いた。それは自分で望んだことではあるけれど、受けとったものをどうしたらいいのかわからなかった……。当日の情景を何度も反芻してはその重みに撃たれたり、この話をずっと心のなかに閉まったまま生きてきたおばあさんたちの苦悩を想像してみたり、自分の個人的な痛みと内臓感覚の部分でつなげてみたりする時間がしばらく続いた。もちろん、そのあいだおばあさんのことだけを考えていたわけではなかったけれど、歴史について勉強したり、自分になにができるだろうと考えるようになった。

(2013年4月 神楽坂)

A. V. L. M. (ポルトガル語講師, ブラジル出身)

日本軍の性奴隷制度については、大学時代に知りましたが、とても表面的な知識でした。ブラジルにいた頃、大学の選択科目として履修した「世界史」の授業で、戦争、とくに第二次世界戦争を取り上げたドキュメンタリーをみました。でも、それらの大部分は戦争自体を描いたもので、性奴隷を扱ったものではありませんでした。実際、そのドキュメンタリーのなかでは女性たちは「性奴隷」ではなく、「戦争の犠牲者」という名で呼ばれていました。ほかに、日本語学科の授業も履修していましたが、短歌、演歌、書道などの文化のことは先生が話してくれましたが、戦争についてはほとんど言及がなかった。日本の歴史についても、国内の戦争の話、ずっと昔の戦争の話はありましたが、現代の外国との戦争、とくに、第二次世界戦争についての詳しい話はありませんでした。

11年前に日本に来てから、アジアでの戦争の問題を取り上げたニュースに触れる機会が増えました。それで、この問題についてもっとよく知ることができました。日本軍による性暴力の犠牲者の一人を取り上げたドキュメンタリー映画『オレの心は負けてない』を観ることができ、元性奴隷の方々が日本政府に過去の過ちを認めるよう求めていることについて知りました¹⁷。それから、その戦争の内情について解説した本にも触れました。

映画『オレの心は負けてない』をみて最初に感じたのは、その戦争が存在したことへの怒りでした。それから、深い悲しみを感じました。戦争には二つの面だけが存在します。支配する側と支配される側です。巨大な支配者となるのは政府であり、兵士が戦って、集団に帰属しない者たちを打ち負かすように強制します。不幸なことに、宋〔神道〕さんは集団に帰属しておらず、それゆえ、すべての犠牲者と同じように屈辱をうけ、「モノ」として扱われま

¹⁷映画『オレの心は負けてない』は、在日朝鮮人元「慰安婦」宋神道氏の裁判の日々を記録したドキュメンタリー映画。安海龍 監督、「在日の慰安婦裁判を支える会」制作, 2007.

した。人権もない状態でしたが、おおくの義務を負っていました。支配する側の人間にとって、犠牲者は無であり、「モノ」なのです。だから、壊れるまで酷使したり、捨てることができる。彼らはそのように感じているから、赦しを請うたり、実際に何が起こったのかについての説明は不要だと考えるのでしょう。支配された側の人間にとっては、支配者はそのような力のゲームの一部を為しています。このゲームには基本的、かつ自然な法則があって、それは権力がある場所には隷属があるというものです。

歴史的事実を否定する政治家がいること、旧植民地における過去の残虐行為を矮小化する人たちがいますが、それについてはすでに言った通りです。過去の行動を誤りとして受け入れることは難しいことなので、彼ら〔支配する側にいた者たち〕がそのように考えるのは自然でしょう。私が知ったかぎりでは、敵を攻撃し、突進し、勝利し、皆殺しにせよという権力者の命令があったということです。兵士たちは洗脳されていました。軍の指導者を高揚させて、戦争における彼らの任務を強固にするという作戦でした。そのために、兵士たちは武器と憎しみを支給され、もう少し人間らしく感じるために、残虐行為のなかでももっとも重大なものを許してしまったのです。それはすなわち、女性たち、その多くはまだ子供でしたが、彼女たちを「慰め」のために使用することでした。

さまざまな国籍をもつ女性たちは、街路で偶然に選り出されました。狩りのようなものです。支配する者たちにとって、女性たちは人ではなかった。彼らは敵のなかに人間らしい側面を見出すことはなかったし、この場合、女性たちは敵の資格により分類されたのでもありません。単純に、彼女たちは戦争で使用される「モノ」でした。必需品であり、品物でさえあったのです。現在の多くの政治家にとっては、残虐行為は存在しなかった。だから、〔彼らからすれば〕説明することがないのでしょう。

日本軍性奴隷制度の話題を取り上げて語る人に、これまで一度も出会ったことがありません。話題について無知であるためか、あるいは問題の深刻さのためであろうと思います。戦争では、女性や子供がおもな犠牲者となることを、私たちは皆知っています。そして、このような宿命を前にしたとき、無意識のうちに、無力さを抱いてしまいます。「戦争なんだ。どうしようもない」と言うかもしれません。

ちなみに、ブラジルの刑務所ではさまざまな犯罪集団が「監獄のなかに」います。犯罪集団の家族が刑務所内にいる親類に会いに行くとき、妻や娘たちの多く、そして受刑者の母親までもが、受刑者の命と引き換えに、ライバル関係にある犯罪集団のリーダーと性的関係をもつよう強いられることがあります。そのような場面を目のあたりにすることに耐えられなくなった一人の弁護士のおかげで、このニュースは公になりました。そして、この問題は古くから存在し、人びとに容認されてきたものであることが明らかになりました。社会にとっては、収監されている者たちすべてが敵ですが、競合する犯罪集団にとっては、親類こそが敵となります。だから、そのような問題を抱えるリーダーが沈黙するのは、むしろ自然なこと

でした。「モノ」として扱われ、声を持たないレイプの被害者がいなければ、彼らは誰にも関心がありませんから。

これは、現在起きていることのほんの一例に過ぎませんし、戦場で起きたことでもありません。これは「当たり前のこと」として社会に浸透している一方で、論争にはつねにより強い側と弱い側が存在します。沈黙——市民の沈黙であれ、政治家や権力者の沈黙であれ、皆がこのことについて口をつぐんで話せない状況とは、集団としての共犯性と社会の都合に合意を与えることでありえる。しかし、それは沈黙を背負う者たちの魂を刺し貫く鋭利な凶器でもあるのです。

(2014年4月 赤羽)

R. N. (契約社員)

最初に従軍「慰安婦」の話聞いたのは、たぶん高校の世界史の授業のとき。先生が女性で、なんでその話になったのかは覚えていないんだけど……。学校は女子校。その授業ではテキストをつかって説明するという感じではなくて、「そういう女性がいたんだよ」という話をさらっと聞いた。そこで、初めて従軍「慰安婦」という言葉を聞いた気がする。高校二年くらいだったんじゃないかな。私たちの学校はちょっと変わっていて、歴史の教育をするのに古代史からはじめずに、第二次世界大戦ぐらいからはじまった。そこから入って行って、現代にはいかに、古代に戻っていくという指導法だった。ということは、高校一年生だったということかな……。その授業のときに、従軍「慰安婦」とか、満州事変のこととか、先生がすごくいきり立って話していたのをよく覚えている。

そのときは、「慰安婦」という言葉がどういう意味をもつのか、あまりはっきりとは描けていなかった。ただ、女性が性的なことで酷い目にあっていたという、そういうぼんやりした認識しかなかった。高校のときは、そのことについてさらに考えるということはなかった。でも、たぶん報道では見ていたんだろうと思う。女性がすごく泣いて何かを訴えていたことをなんとなくイメージで覚えている。どうして彼女たちが泣いていたのか、何を訴えていたのかとか、そこまでは全然掘り下げていなかったけど……。それが高校時代。

そのあと、従軍「慰安婦」問題については、大学の授業でもう少し詳しく知ることになった。「日本文化史」という授業で、一般教養科目の一つとして受講した。大学一年生か二年生のとき。二人の先生が担当する通年の履修科目だった。全体の半分を藤目ゆき先生、もう半分を別の先生が担当していた。藤目先生が担当の方はたしかジェンダー論だったと思うだけ

ど、ずっと従軍「慰安婦」のことをやっていた。報道で取り上げられた内容について先生が話したり、ビデオ教材を見たりした。どうしてその授業をとったのかは覚えていないんだけど……。講義室の後ろの方にひとりで座って聞いていた。

授業を受けてみて、いろいろ衝撃だった。戦争というものがそもそもそんなにキレイなお話ではないから、そういうことが当然ありうるとはわかっていた。だから、トピックとしては全然衝撃は受けなかったんだけど、それを証明する当時の記事とか写真、そういうものも藤目先生の授業で見た。慰安所の入り口に「大和撫子のサービス」と書かれた垂れ幕が掲げられているのを映した写真とか、衝撃だった¹⁸。「大和撫子のサービス？」って思った。そういうものを見て、本当にあったんだなということをちょっとずつ実感していった感じ。それと、中学校時代に、戦争当時満州に行っていたという弓道の先生がいらして、「えっ？ ということは、その先生はその辺のことも何か知っていたわけかな？」とか、そんなことを考えると、全然そんな話は聞いたことがなかったけど、ちょっと驚いたというかショックだった。

大学の授業のことで一番心に残っているのは、藤目先生が性的なことで商売する女性を否定しないという立場だったこと。生きていくために性を売らないといけないとか、それを生業とすることにプライドを持っている女性もしいるのであれば、それを否定しない方がいいんじゃないか、という立場だったと思う。たしかに、私たちもそういう商売をする人について、その方の事情とかまったく無視して、なんでわざわざ好き好んでそんな仕事をするのかという先入観で考えてしまうんだけど——男を惑わす人というか——そういうとらえの方が強かったりすると思う。でも、藤目先生の授業は、そういう気持ちをもつことを覆すよいきっかけになった、という印象があった。それを仕事にするのが悪いのではなくて、むしろそれを悪いことだと考えていることが、今の歴史問題についても、見えにくくしているというふうに思えるようになった。そういう考え方をそれまで持ったことがなかったから、新しい視点というか、視界がひらけたように思った。

昨年、「女たちの戦争と平和資料館」(wam)に行ったときは、大学時代にこういう話を聞いていたなという感じで、当時のことを思い起こす作業だった¹⁹。なにか目新しい気づきがあったという感じではなく、藤目先生がそういえばそんなことを言っていたなあと再確認する感じだった。ちょうど橋本発言が話題になっていた頃で、海外からの来館者がすごく多かった²⁰。あと、ネット右翼の若者が展示会場で騒いでいたのをみて、うちの母親と反応がおなじ

¹⁸昭和13年に、上海・江湾鎮に開設された慰安所の入り口に、「身も心も捧ぐ大和撫子のサービス」「聖戦大勝の勇士大歓迎」と墨で黒々と書かれた垂れ幕が掲げられているのを撮影した写真(『1億人の昭和史』第10巻「不許可写真」毎日新聞、1977、62頁)。

¹⁹アクティヴ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」(wam)、第10回特別展「軍隊は女性を守らない——沖縄の日本軍慰安所と米軍の性暴力」(2012年6月～2013年6月開催)。

²⁰2013年5月13日に、日本維新の会共同代表の橋下徹・大阪市長が日本軍「慰安婦」制度は「必要だった」と発言して、物議をかました。「あれだけ銃弾が雨・嵐のごとく飛び交う中で、命を懸けて走っていく時に、猛者集団、精神的に高ぶっている集団をどこかで休息させてあげようと思

だと思った。やたら声高く話していたし、すごく感情的になってたよね。「何を根拠にそんなことを言っているのか」としきりに聞いていたし。「何を根拠に」って、「あなたはこの展示をみたの？」っていう話なんだけど。切り返し方とか、ヒステリックな反応は母親と似ているなと思ったのを覚えている。ほかの人なら、ちょっと客観的に観察できるからね。こういう人と話し合いができるようになるためにはどうすればいいのだろう、って思いながら、片耳で聞きながら、展示を見ていた。

それと、あのとき wam の書棚に、毎日新聞から出ている本で、戦争時に軍の検閲にひっかかって、公開されなかった写真を集めたものがあるのを見つけた²¹。大学のときに、その本を図書館で借りて見たのを覚えている。なんであれを借りたのか、そのきっかけは覚えていないんだけど……。それが wam の書棚にあって、懐かしいと思った。いつ頃出版されたものかわからないけど、当時はそういうものを新聞社が普通に扱っていたんだなと思って……。でも、最近はあまりないよね。従軍「慰安婦」についてもそうだし、満州事変のときの話なんかも、メディアの扱いが極端に減っているなと思った。

従軍「慰安婦」のことについては、友達と話したこともないし、その話を振るのは結構慎重にならないといけないんだな、と思ったきっかけがある。バイト先で、在日の人をのしっているおじさんがいて、そこで初めてチョン公とか、そういう言葉をはじめで聞いて「こういう言葉を使う人っているんだ……」と思った。働いていたのはクリーニング屋さんだったんだけど、そこでよく集荷にくるおじさんと「最近どう？」とか言って、だいたい毎日世間話をしていた。なんでその話になったのか、私がどんな話を振ったのかも覚えていないし、なんでそのおじさんがそのとき急にむきになったのかもよく覚えていないんだけど、とにかくおじさんの顔が変わった。すごく目つきが変わったのを覚えていて……。あのおじさん、あの時なんであんなに怒ったんだろう？　すごくむきになったの。「むきになっている、この人」と思って、私も反論せずに、黙って聞いて。私とそのおじさんと二人しかお店のなかにはいないから、すごくいやな雰囲気になった。それで私は「そうですか。そういう考え方もあるんだ……」みたいな感じで、そのおじさんを送り出したのを覚えている。それ以上はそのことについて、朝鮮という言葉も出せないし、在日の方の話もできなかった。在日の方の話も、強制労働の話とか従軍「慰安婦」の話もたぶん同じだと思うけど、そういう話はあまり安易に人に振っていい話ではないんだな、ということを痛感した出来事だった。

「慰安婦」問題については、みんなの見解がすごく分かれるトピックだから、私はどちらかというと、例えば男性たちがあからさまに「従軍『慰安婦』なんていなかったよ」なんて話をしていたら、たぶん黙りこくって、それに反論しようとも思わないかもしれない。それく

つたら、慰安婦制度というものが必要なのは誰だって分かる」と発言。

²¹ 『1億人の昭和史』第10巻「不許可写真」（毎日新聞、1977）は、第二次世界大戦中の報道「不許可写真」を集めている。戦争当時、従軍カメラマンが撮影した写真はすべて軍部の検閲にかけられ、「検閲済」「保留」「不許可」として分類・管理された。

らいみんながむきになってしまうトピックだから、それについて「私はこういうふうに考えています」って表明すること、それだけで挑戦だと思う。たぶん、トラウマだと思うのね。この従軍「慰安婦」とか満州事変の話は、母親とも真っ向から衝突するし。母親の持論は「とりあえずなかったし、そんなことを日本人がするわけがない」。その話題を出すとしてごくヒステリックに怒るし、さっきのクリーニング屋のおじちゃんにしても、ものすごくむきになって、目つき変えて怒るし……。だから、その人と私の関係にすごい緊張がはしるトピックなんだな、っていうことを身体で感じてしまった。なんでもうちちょっと理性的に話ができないんだろうと思うんだけど、相手があまりにヒステリックな反応に出てくると思うと、あんまり言わない方がいいことなのかなと思ってしまう。

母親はものすごくむきになる。べつにお母さんを責めているわけじゃない。彼女を傷つけようとしているわけでもないし、彼女がやったと言っているわけでもない。ただ、事実としてそういうことがあったという話をしていただけなのに、個人的な話に触れてしまったのかな、と思うくらいに、むきになっちゃうんだよね。例えば、母親の父親、つまり、私の祖父は「慰安婦」のことや強制連行があったという話を聞いていたのかなと思ったけど、うちの祖父は身体が弱かったから、中国には行ったものの、話を聞くとあまり戦っていたふうでもないんだよね。何をやっていたのか、よくわからないけど……。うちの父方の祖父も身体が弱かったから、戦地には行かなかったらしい。だから、自分の血縁者が関係するというわけでもなさそう。ただ、彼女がしきりに言うのは、「日本人はすごいんだ」っていうこと。テレビで日本が特集されたり、日本の技術の話が取り上げられているときには「こんなにいい国はないよ」って言っている。母親は一步も海外に出たことがない。旅行もしたことないから。

母親とのあいだで、従軍「慰安婦」の話が出たのは、去年、アメリカで「慰安婦」の少女のブロンズ像が建てられたという出来事があったとき²²。あのときの報道をみながら、母親が従軍「慰安婦」の存在をまったく否定する発言をしたから、やんわりと「日本にもそういう目があった人がいるんだよ」って言ったら、「日本にはそんなこと言っている人は誰ひとりいないじゃないの。お金がほしいから言っているんでしょ」ぐらいのことを言っていて、「うわっ！」ってちょっとビックリした。「そこまで言うか？」と思って。「お父さんはたぶんそういうこと言わないと思う」って、ぼそつと言いながら、その話はそこで濁したんだけど…。

うちの父親は、母親ほど極端な意見を持っているわけではないと思うけど、そういう話をするとわりと口をつぐんでしまう。たぶん母親がそういう立場で、私と喧嘩することをあまりよく思っていないから、自分が私の見方をすると、お母さんがいじけちゃうし。かといって、

²²2013年カリフォルニア州ロサンゼルス市のグレンデール市の公園に「慰安婦」像が設置された。2011年に韓国・ソウルの日本大使館前に設置された元従軍「慰安婦」を象徴する「平和の碑」のレプリカ。合衆国内には、グレンデールのほかにも、ニュー・ジャージー州やニューヨーク州など複数の場所に、同様の慰霊碑がある。

母親の立場を肯定すると、私が怒っちゃうから。その辺のさじ加減で、あまりはっきりとした自分の意見を言わないんだと思うのね。本当はどう思っているのかをあまり聞いたことがない。

母親は私の超えられない壁だね。何から説明したら、聞く耳を持ってくれるんだろう、と思うけど、たぶん聞く耳すら持っていない。私が「あ」と言っただけで、彼女は「それは違う！」「それは全然ない！」と否定から入る。話し合いにもならないという脱力感。そのテーマに触れると、緊張がはしる。「やっぱりまた同じ反応をしている」と思って、私はこれにはもう勝てないと思って、ぐったりしちゃう。その繰り返し。どうしても衝突してしまう。いまだにそういう話になったら、どうしたらいいのかわからない。向こうが感情的になるから、こっちも煽られて感情的になってしまう。母親とご飯を食べているときに、日韓とか中国とか、尖閣諸島のニュースがでるたびに、息をひそめているもん。「母親が何も言いませんように。私がそれについて何も思いませんように」って。とりあえず「このトピックに気づきませんように」って。私も母親の反応にちゃんと向き合えない。どうしてこうなっちゃうのかな。

(2014年5月 新宿)

S. K. (歌手)

2006年だったかな。大学に李容洙（イ・ヨンス）さんという方がいらっしやって、経験を語るという会があった。僕はそれをたまたま聞きに行ったんですね。階段教室みたいな部屋があって、そこで聞いていて、100人以上の人がいたと思う。通訳の人が入って、資料が配られて、その経験を聞いていたんだけど、やっぱり衝撃だった。なまの声だったから。言葉のトーンもあるし、李容洙さんが「オンマー、オンマー」って言う声も自分のなかに残っている。そのときは、たしか、日本の兵士に連れていかれるときの光景を話していて、あまりにもつらい話だった。通訳の人も泣いていて……言葉を失うしかない。それを言語化するということは、なかなかできないかな。そのときに、彼女〔李容洙さん〕は日本語もしゃべったのだけれど、少し日本語をしゃべるだけでも、なんでこの人が日本語をしゃべるのかということには、いろんな歴史的背景がある話だよな。

ちょっと衝撃がつよくて、言葉がでなかったのを覚えている。彼女が言っていたのは、逃げないように兵士に足を打ち付けられて、倒れたときに一輪の花が咲いていて、「それはなんの花だ？」と傍にいた人に聞いたら、桔梗（トラジ）だった、ということ。それと、彼女は、会場で、歌をうたっていたんだよね。凄まじい状況にあって、一人の日本の兵士、特攻隊の

兵士かなんかに恋をしたということも言っていた。たしか、早川さんと言っていた。恋をして、でも、その人は特攻隊でそのまま死にいく。それは、極限的な状況だと思うのね。一日に何十人と相手をしなくちゃいけないなかで、それでも偶然一人の優しい兵士に恋をした。彼は死んでしまうわけだけど。

ハルモニがうたったのは、日本の歌だったと思うけど。会場は、しーんとしていた。話を聞いたあとで、歌がでてきたから、みんな静かに聞いていたのだと思う。会場で、僕は、ハルモニのちょうど正面に座っていたんだけど、「この歌はかれに届いたと思うか？」って不意に聞かれて、おどろいたけど「届いたと思う」って、言った（笑）。そのあと、小さい会があった。ゼミの人なんかが集まって、10人くらいの会だったと思う。そのとき、僕がたまたま楽器をもっていったから、「トラジ」と「アリラン」という歌と一緒にうたった²³。手つないで、一緒に写真を撮った。優しい人だった。資料を読むと、ハルモニは、激しい印象をうけるけれども。割腹自殺を図ろうとしたと書いてあった。驚いた。日本の軍がやったことに対して、憤っていたし、すごく怒っていたのを覚えている。だけど、〔証言集会では〕「これからはやっぱり平和をつくっていきましょうね」ということを言っていた。「これからどう平和をつくっていくかということが大事だ」って。

声を聞くことって、すごく大切なことだと思う。いろんな情報とか、文章を読むことはできるけど、その人が発する声を聞く機会というのはあまりないから、それで行こうと思ったのだと思う。そのハルモニが、発した声はどこかでずっと残っているし、彼女の名前はずっと記憶していた。ただ、自分が、彼女の証言とどう向き合っていくかという問題は、たぶんずっと……自分のなかのあまり居心地がよくないところも含めて、たぶんずっとあるんだろうな、という気がしている。

その居心地の悪さというのは、日々混乱が、増してゆくように見える日本も含めた世界の状況によるところもあるだろうし、「慰安婦」の問題だけじゃないと思うんだよね。沖縄に行ったときに、ひめゆりの生き残りのおばあの話聞いたのだけれど、そのおばあが「身近な友だちが爆弾で死んだ」とか、「日本軍の兵士の投げた手榴弾で、後ろに立っていた人の身体がふっとんだ」とか、そういう話をしているときに、「こういうことを話せない人もたくさんいるんだよ。話せないでいまもずっと家にこもっている人もいる」と言っていた。そういうおばあちはずっと記憶を抱えたまま生きていると思うのね。記憶は消えない。だからこそしんどいと思う。それを抱えて生きていくことの辛さに僕の想像力は、及ばない。それでも、その人が証言しつづけるというのは、なにか使命感のようなものをもって伝えているんだと思う。テレビや拡声器を通した声高に語られるものではなくて、ためらいや、言い淀みや、もしかしたら、戸惑いのようなものを孕んだ小さな声に耳を傾けていきたい。そういう声を僕は、うけとったわけだから、やっぱりそういう声に対して、どこかで寄り添ってい

²³ 「トラジ」と「アリラン」は、朝鮮半島内外で有名な朝鮮民謡の代表作。

くことをしなくちゃいけないんだろうなあ。

〔証言を直接聞くという体験以前は、〕ある種、自分と切り離して考えられる部分があると思っていた。でも、その声をきいた瞬間に、それはどこかで自分の話にもなると思う。全てを共有はできないし、その人の苦しみを完全に理解することもできない。でも、ホルモニの証言だけじゃないけど、その話を、そういう声を聞いた瞬間に、自分もなにかを受けとっているのだろうか。そこに行っているわけだしね。なぜ聞きに行くかということは、よくわからない。ただそこに行くことの強さは、あると思う。言語化されていない情報（情報という少し違うのかな……）声のトーンなり、波長なり、響きなり……ホルモニ、ひめゆりのおばあ、伊江島のおじいもそうだった。ちょっとした言いよどみのようなものも含めて、感じとっていくものだから。わからないけど行くということは、そうさせるものがやっぱり、なにかあるのだと思う。

〔証言集会で、通訳の人がいたということは、〕他者を介しているわけだよね。翻訳という作業は、他人を介することで、気づかされることもあるし、もしかしたら、オリジナルとは、違うことを聞いているかもしれない。言語化以前のところに、自分は吸い寄せられる。深いところで鳴っているものが、声にはあると思うから。意味というのはそのあとについてくるもの。その人の語り口だったり、喋り方だったり、手の動きだったり、眼差しとか、会場の空気もそうだし。そういうものが深く関わっていて、そこが大事なんじゃないかと思う。〔通訳を介するという〕もどかしさはたしかにあったけど、それ以上のものがそこにはあった。

僕は、集会の際の経験を消化できなかったから、この恋の話を歌にした。どうしようもない思いみたいなものがあった。それをなにか形にしないことにはいられなかった。あまりにも衝撃だったんだよね。恋の記憶はひよっとしたら少し美化されているかもしれない。でも、それはたぶん生き抜くためだと思うし、あまりにも凄まじい経験をされているから。ただ、ホルモニと一緒に「トラジ」なり「アリラン」を歌ったことは、けっこう楽しかった。一緒に歌ったから。

ホルモニは16歳とか17歳だったのかな。戦争がなければ、すごく輝いていた瞬間だと思う。そういう瞬間に、地獄のような経験を味わった。

沖縄へは、最初は、ゼミで辺野古に行ったんですよ。辺野古とひめゆりの塔、伊江島に行った。伊江島では、平和資料館「ヌチドゥタカラの家」の阿波根昌鴻さんのところにも行った²⁴。阿波根さんは亡くなっているけど、謝花悦子さんという人がいて、いきなり怒られたの。「平和をつくっていかなきゃいかん」って、いきなり怒られた（笑）。「すげえおばあがいる」

²⁴阿波根昌鴻氏は、米軍による強制的な土地接収に反対する反基地運動を主導した平和運動家。伊江島に反戦平和資料館「ヌチドゥタカラの家」を開館した。謝花悦子さんは館長をつとめている。

って思ったのね。だけど、話を聞いていたら、「今の日本は戦争をする方向にむかっている。〔戦争〕経験者として、これは止めなきゃいけないだよ」って。優しい人、すごくパワフルで。阿波根さんの意志を継いでいるような方だから。それと、伊江島の宿のおじいさんが言っていたのは、沖縄では地上戦があつて、その頃、〔おじい〕幼くて、沖縄の墓って大きいから、墓に隠れたんだって。だけど、当時は土葬だからすごく異様な臭いがしたのを、そのおじいさんは覚えていた。それって、すごくなまなましい記憶。伊江島には、いまだに基地が真ん中であつて、日本軍が使っていた滑走路も残っている。伊江島だけじゃないけど……。島唄の唄い手、嘉手苧林昌さんの生家が嘉手納基地の真ん中であつて、「あそこで生まれた」って指差している先は基地の滑走路。そういう状況っていまだにつづいている。

僕は、声というものに対して、なにかのこだわりがあるのだと思う。一番惹かれるものなんですよ。ストーリー・テリングもすごく気がかりではあるのだけど。アイヌや沖縄の話を聞こうとか、そういうふうにしたわけではないのだけど、自分がそこに行ってしまうなにかがあるのだと思う。それは声だけじゃないかもしれないし、言葉にならないものかもしれないし、土地の気配かもしれない。ただ、その場所に行つて、なにかを感じるというのは常にある。これからもずっとやっていくことだと思う。

グローバル化とか言つて、物理的な距離にしても、情報にしてもすごく近くなっているし、そのことで、少数言語も失われているのかもしれないけど、そういう時代だからこそ、言葉以前の、言語化される以前の響きに耳を傾けるというのは、自分にとってすごく大事なこと。言葉はあふれていて、SNSであるとか、ネットの情報だとか。でも、言葉や活字にした瞬間に消えてしまうものって絶対にあると思うし。そういうものに耳を澄ませていく、近づいていくことに惹かれる。言葉以前の声に、僕は惹かれる。民謡もそう。僕は、音楽をやるわけだけど、旋律にした瞬間に違うものになっちゃうことがあるから。言葉にもすごく関心があるのだけど、そういう余韻というか、言葉の発する残像みたいなもの、そういうものを空気にできたらとは思うんだけどなかなか難しいね。

(2014年5月 新宿)

K. M. (主婦)

従軍「慰安婦」という言葉を最初に聞いたのはだいぶ前。高校生のときかな。私の世代としては比較的早い方だと思う。たしか、高校2年生のときの日本史の先生が、当時の先生としては変わった人で、半年間、班ごとに人権問題をテーマにしたグループ学習をさせられた。普通に先生が日本史の授業をするのではなくて、班に分かれて、被差別部落の問題、在日朝

鮮人問題、アメリカの黒人問題とか、差別や人権問題についてグループ学習をさせられた。うちのグループは被差別部落問題を選んで、図書館に行って、いろんな本を借りてきて調べた。そのときにいろんな本を読んだ。その関連で、戦争の類いの本を読んだときだと思う。どの本かは記憶にないけど、戦争について書かれた本の端っこの方に、「慰安婦」のことが小さく載っていたんじゃないかな。文字として、知識として知ったのはそのときだと思う。

ただ、うちの高校は受験校だったから、受験校としてはあり得ない指導方法だった。それで途中で、その先生への反感が芽生えてしまって……。日本史で大学受験したかったけど、この授業のやり方では受験なんかとてもできないと思った。日本史を習った記憶が全然ないからね。中学受験のときに勉強した日本史の知識しかない。普通は、高校でもっと詳しく日本史を習って、受験に備えるわけでしょ？その知識のベースがなかったから。そのグループ学習の授業のときも、最初はみんなで本を持ち寄って、頑張って取り組もうとしたけど、途中でばかばかしくなっちゃった。だから、その先は記憶にない。おそらく、紙にでも書いて発表したんじゃないかな。文字をきれいに書くのは得意だったから、たぶん文字は私が全部書いたんじゃないかな？そういう記憶はあるけど、発表内容とか、そもそも発表をしたかどうかも定かじゃない。どんな本を参考にしたかも定かではない。ただ、そのときに従軍「慰安婦」という言葉を知ったということは覚えている。

高校時代に「慰安婦」のことを知ったときは、「ふーん、そうだったんだ……」と思っただけ。従軍「慰安婦」をつれて、日本軍が戦争に行ったということは読んだけど、その本には詳しいことは書いていなかった。「慰安」が何を意味するのかわからなかったし。挺身隊という言葉と同じで、その言葉から実態があまり想像できなかった。だから、あまり理解しないまま聞き流していたんじゃないかな。その本を読んだあと、それ以上のことを知ろうという気にはならなかった。その後、「慰安婦」という言葉を改めて聞いたり、考えたりするようになったのは最近になってから。今は、「日本の軍隊ってそういうことを考えながら戦争をしていたのね」と思う。他の国では同じようなことはありえない。どう考えたらいいのかわからね？でも、どこの国の兵士だって、戦争のときには女の人をレイプしている。もともと日本の慰安所の仕組みは、兵士がレイプしないように、予防措置として作られたと聞いたことがある。まあ、被害はそれだけに留まらないでしょうけど、国としてそういう方向を打ち出して戦争を行なったということを、どのようにとらえたらいいのか……。どこの国だって、戦争になればひどいことをするけど、国が主導になって、そういう仕組みを作ったというのは異常なことだと思う。「一体、何を考えていたのか?!」と呆れるのと、「なるほど予防措置という発想だったのか……」と思う気持ちが半々くらい。

昨年橋本発言は愚かだと思った。あれは問題外。でも、最近は、韓国の大統領が「慰安婦」問題をめぐって日本と断絶しているでしょ？「慰安婦」の問題だけ掲げて、日本とは対話しないというのも政治家として愚かだと思う。現に、〔映画『オレの心は負けてない』のな

かで] この方〔宋神道さん〕もおっしゃっているじゃない²⁵? 「戦争しちゃいけない。自分の経験を語り継ぐけれども、未来志向でいこう」って。まさにそうだと思う。歴史は消えない。やってきたことは消えないから。でも、どうしても政治的な絡みが出てくるから、難しいのしょうね。国と国の問題というか……。被害者の方たちは、映画に出ていた宋さんにしたって、金銭面で解決することを望んではいない。「お金をくれ」と言っているわけではなく、「謝ってほしい」と言っている。「悪い事をしたから、国として謝ってほしい」と。ところが、国として謝るっていうときに、安倍さんにしたって、自分はその時代に生きていないわけじゃない? 彼は私と同じくらいの年齢だけど。それが謝るっていうのもなかなか謝れないと思うのよ。その辺が難しいよね。それに、しょっちゅう変わる日本の総理大臣が、その時代を経験していない人なのに、言葉だけで頭を下げたって、それでうれしいのかどうか……とも思う。まあ難しいね。人を傷つけたときはね。

〔映画をみて〕宋〔神道〕さんはえらいな、立派だなと思った。自分の嫌な過去をさらけだして、「戦争をしちゃいけないんだよ」ということを若い人に伝えている。しかも「未来はある」という未来志向で……。なかなかできないことだと思う。私だったらできない。もちろん、周囲の支えがあったからできたんだと思うけど。それがなかったらできなかったでしょうね。そういう記憶は恥ずかしいこととして、みんな封印するじゃない? 逆の立場を考えれば、軍隊に従軍して、彼女たちを傷つけた日本の軍人がいるわけだよ。まだ生きている人もいるかもしれない。でも、それを証言する人はほとんどいないでしょう? うちの父親は高校生だったから、〔滋賀県〕瀬田の軍事工場に徴用されて、戦地には行っていない。祖父はもっと前の戦争に行っていた人で、太平洋戦争には従軍していない。だから、家族から戦地の話を聞いたことはなかったけど、うちの親戚にも慰安所に行っていた人はいるかもしれないよね。でも、そのことについては誰もなにも言わない。自分がしたことについてはなかなか話せない。戦争はいやだね、と思う。最低だよ。人間として最低の行為。

「慰安婦」問題については、夫とは話す。でも、彼は男だから「どこの国もやってるよな」という発想だよ。夫以外の人とは話せない。私みたいな年齢のおばさんには、多分あまり興味がない話題なんじゃないかな。今みたいにこれだけ話題になっていたら、どうか知らないけど……。相手にある程度の人権的な知識がないと、こういう問題については話せない。そういうもんだと思う。人権問題って、たとえ仲の良い友達であっても、そういう知識がない人とは話せない。やっぱり「は? それなに?」という人には話せないよ。東京の人って、被差別部落の問題のことも知らない人多いじゃない? そういう話をしようという気にならないというよりは、できないんじゃないかと思う。私自身は自分なりに関心があって、眼にとまるものがあれば読んだりするけど、他の方がどこまでこのことについて考えておられるかなんてわからないから。

²⁵このインタビューは、映画『オレの心は負けてない』（安海龍 監督, 2007）をみたあとに行なわれた（注17参照）。

私は2年間ニューヨークに住んでいたことがある²⁶。そのときに、真珠湾攻撃の日をアメリカで迎えたのね。真珠湾攻撃については、日本のテレビなんかだと「日本がやってやったぜ。してやったり」という語りになっていたりするけれども、同じ出来事がアメリカでどう受けとめられているかという、すごいんだよ。「日本は最悪の国だ。アメリカ人として屈辱を受けた」という感じ。テレビのニュースで流れるんだもの。今日はパールハーバーの日です、って。それで追悼行事があるわけ。私は今、〔攻撃を受けた〕逆の立場の国にいるんだなあ、としみじみと感じた。二年間でそれを二度経験したから、すごく印象的だった。その日は、日本人としてなんか悪い事した気分になった。そういう記憶がある。

でも、パールハーバーのときは「日本人が悪い。ジャップがやった！」って名指しなのに、長崎とか広島への原爆投下については、「アメリカ人が悪い」というふうには放送しない。それから、アメリカでは、長崎と広島に原爆を落としたのは戦争を早く終結させるためであって、日本を全滅させようと思ってやったことではない、と言われている。つまり、正義の原子爆弾だったという説明。それはアメリカのテレビのニュースかなにかで見て、「は？」と思った。すごく腹が立った。それまで、私は知らなかった。あまり興味がなくて、そういう本を読んでこなかったからかもしれないけど。初めて知って、ちょっとショックだった。異国に住むということは、他の国の目線でみたニュースが伝わってくるということなんだね。向こうでは、原爆が投下された日には、何の式典もやらない。原爆が落ちた日に、慰霊のための式典があるのが普通だと思ってたけど。

(2014年6月 飯田橋)

J. W. (会社員)

はじめて従軍「慰安婦」という言葉を知ったのは、小学校6年生ぐらいのときかな。友だちがそれについて何かを書いていたのをみた。夏休みの課題だったか、展覧会のときの課題だったか……。歴史について調べた内容を画用紙に書いたものだったかもしれない。とにかく「慰安婦」のことに触れていて、その文字が目飛び込んできた。そのときは中身もちゃんと読んでいなくて、ただ何だろう？と思ったただけだけど、はじめて「慰安婦」という単語を知ったのね。たぶん字面じゃないかな。よく見たことのない漢字。「慰安」する「婦」って何、みたいなの。そのときは何だろう、としか思わなかった。

その後、ニュースで〔従軍「慰安婦」という〕単語はよく聞いていたけど、あまり気にとめ

²⁶回答者は2001年から2003年までニューヨークで生活した。

ていなかった。中学生、高校生の頃かな。テレビのニュースでちらちら聞いたことがあった。〔従軍「慰安婦」問題という〕そういう問題があつて、それに付随して、中国の人がどうした、朝鮮の人がどうしたとかそういう話。でも、全然興味がなかった。それについて、誰かと話すという機会もなかったし。私が10代のときから今までよく話題になっているな、というくらい感じ。それも、特定の出来事がすごく問題になったというよりは、何かつねに続いている問題なんだなという意識がある。でも、それがどうして問題になっているのかは全然知らなかった。

中学、高校の頃かな。具体的に、そういう〔性的な〕ことなんだろうなって、なんとなく察したのは……。レイプとか、性暴力とか、そういう知識って小学生のときはないと思う。日本では、性についての知識をタブー視するじゃない？それで教えようと思わないから。私なんかは知ったのはたぶん遅いほうだと思うけど、みんながそういうことに興味を持ちはじめた頃に、「慰安婦」関連のニュースをみて、もしかしてそういうことなのかな、と思ったの。誰かに確認したわけでもないし、自分で調べたわけでもないけど、きっとそうだろうって思った。

だけど、それから気になりつつも、本を読んだりして正しい情報を入れようとは思っていなかった。私のなかでは、韓国と揉めているときによく出てくる単語、そういう印象しかなくて、詳しいことはわからなかったし、知ろうとしてこなかった。昔の話っていうイメージがあった。なんかよく聞くし、以前から問題視されてきたんだろうけど、実際に現実として起きたのは昔だよ、という感じの距離感があった。当時20代だった人たちが今は80歳とか、だいぶお年を召してきて、それだけでもすごく昔の話というふうに思ってしまったところがある。

だから、〔「慰安婦」問題について〕意識的に考えたのは今回がはじめて。テーマについての偏見は全然なかった。「何ていうことを聞くんだろう」とか、そういうふうに思う人もいるかもしれないけど、考えることは大事だから。自分の知らないことにしても、真実を知ったうえで、私だったらこう考えるという意見をもつ必要がある。このプロジェクトの話を最初に聞いたとき、ちょうどそういう心境だった。自分の知らないことを知らないままにしないで、知らないことをあえて知ることによって、自分の考えを引き出したい時期だった。だから、もしかしたら別のテーマであっても受けつけたと思う。

今回、朝鮮から来た「慰安婦」について書かれた本を読んだけど、結局だまして連れてきたわけだよ²⁷。「従軍看護婦としてお世話をするんですよ」って言われて来たのに、実際にふたを開けてみたら、そんなことをさせられた。当時、朝鮮は日本の植民地だったわけだよ

²⁷川田文子『赤瓦の家——朝鮮から来た従軍慰安婦』筑摩書房, 1987. 朝鮮から沖縄に「慰安婦」として連れてこられ、戦後も沖縄に暮らしたペ・ポンギさんの体験を記録したもの。

……。性を使った奴隷みたいなもの。もちろん国家の立場も歴史的背景も違うけど、日本でも北朝鮮に拉致された人がいるでしょ？それに似てると思った。なんて言って誘ったのかは分からないけど、自分のところに連れて来ちゃったわけでしょ？北朝鮮の拉致についてはマスコミに大きく取り上げられるけど、日本もそれと似たようなことやってたんじゃない？と思った。しかも、純潔の状態にある若い人をわざわざ狙って、連れてきたわけでしょ？遊郭の人だと兵隊に性病がうつって、兵隊がいなくなっちゃうから、そうじゃない人をわざわざ選んで連れてきてる。あと衝撃的だったのは、6歳か7歳くらいで、嫁という立場で農家のお宅に預けられて、そこで下女みたいな扱いを受けていたという話。そういうことも全然知らなかったから。日本が植民地支配していた時代の朝鮮の貧困はものすごいよね。

私が一番興味を持ったのは性差別問題。[「慰安婦」にさせられた人たちが] 肉体的な奴隷状態に置かれていた、というのはもちろん問題だけど……。当時、女の人ってその程度のものとしか思われていなかったんだなと思った。その問題は、姿をかえて形をかえて、今の世の中にも根づいている。だから、ヤジ問題なんか起こるんじゃないかな²⁸。同じだと思う。そういうDNAが根づいているのかなと思っちゃった。だから、女性の社会進出だの、子供を産む産まないだの、そんなことを言っただけで、一朝一夕には変わらないんじゃないかな。[「慰安婦」問題について得た知識が]、自分のなかでそんなふうにつながっていった。現代に結びつけると、「産めばいいじゃないか」とか「少子化なのは女性が子供を産まないからだ」とか、職場でも女の人のほうが給料が安いとか、そういうものを全部ひとくくりにして考えられるよな、と思った。そういう意味で、「慰安婦」問題については、知らなかったら知らなかったで生きてこれたし、変わらない生活だったと思うけど、知ったことにより、人ごとではなくなった。現代の自分の生活にも、さっき話したような、男女差別の問題にも少なからず関わっていると思うし。あるいは、今回の集団的自衛権をめぐる安倍政権の動きで3、もしかしたら似たようなことが起きるかもしれない²⁹。男の人たちが兵役に行かされて、女の人はそのほかの者を守っていくとか、前と同じようなことが繰り返されたら、日本のなかでこれが起こりうるかもしれないと思った。

靖国神社の近くの私立校に、幼稚園から高校まで通ってた。九段下駅から登校するのに、靖国神社の境内を通るという決まりになっていた。そうすると、靖国神社がどういう場所なのかまだ分からないうちに、そこを通学路として歩いているわけよ。うちの母もお祖母ちゃまも同じ学校の出身で、うちの母のときにはすでにあの場所にあった。うちのお祖母ちゃまのときは、たしか違う場所にあったんだよね。どのタイミングで靖国神社の隣に移転したんだ

²⁸2014年6月18日の東京都議会本会議にて、妊娠・出産への支援策について都側に質問していた塩村文夏議員（みんなの党）に対し、自民党派議員から性差別的なヤジがとび、それに同調する声や笑いが起こった。

²⁹2014年7月1日に日本政府は臨時閣議を開き、従来の憲法解釈を変更し、集団的自衛権の行使を容認することを閣議決定した。官邸前には、閣議決定に反対する多くの市民が集まり、深夜まで抗議活動が行われた。

っけ？関東大震災のあと、今の場所に移ってきたはず。つまり、母の通学路でもあったわけだから、娘をあそこに通わせることにますます違和感はなかったんじゃないかな。

私には自分の通学路についての違和感はなんとなくあった。右翼の街宣車みたいな車がすごくたくさん来てたし。昭和天皇が亡くなったときには、午前で帰ることになって、すぐに帰された。生徒を早く帰宅させなきゃいけない、って先生たちがすごくぴりぴりしてた。仲が良かった友達の靴箱に「九段下駅で待ってるね。一緒に帰ろう」という手紙を入れたの。そしたら、靴のなかに入れたはずなのに、なぜか先生がその手紙を持っていて、翌日、先生にすごく怒られた。そういう緊迫感があったよね。たぶん、子供たちを早く靖国神社から遠ざけなきゃいけないというのがあったんだと思う。学校側としては、大人だから、何かが起きるかもしれないということが想定できたのかもしれないけど、子供だからわからない。そんなに早く帰らなきゃいけないの？何が起こったの？という感じだった。それが89年1月だから、小学校4年生のとき。

私が小学校1年生のとき、うちの弟が幼稚園だった。弟の幼稚園で、瓶に粘土をはりつけて、そこにビーズとかビー玉をつけてキラキラさせて、あとで乾かして、絵の具を塗るという工作をすることになった。そのとき、うちの母に「悪いんだけど、靖国神社で石を拾ってきてくれない？」と頼まれた。「はっ？この人何を言っているんだろう？」と思った。「なんで？」て聞いたら理由を話してくれたけど。「そのためにきれいな石があったら欲しい」って言うの。でも「なんで靖国神社の石なの？」って思った。だから、うちの母は靖国神社がどういう場所かわかっていないんだと思う。子供心にそれマズくない？って思ったの。あそこに何かを祀っているってことは分かっていた。誰かから聞いたんじゃないのかな。それで、8月になると政治家が行くじゃない？首相が行くだの行かないだので揉めたり。ということは、あそこに祀られているだろうということはなんとなく分かっていた。だから、「その石を拾ってこい」っていうのは気持ち悪いなって、7歳だったけど思ったの。それをなんで親は「拾ってこい」って言うんだろうと思って、私は「それは絶対にイヤ」と言って拒んだ。

「慰安婦」問題については、家族とも誰とも話さないね。教育って、性に関する話題をタブー視しているじゃない？だから必然的に、この話もそこにひっかかってきて、大人になった今でもちょっと言いにくい話という感じになっちゃっているのかもしれない。個々に考えを持っていたとしても、誰も口にできないのかも……。私のなかにも、性の問題にたいするタブー意識はすごくある。うちのお祖母ちゃまは「女の子は男の人と同じ部屋で過ごしちゃいけない。女の子は女の子だけで育てた方がいい」という考えの人だった。それもある意味、差別的でしょ？だから、男の人ってあまりきれいじゃないものだ、という考えを植えつけられて育った。そんなに汚らわしいものなんだって思った。うちの父でさえ、自分が男なのにそう言ってた。だから、私は男の人とは話しちゃいけないんだと思ってた。さっき話した私立の幼稚園には2年目からで、年少のときは近所の共学の幼稚園に通っていた。それで、うちのお祖母ちゃまが怒ったらしいの。「男の子がいるところに行かしちゃだめだ！」って。

それで、その一声で私立に行かされた。あとは、小学校の5年生くらいのとき、塾の夏期講習に行っていた。そこで公立の学校の女の子や男の子と仲良くなって、家に呼んで遊びたいという話をしたら、家族会議になっちゃった。そのなかに男の子がいるって……。「そんな大騒ぎになるんだったら、もう誰も家に呼ばないからいいよ」って言ったけど。テレビのドラマで、性的なシーンが出てきたらすぐチャンネルを変えられるし、そういう感じ。タブー意識が強い家庭に育った。だから、家族で「慰安婦」についての話題は出ないし、余計に話さないのかもしれない。

(2014年7月 神楽坂)

M. K. (主婦)

〔「慰安婦」問題に〕関心はあったんです。あったんですけど、私は広島出身で、原爆のことがありますよね。広島原爆資料館³⁰なんかは、当然、子どもの頃に何回かみたことがあるんですけど、やっぱり衝撃で、「知らなければいけない」という気持ちと「知るのが辛い。避けてとおりたい」という気持ちがあって、大人になってからは、「あの資料館に絶対に行けない」という状態になってしまっていて……。あの建物をみただけで、「あそこにはもう入れない」という感じになってしまっている。子どもが二人いるんですけど、おばあちゃんがいるので、小さい頃から広島に行きますよね。子どもとおばあちゃん「〔資料館に〕行ってきなさい」と言って「お母さんは待っているから」と。

「慰安婦」問題も、自分のなかでは、原爆の話と同じで、ちゃんと理解をしなければいけないけど、なるべく避けてきたんです。広島原爆にあった人たちのことについては、被爆した市民たちがその日に見た風景を絵に描くというドキュメンタリーをNHKで放送していて、それがすごくいい番組だった³¹。それをたまたま何年前にみたときに、やっぱりこれは全部を見尽くすというか、知らなければいけないと、恥ずかしいんですけども、初めて思っただけです。こういうことが実際、本当にあったわけですから。そして、自分もその線の上に生きているわけですね。広島原爆のこと、被爆された人たちの気持ち、同じラインではもちろん知りえないんですけど、事実として知る〔必要がある〕。蓋をして通れない、というか。同じ立場にはたてないけれども、知るということが自分に唯一できること。

「慰安婦」問題についても、ずっとそういう感覚できていて、たまたま友人から本をお借り

³⁰広島平和記念資料館のこと。

³¹NHKスペシャル・原爆の絵～市民が残すヒロシマの記録～」NHK, 2002.

して、やっぱりこれはしっかり理解しなければいけないと思った。自分から積極的に〔「慰安婦」問題について知ろうとした〕のは、この本〔川田文子『皇軍慰安所の女たち』〕を読んだのが初めてです。それまでにも、ニュースなどでちらちらとみることはもちろんありましたよね。でも、こういう書物の形できちっと読んだのは初めてですし、早稲田に〔wamという〕資料館があるということもまったく知らなかったですね。知る機会がなかった……。俄然、興味はでて、もう少し涼しくなったら、その資料館にも行ってみようかなと思っています。

〔「慰安婦」問題の報道については、〕韓国の人たちに対してそこまで偏見がある方だとは思っていませんでしたが、強烈な場面があるじゃないですか。元「慰安婦」の方たちが泣き叫ぶとか……。〔彼女たちの訴えの〕内容をちゃんと聞かないで、そういう場面だけを見ると、韓国の人たちは感情表現が激しいので、それでちょっと引いてしまっていた。内容をちゃんと理解していれば、むしろ〔身を〕乗りだして聞くような話ですよ。でも、恥ずかしいんですけど、自分の無知のために、少し引いてしまっていた。この本を読んだからは、もっと知りたい、もっと理解したいという気持ちがあります。

〔証言を読んでみて、〕すべての方にそれぞれの体験があつて、思いがあつて、どの人〔が印象的だった〕とは選べないですけど、〔戦後、〕沖縄に住んでいらした方〔ペ・ポンギさん〕が、掘建て小屋のような場所で、窓は閉め切つて〔暮らしておられた〕。当然、こういう目にあわれた方って、精神的に普通ではいられないですよ。何十年経つていても抱えて暮らされる……。同じ女なので、結局、どの人の体験も全部想像がつきますよね。自分がもしこういう立場にたったときのことを想像つくというか。逆に言ったら、よく死なれないで、それぞれの方が生きられたなと思う。自殺された方もたぶんいらつしゃると思いますけど……。どの人の体験も自分の身に置きかえることができた。

〔この本を読んだあと、〕図書館で「慰安婦」関連の本を探したんですけど、どういう本があるかわからなかったの、図書館にある本のなかから探したんです。そうしたら、上海に「海乃家」というそういう場所〔慰安所〕を日本人がつくつて、その「海乃家」の「慰安婦」たちの話を、その娼館で育つた「海乃家」の主人の息子さんが〔子どもの頃の記憶をもとに〕書いた〔本があつた〕。『従軍慰安所〈海乃家〉の伝言——海軍特別陸戦隊指定の慰安婦たち』という本³²。でも、その本は男の人の目線で書かれていて、こんなにお気楽に書いて、この人何を残したかたんだらうと疑問に思った。やっぱり男の人と女の人とでは、全然見方が違う。書いた人は現場にいたわけですよ。そこで見聞きしているわけですよ。被害にあつての方たちのことも……。なのに、どこまでもお気楽〔な語り〕で、それがまた逆に衝撃的でした。

³²華公平『従軍慰安所〈海乃家〉の伝言——海軍特別陸戦隊指定の慰安婦たち』日本機関紙出版センター、1992。

加害者というのが男でしょ。それがすごくポイントだと思いますよね。結局、女の人って、百年前はどこの国でもモノ同然ですよ。だから、男にとって女というのはそういう意識から始まっているから、こういうことをしてもすごくお気楽なんですよ。全然わかっていないとか。もともと男にとって、女・子どもはモノと同じだった。奴隷的とか。それがすごくあるような気がしますよね。私の父とかお祖父さんの世代で、戦争に行った人は加害者になっていると思うんですが、その人たちも、戦争というすごく異常な、全員が平常心ではない、全員が少しおかしくなった状態〔にあった〕。しかも、日本って発想が「親方日の丸」じゃないですか。だから、下々の人たちは考えない。「考えなくていい」というふうに言っている。「お前は何も考えなくていい。お上に任せておけばいいんだ」って。うちの父なんかはまさに一兵卒だったから……。心情としてちょっとはあったかもしれないけど、そんなに深くは考えないし、考えなくてもいいという教育がされている。

うちの父は亡くなったんですけど、中国と沖縄戦に行っているんです。それで、すごく後悔して……。やっぱり聞いておけばよかったと思った。戦争に行った人は皆そうですが、語らないじゃないですか。ちょっと触れたことはあったんですけど……。沖縄の激戦で数人生き残ったという生き残り組なんです。だから、余計語らないんです。「生きているのが申し訳ない」とずっと言っていましたからね。でも、この本〔『皇軍慰安所の女たち』〕を読んだあとに、やっぱり聞いておかなきゃいけなかったと思った。それで、弟に〔頼んで〕父が沖縄戦のときに何々部隊にいたというような書類がもし残っていれば、それを見せてもらうのがいいかなあと思ったんです。だから、やっぱり知ることが唯一できることという思いですよ。そこから、また自分が動いて、もっと知りたい、もっと知ることによって違うアクションが起きるかもしれない。〔父が生きている間に〕この本を読んでいたら、父の戦争体験を聞き継ぐ事が出来たと思います。

〔慰安婦問題について、誰かと話したことは〕ないですね。最低限、実際の被害者の方の証言を読んだ人でないと、同じ土壌に立っていないわけですよ。だから話せないとか、話にならないとか……。だからないですね。知識がある程度ないとやっぱり話せないですね。〔夫には話をしたんですが、〕コメントがかえってこないんですよ。無言……。〔彼は〕私なんかよりはずっと歴史には詳しくて、普段は私があまりよく知らないので相手にならないことが多いんですけど。あまり深くは知らないかもしれない。知りたくないと思っっている感じかな。

日本ってすごい隠蔽体質。娘がドイツで暮らしているんですね。彼女はヨーロッパからみた日本のニュースになる。とにかく「日本ってすごく隠すよね」って、いつも言っている。日本のメディアは、殺傷事件とか猟奇殺人のことばかり取り上げるじゃないですか。ヨーロッパでは、それはほとんどニュースにならないって言うんですよ。政治や世界情勢がちゃんと話題になる。そういうことでも、日本ではすごい情報操作がある。だから、自分で切り開いていかないと、メディアに出ているものだけだと、全然信用できない。このあいだたまた

ま『日本経済新聞』に載っていた記事で、吉沢久子さんが——もちろん戦争を体験されている方だけ——「知らないことが一番の恐怖」っておっしゃっていて、私、本当にそうだと思います。知っていれば、それに対する自分なりの意見や発言ができる人って、絶対沢山いるはずなんです。でも、知らされていないから、あんな猟奇殺人のことばかり取り上げて「日本は恐ろしい国だ。女の子はひとりで歩けない」という話ばかりになってしまう。大事な情報が欠落している。知らされていない。無知なのはいけないんですけど、放っておいたら無知になっちゃう。受け身なままに流されて。よっぽど、自分で興味とか関心をもって、くっついていくようにしないと、どんどんわからなくなっていくってしまう。とくに女の子は、これ〔被害者の証言〕を読んだときに、我が身のことのように思えるはずですよ。でも、それを知る機会がない。それが最大の問題。だから、絶対、教科書に載せて、全部事実を言わなければいけないですよ。

(2014年8月 鷺沼)

Y. Y. (大学教員)

新聞とかテレビを含めた報道では耳にしていたけど、〔「慰安婦」問題について〕自分が関わっている分野や研究範囲と直接関連をもって考えるようになったのは2007年以降ですね。大学院の博士課程に入ってから。中心的なテーマとしては扱わないにせよ、ゼミでもそういう話は出たりするし、証言集会を主催している友達がいる、そのお知らせをもらったりした。関わっている人がいたし、雰囲気として知っていて当然という感じだった。あとは、一番継続的な関心としてあるのは本を読むということ。李静和さんの『つぶやきの政治思想』³³とか。2008か2009年くらいに、李静和さんがちょうどゼミにいらしていた。最初のときにはたぶん読んでいなかったんだけど、その途中から読むようになった。そこまで深く追究はしていないが、そういう問題が現在のなものとしてあるということを知ようになったのはその頃かな。20代半ばくらいだから、遅いといえば遅いよね。それより以前にもあったような気もするけど、あまり覚えていない。

〔従軍「慰安婦」については〕学校の教科書に載っていた気もするけど、小中高と〔通ったのは〕現代史に力を入れて学ぶ学校ではなかった。大学の学部時代は、歴史はあまり意識的には学ばなかった。むしろ、そういうものを避けるような方向で授業の科目を組み立てていた気がする。べつに意識的ではなかったけど、文学とか心理学とか、内面的なものを中心に

³³李静和『つぶやきの政治思想——求められるまなざし・かなしみへの、そして秘められたものへの』青土社、1998。

興味があった。家庭ではまったく記憶がないですね、残念ながら。〔両親は〕関心がある人たちだとは思いますが、従軍「慰安婦」問題という植民地の問題が入ってくる。うちの母方の祖母は、ある時期までを朝鮮半島で過ごした。当然関心はあるはずなんだけど、あまりそういう話はしないか、避けていたか、あるいはないものとして伝わっていたような気がする。母方の祖母は、兄弟の一番上なんだけど、敗戦時すでに10代半ばか後半くらいで、まわりで起こっていたことはおそらく知っていた。だから、逆に知っていた分、言いにくいというか、言えない部分もあったんだと思う。こっちがちゃんと聞かないせいもあるけど、それは今でも明確には出てこない。僕自身もあえて、例えば、従軍「慰安婦」問題に絞ったかたちで聞き取りをやるという試みもしてこなかった。

証言集会に行ったのは2010年だったかな。どういう経緯で行くことになったのか覚えていないんだけど、お知らせをもらったのかな？同じ勉強会をやっていた友達がそれに関わっていたというのもあるし。そのときのことは覚えている。知り合いの大学教員が会場の外で、いわゆる右翼対策のために立っていて、挨拶した覚えがある。警備がものものしい感じだった。会場の中は、普通に人が話を聞く感じではあったけど……。

〔集会で証言を聞くときには〕通訳を介さないと言葉がわからない。たぶんフィリピンの証言者だったと思うけど、語り方、しゃべる際の感情の伝わり方が〔言葉では〕表わせられない感じとして残っている。内容もちろんそうだし……。別の例でいえば、中国の北京語ではない言語でしか話せない人が、その息子と思われる人が〔彼女の証言を〕通訳するかたちで一緒に壇上に立っていた。息子である通訳者の方も、そのおばあさんの語りにも感染するように非常に昂った感じでしゃべっていて、それが二重に日本語に翻訳された。翻訳という非常にもどかしい作業。意味内容としては伝わるんだけど、いろんな層になって、霏がかかったようにしかわからない。向こう側にあるものははっきりしているんだけど、自分の今までの言語体験、ボキャブラリーのあり方ではつかみきれないものがあったように覚えている。

一つ思い出したのは、証言集会に行く前の2007年に、大学で「平和と文化」という学部生向けのリレー講義のTAをやっていたこと。女性国際戦犯法廷を取り上げたNHK教育テレビの放送改ざん問題に、その番組の制作子会社の一員として関わっていた坂上香さんという、いまは津田塾大の教員をなさっている方だけど、その方が〔スピーカーとして〕呼ばれて、話を聞く機会があった。安倍晋三が官房長官だったときに手が下って、それがどういうプロセスで子会社の人、及び、その番組の制作に関わる人、NHKのトップも含めて〔に対する圧力となり〕、内容が歪められたかたちで放映されたか³⁴。そのことはそこではじめて知ったと思うし。だから、証言そのものを聞くというよりも、番組制作に対する政治的介入という文脈のなかで、従軍「慰安婦」問題がある種のタブーみたいな感じで放送業界のなかにある

³⁴NHK教育テレビが2001年1月30日に放映した『ETV2001 シリーズ戦争をどう裁くか』の第2回「問われる戦時性暴力」に、安倍晋三内閣官房副長官（当時）らが圧力をかけて、番組内容を改ざんさせた事件。

〔ということ〕、とくに〔女性国際戦犯法廷は〕第二次大戦時の天皇制の罪を明確に言う集会だったわけだけど、それに触れることがいまだにタブーなんだなということを知らされた。2007年に、大学を移ってから真剣に考えるようになったとさっき言ったけど、その最初のきっかけにはなかった。

僕自身は、証言をそこまで読んでいるわけではなくて、〔証言そのものに関心があるというよりは〕証言をもとに日本の戦争責任とか、植民地主義の拡大期・縮小期におけるジェンダーのあり方〔を考える〕という側面に関心を持っている。金富子さんと中野敏男さんの編集した『歴史と責任』という論集があるけど、あれには一通り目を通して読んだ³⁵。植民地と脱植民地以後の政治的・歴史的な文脈と文学の関わりについては、留学以前から少しずつ関心は持っていたけど、それについて自分が文章を書くようになった。英語圏文学という括りのなかでの限界を感じつつ、性暴力を含めた、どちらかという男性としては語りにくい部分、どういうふうに向き合っているのかよくわからない部分もあったけど……。植民地の問題を考える、その痕跡だったり、傷とか記憶を考えるうえでは、女性の身体がどのように場所を消されてきたのかは重要なテーマなんだけど、そういう言葉に文節化して、言い直して、自分でちゃんと考えることが、当時はできていなかった。

それは従軍「慰安婦」問題だけじゃなくて、例えば、前後に同じく関心をもってきた、沖縄における日米の関係であるとか、その今の表われ方〔についてもそう〕。日本が沖縄をみる見方であるとか、沖縄自体が自己表象するやり方というものは、例えば、いかに男性性や女性性を立ち上げるかという問題と切り離して考えることはできない。それは理論や思考のうえでは、ある程度はきれいに整理できたとしても——本当はできないんだけど——現実の経験であるとか、感情・情動のレベルに近いところで〔考える〕、単なる論文を書くための何か〔素材〕ということではなくて、ちゃんと引き受けて考えるのは時間がかかるよね。自分の場合は、従軍「慰安婦」問題だけじゃなくて、いろいろ別の方に迂回しながら、一見関係ないものを読んだり知ったり考えたりするところからしか出てこなかったような気がする。

証言者、あるいは証人になるということについては多少関心をもって考えてきたので、〔証言ということについて〕いくつか言えることはあると思う。「証言と文学」と言うときに、ぱっと思いつきやすいのはホロコーストと文学、あるいはそれに対する批評や研究の在り方。例えば、日本語圏の文脈でいえば、文学との関係で僕が最初に思いつくのは目取真俊さんが言っていたこと。目取真さんは、小説を書く過程で証言を沢山読んでいる。文学を志す人にもなるべく証言を読むようにと言っている。「証言とは何か」とか「証言が書き手や読み手に与えるインパクトは何か」ということよりも、まず何が起こったかを証言を通して知ること。それを書き手の創作姿勢の基本として語っている。彼の場合は、当然、沖縄戦の証言を

³⁵金富子、中野敏男 編著『歴史と責任——「慰安婦」問題と一九九〇年代』青弓社、2008。

念頭において語っているんだけど。

もう一つは、従軍「慰安婦」のサヴァイヴァーについても〔同じことが言えると思うけど〕、沖縄戦の場合、2030年には体験者がいなくなると言われている。証言を語る人間が亡くなったら、過去の事実はその後の世代に伝えられなくなるのではないかという危機感が当然ある。それをいかにして継承していくかというテーマは、アーティストの山城知佳子さんなんかずっとやってきたこと。証言者〔の話〕を聴くプロセス自体が証言者になること、証言ということの意味を変える（修正主義的な方向ではなくて）ことにつながるかもしれないということ。屋嘉比収さんという研究者の言葉で言えば、「沖縄人になる」「沖縄戦の記憶を学びなおす」ということだけど、証言が当たり前身の回りにある人にとってさえ、それは敢えてもう一度学び直さないといけないもの³⁶。より遠い場所、例えば東京のような場所で育った人間にとっては、さらに意識的な努力が必要とされるし、〔証言を〕聞く姿勢が問われる。

三つ目は、自分の研究分野とも近くて、去年、ある大学の講義科目を担当していたとき、そのなかで話した〔内容ともつながりがある〕。植民地という場、あるいは人種差別が激しく日常にあるなかで、〈加害者〉〈被害者〉の二者関係は、多くの場合フォーカスされる。その二者の関係が重要であることは当然なんだけど、一方で、〈傍観者〉という第三項もある。この〈傍観者〉という存在をどう考えるかという問題。〈傍観者〉の一つの態度のとり方は、〈加害〉〈被害〉の関係が起こっているのに、それをないことにしてしまうというのが大半。あるいはそれが自分と無関係であると考えてることによって生き延びる。それは日常生活を難なく続けるという姿勢だと思うけど。そういう現実に対する否認、否定——こういうことは起こっていない、自分とは関係ないという姿勢。それは個人的なものにかぎらず、集団的なものでもありうる。それをいかに現実に起こっていることだという〔方向に持っていくか〕、いかに「否認 (denial)」を「承認 (recognition)」に持っていくか。そのためにはどうしたらいいのか、ということはずっと考えている。

〈加害〉〈被害〉〈傍観者〉というこの関係性自体は、例えば、南アフリカの真実和解委員会——これも証言というものが問われた場だけ——〔でも構造化されていた〕。〈加害〉〈被害〉の関係ばかりがフォーカスされるなかで、証言というものがある種のスペクタクルになってしまうとしたら、〈傍観者〉という大多数はそれを消費したり、自分と無関係だと考えたりするのではなくて、どういうふうに引き受けたらいいのかということ、学者や文学者も含めて、色々な人が考えてきた³⁷。〔自分の「慰安婦」問題についての考えも〕それに多少影響をうけた考え方ではあるんだけど……。

³⁶屋嘉比収『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす』世織書房, 2009.

³⁷アンキー・クロッホ『カントリー・オブ・マイ・スカルー——南アフリカ真実和解委員会〈虹の国〉の苦悩』山下渉登 訳, 現代企画室, 2010.

「否認」された現実をいかに「承認」にもっていくか。自分のやっていることに引きつけて考えると、文学作品であるとか、映画、詩、演劇、音楽、小説、批評などを含めた広義の文学はその契機としていまだに有効なんじゃないかなと考えている。〈傍観者〉のなかの全員じゃなくても、その一部をいかに証人、起こっていることの証人として、現実に対する告発や異議申し立てまではいかなくても、起こったことは起こったと言えるぐらいの証人になるように持っていくために、文学は重要かなと思う。この場合の「証言」というのは、被害者の証言とはまた違う意味において、言葉の定義をもう少し広げた意味においての「証言」だと思う。そういう意味での「証言」に関心がある。そういう〔広義の〕証言行為を、文学をとおして行なってきた作品、パレスチナ問題にコミットしたジャン・ジュネであるとか〔興味深い〕³⁸。エドワード・サイードは「ジョウゼフ・コンラッドはヨーロッパの帝国主義の証言者だった」という言い方をしたけど、実際、コンラッドの場合、〈共犯者〉でもあり〈証言者〉でもある³⁹。だから、いろんな層がありうると思う。〈傍観者〉であり〈証言者〉である。あるいは〈共犯者〉であり〈証言者〉である、とか。例えば、コンラッドの場合だったら、奴隷制やアフリカにおける搾取〔の犠牲者〕、ジュネの場合はパレスチナ人という、直接の被害者が語る言葉〔としての〕証言ではなくて、〈加害〉〈被害〉の関係を白日のもとにさらして、後世に伝える役目としての証言。

(2014年8月 高田馬場)

K. O. (国際公務員, アメリカ合衆国在住)

従軍「慰安婦」という言葉を初めて知ったときというのは正直いってはっきりと覚えていなくて、より最近の、ニュースなどで「慰安婦」という単語を聞いているその頻繁だけれどあいまいな印象の方が強いです。ニュースや新聞の断片から、なんとなく、政治とか戦争とか罪とか、そういう少しどろどろしたようなイメージを持っていて、避けてしまうというか、しっかり知ろうとしたり追究しようとしなくて、目をそむけてしまっていたような気がする。

元「慰安婦」の方の証言に触れたのは今回が初めて。もらったリンクからジャン・ラフ＝オハーンさんのインタビュー動画⁴⁰を見て、そのあとすぐに、Fight for Justice というウェブ

³⁸ジャン・ジュネ『恋する虜——パレスチナへの旅』海老坂武・鶴飼哲 訳, 人文書院, 1994; 『シャティエラの四時間』鶴飼哲・梅木達郎 訳, インスクリプト, 2010年。

³⁹エドワード・サイード, デーヴィッド・バーサミアン『ペンと剣』中野真紀子 訳, 筑摩書房, 2005。

⁴⁰インドネシアで「慰安婦」にされたオランダ人証言者ジャン・ラフ＝オハーン氏が, オーストラリア放送協会製作の番組 Talking Heads に出演したときの映像 (2009年2月放映)。

サイト⁴¹の証言をすべて読みました。まず、恥ずかしながら、日本軍が、そんなに各地で「慰安所」を設けていたとは知らなかったです。さまざまな国や地域の女性たちが、さまざまな過程でそのような状況に陥ることになっていて。韓国（朝鮮）や中国は、ニュースなどでも頻繁に出るのでその印象が強くて、でもこの二か国だけで起こったのではないと漠然と思ってもいたけれど、とにかく、詳しい背景や状況を深く考えたり知ったりすることのないまま過ごしていたことを再確認しました。

インドネシアにいたオランダ人女性たちもそのような目にあっていたのだと知り、特に最初の動画がジャン・ラフ＝オハーンさんだったので、少し驚いて、でもそのあと、遠い記憶の中で、前にもそんなことをどこかで習ったか読んだ気もして。ニュースや新聞なんかで「慰安婦」ということばや、「補償」とか「裁判」とか聞くと、なんだか政治的だったり、そのようなグループの人をひとくくりにしてしまう。個人個人（元従軍「慰安婦」の方たち）についてしっかり考えたことがなかったと思う。実際には、当然ながら、一人一人まったく違うそこに至る過程と、その期間と、その後と、すべてを含めた個々の人生があるのに。

それから、証言を読んでいて、何人かの方が、新しい世代は違うと信じているとか、日本の市民団体に支援をもらっているとか、あとは朝鮮と日本のこどもたちが仲良くやってくれるように政府にはしっかりしてほしいとかいうメッセージがあって、印象的でした。ニュースをちらっと聞いたりすると、日本全体をうらんでいたりするように流したりして、日本の市民が逆に反発を持ったりするみたいなケースもあるみたいだけれど、彼女たちが願っているのは、戦争という「異常な環境下」におきた、しかしもちろん人として許されぬべき行いに対して、国が個人個人への責任と補償をしっかり認めてほしい、ということなのだと感じた。そこに、なんだか戦争に対して、その異常さ、やるせなさ、行き場のない憤り、みたいなものを改めて感じた。

自分が、少しも知ろうとしたり、こうした30分もあれば読めるウェブサイトすら読まずにいたことを恥ずかしいと思った。そして、そうさせていたのは、罪の意識かもしれないと思う。自分もその一員である日本人が行った行為として、なんとなく、目を伏せていたかったような。河野談話についての知識も、そのような行いを認めるような発言をしたという程度で、でも実は個人への補償などは誠意あるかたちでは行っていないことなどは知らない、不完全なもので。でも、証言のページの女性たちや、そして元軍人の方たちのことばを読んでいると、彼らは、過去に起こったことをきちんと認めて、きちんと、その後の生活や苦勞を認識し、国として補償をしてほしいという、とても冷静で正当な願いを提示しているように感じた。そして、その至極正当な願いに対して、日本の若い世代がきちんと向き合うことが、なんでこんなに難しいのだろうと思った。政府も、きちんと認めることが、なんでこんなに

⁴¹日本の戦争責任資料センターと「戦争と女性への暴力」リサーチ・アクションセンターが中心となり、「慰安婦」問題の事実関係についての資料や証言を提供するウェブサイト「Fight for Justice 日本軍『慰安婦』——忘却への抵抗・未来の責任」．〈<http://fightforjustice.info>〉

困難なのだろうと不思議にすら思ってしまう。もちろんわたしがまだまだわかっていない複雑な問題に違いないのだけれど、新しい世代が、冷静になってできることはたくさんあって、例えば、きちんと「知る」(フェアな情報源にアクセスすることが大切だけど)、そして自分の頭で考えて、判断する。不完全なニュースに流されたり、偏った記述に先入観を持ったりせずに。

それから、少し違う話かもしれないけれど、同じような「慰安婦」となっていた女性たちでも、証言に立ちあがった人たちの強さは、どこからくるのだろうと思った。それは、自分の過去も含めてすべてを愛してくれる家族を築いたこと、高齢になって、先に亡くなって行った女性たちのためにという思いを強めたこと、など、いろいろあると思う。その部分だけとりあげて美化するつもりは全くないけれど、名乗り出る勇氣、それから、元軍人の人の証言を読むと、彼らの反戦への思いにもなんとも言えない気持ちになった。そして、日本では「戦後」の世代である我々が、こうした人たちの勇氣ある、血と涙ににじんだようなことばを、聞くことも読むこともしないでいてはいけないと思った。そうしたことばは、聞かれない限り、声を持たないのだから、もっと知ろうとしなければいけないと思った。

米国生活のなかで、「慰安婦」問題について誰かと話したことがあるかどうか？ベトナム人の友人に、『慰安婦』問題(両政府間の話)について、共通の仲良しの韓国人の友人と一緒に説明をしようとしたことがある。今回、証言動画を見たり、Fight for Justiceのウェブサイトを読んだりする前のこと。けれど、その韓国人の友人はわたしよりもさらによく知らない(関心がないというか、過去のことや政治レベルの話でなく、前を向いて楽しくいきたい、といった感じ)で、あまり深い説明も議論もできずに終わった。ベトナム人の友人の質問にも、二人ともあまり答えられずに終わってしまって、その時は後で調べよう、など思ったのに、結局あいまいなままでいた。正直、それ以外で話が出たことは記憶にないです。「慰安婦」というと、政治的な話というイメージになってしまって、そのために、実際に当事者であった女性たちの経験に耳を向ける人が減ってしまうことがあるのはとても残念だと、今回自分も違う媒体にふれることで思いました。それから、ほかの国の同僚や友人は、センシティブな話題であるという認識があるのか(もしくは彼らもあまり知らないのか)、わたしに直接「慰安婦」に関して聞いてくることはないです。

(2014年9月 ワシントンD.C.)

K. S. (会社員)

「慰安婦」のことは知っていました。小さいときから。最初に知ったのは、たぶん小学校高学年から中学校とか、そのくらいだったと思うんですけど。テレビでドラマを見ていて、一瞬だけど、そういう描写があった。戦争物のドラマ。よく8月になったらテレビ局が流すじゃないですか。ああいう感じのものだったと思うんですけど。「慰安婦」という言葉はもともと知っていて、若い女の子たちが無理矢理連れ去られるという描写があって、同じドラマではなかったですけど、そういう描写を見ていた。また別のドラマでは、だだっぴろい部屋があって、「慰安婦」の人たちがそこに仕切りだけで寝かされていて、その前に日本兵がわっと並んでいて、お金だけ握らせて、そういう行為をする場面があった。それは強烈に印象に残っているんですけど。連れ去られてここに来たのかな、というような感じで〔描写されてい〕た。仰向けで女の子たちが無表情で、どんどん日本兵がお札を手に握らせていくんです。どんどん交代で……。

〔そういう描写をみて〕可哀想だな、戦争は嫌だなと思っていました。ただ、戦国時代に襲われた村の娘が足軽に乱暴されたり、太平洋戦争終了後に満州や樺太から引き上げる途中の日本人女性が中国人やロシア人に乱暴される描写も見たことがあるので、時代や国を問わずこのようなことが起こるわけで、日本軍が特別に悪いことをしているという印象はありませんでした。他でもやっているから悪くないという意味ではなく、このような行為を行う者が一様に最低の人間だという意味です。規律を守らせない統率者への不満も感じました。それが戦争であり、だから戦争は良くないと思いました。

〔ドラマをみたのは〕1990年代かな。〔最初の証言者が名乗りでたことを〕受けて、ドラマになったのかもしれないですね。〔報道でみる「慰安婦」問題については、〕僕はそもそもメディアを信じていないので。メディアってやっぱり誰かの意向によって伝え方が変わっちゃうじゃないですか。そもそも話を1ミリも信じていない。〔子どもの頃、ドラマでみた「慰安婦」の存在は〕利害関係とか変な雑音がなかったから、素直に受けとめられたのかなとは思いますが。そのときは、メディアがだめだとか思っていなかったし。

〔歴史には幼い頃から関心がありました。〕プラモデルの戦艦や戦車を作ったり、戦争物が好きだったので、その流れで小さい頃から戦争関連のドキュメンタリーやドラマを時々見ました。日本軍がどういう経路で中国に進出していったかとか、どこでどう負けたのか、とか考えたり、そういうことが知りたくて、漫画『日本の歴史』⁴²に載っているのを讀んだり。それは小学生時代。男の子だったら、そういうのに興味あると思うんですけどね。友だちの影響もあった。幼なじみがいて、その人もそういうのが好きなんです。子どもの頃、戦艦

⁴²日本の歴史についての学習漫画シリーズ。集英社、小学館、学研などから刊行されている。

や戦車を一緒につくっていた。いろいろ話はするんですよ。大学時代か、あるいはもっと前かな.....ごくごくまれに、「あの戦争ってどうだったんだろう」という話をしたりもします。

〔僕の場合は〕もともと近代史に関心があったけど、学校ではあまり興味をもっている人はいなかったですね。もしかしたら、親の影響もあるのか.....。親がとくに表立ってそういうことを言っていたわけではないけど、見ているテレビは戦争のドキュメンタリーなんかが多かったし。〔学校の歴史の授業では、近代には〕全然時間を使わなかった。近代史は本当にさらっとだけ。漫画『日本の歴史』とか、そういうもので知識を得てきた感じ。漫画『日本の歴史』の後ろの方には、一応、近代の話も書いてあるので。ただ、まわりに他にそういう人がいたかということ、幼なじみの友だち以外にはいなかった。今思えば。

〔韓国の歴史博物館を訪れるのが好きです。〕大きなところでは国立中央博物館、ソウル歴史博物館、大韓民国歴史博物館に行ったことがあります。博物館にもいろいろあって、古代の古い土器とか中世の仏像を置いてあるところもあるけど、僕が興味あるのは近代の博物館。例えば、1900年以降、欧米が押し寄せてきて、アジア全体で近代化が進んでいく時代の話に興味がある。そこから戦中と戦後の復興みたいな時期ですね。もともと国を問わず、歴史物が好きで、たまたま韓国はK-POPに興味があり、それでそのついでに歴史も知ろうかなという感じ。とくに韓国の歴史が知りたい、ということではなかったんですけど.....。

〔韓国歴史博物館には、〕戦争中に政治活動をしていたリーダーがいったん中国に逃げて、そこで臨時政府を立ち上げて、韓国内の反乱活動を支援していたとか、そういう抗日関係の活動の展示があったし、戦争中の一般人はこんな室内でこんな環境で生活していましたよという展示がありました。展示のなかで、日本からこんなひどい仕打ちを受けた、とか、反日感情を煽るようなものはとくになかった。当時はこういう感じの生活をしていましたと淡々と紹介する内容になっていました。「慰安婦」については触れてなかったと思います。どっちかということ、一番印象に残っているのは、韓国対日本ではなくて、韓国内の政争が——戦後の大統領の権力争いとか、そういうものがあって、結構揉めていたんだなということです。もしかしたら、私が日本人だから気にならなかったのかもしれませんが。展示内容って、受けとる側の受けとり方次第で変わってくるのかなと思っていて。受けとる人の主観であるとか主義であるとか、そういうところで感じ方が違うのかな。例えば、同じ展示を韓国の人たちが見たら.....。たぶん小さいときからそういう教育をうけているから、普段はあまり気にしないけど、〔展示を見ることで〕そういう忘れかけていた意識が掘り起こされるとしたら、同じ展示をみても、彼らは反日感情をかき立てられるような気もするし。ただ、僕は日本人なのでとくに気にならなかった。

今年の5月に、大韓民国歴史博物館で「慰安婦」の特別展示があったけど、中には入ってないです。韓国近代史の展示があって、そっちに興味があったんです。中身は1900年代から最近のK-POPブームまで。まさに僕の興味のあるやつがここにどっぴりと展示されていた。

そこに見に行きました。博物館の入り口があって、LEDのパネルがバンと並んでいて、そこでいろんな映像を映し出しているんですよ。すごく先進的な感じ。館内の案内図も3Dで、手で触れて〔動かせる〕ようになっている。昭和30年代的な雰囲気的生活とか、大統領の椅子とか、K-POPブームとか、最新のテレビ〔の展示〕とか。それを見たいなと思って行きました。それが常設の展示なんですけど、その一連の展示をみたあとに、特別展示室というのがあったんです。何だろうなと思ったら、漫画みたいな、ポップなアートみたいなものが並んでいた。子供がたくさん見に来ていました。親子連れがいっぱいでしたね。だから、漫画かアニメのイベントかなと思って入りかけたけど、よく見ると中身が「慰安婦」の展示だった。気が引けて入るのをやめました。アングレアム国際漫画祭に展示したものを大韓民国歴史博物館で公開していたみたいです⁴³。当時はそういうものだとは知らなかったの、子どもたちでもとっつきやすいように、そういうポップな感じで展示しているのかな、とは思ったんですけど。そのとき〔展示を見に〕入らなかったのは、昔からドラマなどで「慰安婦」がどんなものか知っている。知っているから、わざわざ見に行っても、自分の心が痛いだけだなという〔心境〕。あと、日本人だということはすぐバレるんだけど、感情高ぶった人たちから非難されるのも嫌だなという。そんな感じです。

実際には、会場に〔陰悪な〕雰囲気があったわけではなくて、単純に僕が一人で怖がっているだけなんですけど……。ただ、それもメディアのせいなのかもしれないんですけど、そういうものに怒りをぶちまける人って何をするかわからないから。韓国に興味をもつ前に、僕は中国語もちょっと勉強していたんですよ。仕事で中国に行っていたりもしていたので。中国の一部の人たちですけど、愛国無罪とかそういう考え方がある。そういう人がなにをやらかさかわからない、という恐怖がもともとあった。実際に何か文句を言われたとか、そういう経験はないんです。ただ、ちょうど尖閣問題で揉めていた時期、どこか日本企業の人拘束されていたという時期に、香港に遊びに行っていて、そのときに反日集会のようなものがあった。でも、参加者は20人か30人くらいなんですけど。でっかい公園に集まって、わあわあ言っただけで。ほかの人たちは一切興味がなくて、昼寝したりして。本当に一部で盛り上がり上げていただけなんですけど、日本に帰って、報道をみると、なんか大騒ぎしているように切り取られていた。そういう人たちがいる、という意識が植えつけられちゃうと、こういう判断になっちゃうんでしょうね。どうしても恐怖が出てきてしまう。それも、メディアを信じなくなった一因ですね。会社の事務所が中国にあって、そこに常駐している同僚の人たちもいるんですよ。でも、デモみたいなものはあったと聞いたけど、大半の人たちはそれに参加していないし、別に危険な人たちでもないし。ただ、テレビをみると、みんなが怒っているように見えちゃう。

〔祖父母は〕戦争中に満州に住んでいた。でも終戦前に戻ってきたので、べつに大変な思い

⁴³2014年第41回アングレアム国際漫画祭にて、従軍「慰安婦」問題を扱った漫画の企画展が開催された。

をしたわけではない。〔子どもの頃、戦争の話は〕周りの人からには聞かなかつたし、向こうから話してもくれなかつたから、一切聞いていないです。おばあちゃんからも何も聞いていない。満州にいたということだけ。それは辛くて言わないのか、わからないんですけど。僕もなぜか聞いてはいけないような気が勝手にしていた。だから、敢えて聞かなかつたんですよね。そういう意味では、そのときに満州でどういう生活をしていたのかなとか、そういう面での興味もあつたんですよ。だから、〔戦争物の〕ドラマを、興味をもって見ていたということもあるのかもしれない。〔祖父母の戦時中の経験について〕父親にもそんなに深く聞かないし、父親も話さない。本当か嘘かはわからないけど、「中国の人からおじいちゃんは慕われていた」という話だけは聞きました。「すごく優しい人だったから慕われていた」とは聞いたけど、それが本当かどうかはわからないですね。おじいちゃんは軍隊には入っていないですね。身体が悪かつたのかどうかわからないんですけど。

僕も「慰安婦」がいる、いないという話になると、全然詳しい話を知らないの、感覚的なことになっちゃうんですけど、普通に理屈で考えれば、そういう存在って必要だと思うんですよ。男が何万人もいて、欲求を満たすためにはそういう存在って必要なんだろうなと思つていて。あと、わざわざみずからそういう被害に遭いましたと話すのはなかなか勇気の要ることじゃないですか。それ〔を話すこと〕になにか得があるとも思えないので、なんとなく感覚ではあるんですけど。問題としてはあるとは思つていたんですけど。

この問題に関しては、誰かがちゃんと科学的に証明というか、一つの見方を出してくれないかなと考へているんですよ。これは「慰安婦」とはまったく違ふ話になるんですけど、世の中には売春的なお仕事ってあるじゃないですか。例えば、1000人の男の人たちがいて、その人たちの欲求をみたすために売春婦みたいな人が何人必要なのか。需要と供給があつて、需要を満たすには何人必要なのか。それをもとに、当時、朝鮮に駐留していた日本軍がどれくらいいて、それを満たすためには何人必要なのか……。例えば、100人必要なんだったら、みずからそういうお仕事を希望する人って、何人くらいいるんだろうか。100人必要で50人しか集まらなかつたら、50人は無理矢理連れ去られてきたって考へるのが普通かな、と思うんですよ。そういうのも一つの見方なのかな、と思う。

(2014年9月 早稲田)

A. S. (団体役員)

1996年8月13日に、〔私が関わつていた〕自治労川崎職員組合青年部の有志で、映画『ナムの家』を上映しました。18年前ですね。会場は中原会館というところで、南武線の武

蔵中原駅前にある、今はエポック中原と呼ばれている場所だったと思う。200-300人の規模かな。たぶん夜の6時頃からだった。1回きりの上映。口コミで人を集めたり、チラシを配ったりして。たしか、主催者側から誰か挨拶したんじゃないかな。〔私は上映当日も参加して、受付をやりました。〕ただ、もう18年前なので、映画の内容はほとんど記憶にないですね。〔当日、会場には家族も来ていたけど、〕娘に感想を聞いたとか、妻ともその辺の話をした記憶がない。

映画『ナナムの家』をなぜ我々が上映するに至ったのかという過程があって、それには川崎の歴史、風土が関係している。御存知のとおり、川崎には日本鋼管（今のJFE）という会社があって、製鉄所ですね。戦前、戦後、戦中を含めて、在日の人たちを雇用していたんです。そこには強制的に連れてこられた人もいたし、1910年の日韓併合以降、働き口を求めて来た人もいて、戦後もそこに残って、川崎の市民として働いていた人たちが、はっきりした数字は今わからないけど、大体2万人くらいいた。そういう土壌、在日の人たちが川崎の臨海の方に多く住んでいるという土壌があって、その人たちのなかから、具体的な名前を出すと、青丘社という福祉法人が出来てきて、地域で保育園を経営したりしていた歴史がある。

地域の記憶でいうと、1970年代に日立就職差別裁判糾弾闘争というのがあって、朴鐘碩（パク・チョンソク）という在日韓国人の若い人が日立製作所〔の入社試験〕を受けたんだけど、在日であるということで差別されて就職できなかったということがあった。で、それに対する差別糾弾闘争があって、それが当時珍しく勝ったんですよ。あと川崎では、指紋押捺拒否の闘争があって、その拠点になったのが、さっき言った青丘社。その代表が李仁夏（イ・インハ）という在日1世の牧師さんで、彼が地域の中心になっていた。

韓国と日本との差別反対闘争でいうと、日韓条約の反対闘争というのが1965年であって、あれを日本の左翼がそれなりに闘ったんだよね。日韓条約はあくまで不平等だということを含めて、その根底には差別があるということで、それをおもに闘ったのは、共産党というよりは新左翼の連中だった。その前には60年安保闘争があって、70年安保闘争とのあいだで、〔日韓条約反対闘争を〕学生運動で闘った人たちがいた。その中身をみると、地に足がついていない感じだったんだけど、川崎の青丘社なんか闘いはじめたというのは、一青年の就職問題に焦点をあてて差別を糾弾していくとか、指紋押捺に反対していくとか〔具体的な目標があった〕。

あと、川崎においては、全国で初めてだと思うけど、税金はちゃんと払っているのに市営住宅に入る資格が与えられないという状況に対して、市に対する要求闘争などがあった。たまたま当時の市長が、伊藤三郎という社会党・共産党から押された人だった。当時、東京は美濃部〔亮吉〕知事、横浜は飛鳥田〔一雄〕市長、川崎は伊藤市長、京都は蛭川〔虎三〕知事、大阪は黒田〔了一〕知事で、革新自治体連合みたいなものがあつた。1970年代の後半ぐらいまでかな。今じゃ考えられないけど、社会党・共産党が押した候補者が市長や知事をつと

めていた。そういう時代があって、伊藤三郎さんも「法も規則も人間愛を超えるものではない」なんていう言葉をのこして、指紋押捺拒否者を告発しなかった。そういう土壌が川崎にはあった。

そういう闘いが地域であって、組合青年部——私もそれに関わっていたんだけど——も参加して、そういう運動をしているときに、映画『ナヌムの家』のことを誰から言われたのかなあ。たぶん、青丘社の人たちかな。そこにつとめている人たちの方から、上映会をやりませんかという呼びかけが青年部に対してあった。それで、それまでの流れからすると、ごく自然に「やりましょう」ということになった。青年部からしても、従軍「慰安婦」問題を直接的に扱ったことはなくて、青年部が関わったけど、組合の機関決定をうけたわけじゃなくて、有志みたいな感じで開催したんだよね。私自身、それまで従軍「慰安婦」のこともあまりよく知らなかったし、映画のことも知らなかったんですが、上映会をやってみましょう、ということで、『ナヌムの家』の上映会を96年8月にやった。そういう経過と歴史です。

川崎市の姉妹都市が韓国にあるんですよ。ソウルから地下鉄で20分くらいの富川（プチョン）市というところ。うち〔組合青年部〕の活動家の一人が核になって、毎年、スタディツアーみたいなことをやっていて、私も富川に4回くらい行ったことがある。そのうちの1回に、ナヌムの家を訪問するツアーがあった。私はたまたまそのときは参加できなかったんだけど。そのツアーは今でもやっていて、〔中心になっているの〕は、私と同じ年でとくに定年しているんだけど、ライフワークで日韓問題をやっている人。いまはどこかの大学の非常勤講師をやっているけど。桜本にセメント通りっていうところがあるんだけど、在日の人たちが焼き肉屋をやっていたりなんかして、そこを横浜のチャイナタウンに負けないような、コリアタウンにしようという話が一時期あった。なかなか話がそこまで行かなかったけど。〔彼は〕かなり熱心な人で、大学に入った頃から、そういう場所に住んで、地域に根ざしながら、青丘社の人たちと連携をとりながら、いろいろやっていた。その人が今でもスタディツアーを計画したりしています。

私自身は、『ナヌムの家』の上映会以外に、「慰安婦」問題に対する支援活動にはほとんど関わっていない。あとは、インドネシアの元「慰安婦」の方が来たということで、その講演会に行ったことはある。それも10年以上前。自分が主催したわけでもないから、何年前のことだったかも正確にわからない。たしか横浜で開催されたように記憶しているけどね。『ナヌムの家』の上映会よりもあとです。ずいぶん前のことなんで、その人の話の内容はほとんど覚えていないんだけど、そういう講演会に行ったくらいで、支援活動には関わっていない。このあいだみた映画『オレの心は負けてない』のなかに、「在日の慰安婦裁判を支える会」というのが出てきていたけど、そういう支援する組織の存在は知らなかった。〔元「慰安婦」の方たちを〕支援する日本人の活動家団体ってあるんでしょう？今は、朝日新聞を叩くだけで、支援している人たちの活動もみえないし、みんな関心もなかなか見せない。朝日新聞が叩かれるという、そういう方向に世論が向いてしまっている。『週刊新潮』『週刊文春』『週

刊現代』『週刊ポスト』あとは、産経、読売.....袋叩きもいいところだよ。

太平洋戦争に関しては、うちの親父が中国に行っていて、戦って帰ってきて、私が産まれたんだけど、戦争のことは一言も〔聞いていない〕。中国で戦っていたということと写真もあるんですよ。たしか、銃剣か何かを持って立っているだけで、もちろん戦闘場面の写真ではないわけで。うちの親父が語るのは、戦争中に中国に行っていたことだけ。何年間どこに行っていたのかもよく知らない。戦後も中国に何度も行っているんだよね。戦友たちか誰と行ったのかはわからないけど。何をしに行っていたのかよくわからんし、私も聞かなかったね。

戦争中の話って、やっぱりタブーなんだよね。戦争って人を殺すわけだよね。話したくないのは当たり前だよね。自分が被害者的に、弾がぴゅんぴゅん飛んできた、とか、そういう話にしても、楽しい思い出ではないはずだから。戦争に行った兵隊はみんな戦争のことは忘れたいけど忘れられないわけで.....。それでトラウマになっちゃったりして。イラクに自衛隊が行って、迫撃砲で撃たれたりしたけど、戦争行為なんてほとんどなかった。それでも、〔隊員が〕28人も自殺しているっていうんだよね。戦闘行為に参加しなくても、そういうトラウマがあるわけだから。ましてや戦闘行為に参加して人を殺したり、自分も殺されそうになったら、精神的におかしくなるし、そうならなくても、それを何十年経ったあとで語ろうとはしたくない。それが戦争なんだろうね。語りたくないことが山ほどあるはずなんですよ。自分がされたことも、自分がしたことも含めて。

日本では、基本的に〔戦争でうけた〕被害については訴えるけど、加害について〔責任を認めない〕。従軍「慰安婦」もそうだけど南京大虐殺とかね。自分たちが戦地で何をしてきたかについてはタブー。原爆で何人が亡くなったとか、3月10日東京大空襲があって10万人が亡くなったとか、一般市民をふくめて多くの人亡くなっているわけだから、それが大きな問題であることは確かだけど、じゃあ日本は戦地でどういうことをしてきたかということについては語らない。これは日本だけじゃないと思うけどね。みんな自分が他の国でやってきた加害的なことについてはあまり語らない。ドイツは唯一、あれだけのことを起こした責任を明らかにしてきたわけだけど。

〔「慰安婦」問題や、戦争の被害以外の面について誰かと話すことは〕基本的にはあまりないですね。例えば、青年部の活動家のなかでも、「慰安婦」問題はほとんど語ってこなかったし。ごく最近ですよ。たまたま朝日新聞の問題なんかについて、男同士の飲み会で挑発して〔話題にしてみる〕。そうすると、どういう意見が出てくるかという橋下〔徹大阪市長〕みたいな意見が出てくるわけね。「日本だけじゃないんだから。みんなやっているよね」っていうような。相手はノンポリの人たちで、「従軍『慰安婦』はたぶんいただろう。でも日本だけじゃなくて、戦争があれば、そういう制度というのはどこの国でもあったんじゃないの？だとすれば、日本だけが責められるのはおかしいんじゃない？」というような意見。ほ

かの人も泥棒やっているからって、その泥棒が免責されるということはありません。でも、免責されないにもかかわらず、他でもやっているんだからというところで救いを求めるんだよ。

従軍「慰安婦」とか南京大虐殺とか、その領域に入ってくると、戦争とセックスというのはタブー中のタブーなんだよ。ましてや被害者〔側の立場〕だったらまだ〔話せるかもしれない〕けど、加害者〔側の立場〕なんだから。それに関しては、ナショナリズムというか、日本はそんなことをする国じゃないんだという気持ちを持ちたい人が多いんじゃないかな。ナショナリズムってそういうつまらない話よ。ワールドカップで日本がけちょんけちょんに負けると、どういうことが報道されるかという、「日本人サポーターが一生懸命ゴミを拾っています。日本人とはこういう国民性をもったいい国民なんです」。私は批判的に眺めていたけど、人はそういうところに救いを求める。他国民との違いで優越性をもって、そこに救いを求める。ナショナリズムってそうなのよ。

(2014年9月 渋谷)

M. S. (放浪者)

〔従軍「慰安婦」という言葉は〕教科書でちらっとみた記憶があるんだけど、授業で詳しく習った記憶はないかな。なにせあまり勉強が好きじゃなかったから、ちゃんと聞いていなかった。〔教科書でみたのが〕いつだかわからないけど、話題が話題だけに……。小さいときって、そういう〔性的な〕内容にはあんまり触れないじゃん？学校でも、従軍「慰安婦」という名称だけ言って、「男の人に尽くす仕事」というような曖昧な言い方をして終わりだったような気がする。だけど、そういう内容がわかるようになってから、戦争中に性奴隷みたいなことをやらされた人がいたという事実を知った。〔その事実を知ったのが〕いつだったかは覚えていない。高校よりは前だったと思うけど。

〔従軍「慰安婦」のことが問題になっていることを認識したのは〕最近だよ。韓国と関係が悪化していて、韓国人が〔「慰安婦」の〕銅像をつくったりしているじゃない？だから余計にそういうニュースをよく耳にするようになった。〔メディアをかいして見る「慰安婦」問題については〕臭いところには蓋という感じで、きっと日本政府は真相を明らかにしないで、そういうことはあったけど、だからどうするわけでもないというスタンスをとるだろうなと思った。それが悪かったって認めることができない圧力がどこかからかかっているんだろうなと感じる。韓国側の主張については、まあたしかにそうなのかもしれないと思うけど。

ど……。朴槿恵大統領の言い方をみていると、ちょっと誇張しすぎているんじゃないか、「慰安婦」問題を引き金にして圧力をかけようとしている感じがうかがえなくもないな、と思う。そういう歴史的事実があったとしても、それを利用して、政治的に優位な立場に立とうとしているのかなと感じる。なんであの人があんなに感情的なんだろう、と感じるんだよね。

〔元「慰安婦」の方の証言を映像でみたのは〕今回がはじめてだと思う⁴⁴。でも、こういうことがあったんだろうな、ということは前から想像していたから、予測通りの証言内容だったけど。でも、そんなにたくさん慰安所があったということは、それだけたくさんの方がそこで性奴隷になっていた、ということだよ。そのわりには訴えている人が少なくない？やっぱり伏せたい事実だから？本人もできればそれを言いたくないんだよね？〔彼女たちも〕言いたくないし、日本社会もそういうことがあったということを伏せたいから、全然明らかにしようとしていない……。

被害者たちが、逃走すれば殺される恐怖のもと、慰安所での生活を余儀なくされたことは、いまからどう償っても償いきれないよね。金で解決できるって発想もなんか嫌じゃない？よく私思うんだけど、例えば、いじめとかで我が子が殺されて、「損害賠償を支払え」って言うけど、金を5千万円もらったところで虚しいよね。5千万円もらって、裁判には勝ったけど、死んだ子どもは戻ってこない。国はたぶんお金で解決したがるだろうけど……。その人たちの若い時代は、いくら金をもらって手当を受けたとしても返ってこない。もう高齢だしね。それも償いきれないよね。

私、横須賀に住んでいたから、ベースが近くにあるじゃん。すごく小さいときだから鮮明には覚えていないんだけど、両親が持ち家を売って、一時期、横須賀のおばあちゃんの家に住んでいたことがあった。詳しい経緯は忘れたけど、米軍基地の近くに行ったときに、おばあちゃんと親が「この近くはうろうろしちゃいけないのよ」と言うのを聞いた記憶がある。「なんで？」って聞いたら、「ここにはアメ坊が住んでいるから、行くと悪戯されたりするから」って言われた。その「悪戯」の意味が当時はよくわからなかったんだけど、まあそういう意味だった。逆に、大きくなってからは、基地周辺の女子高生たちのなかには、ベースの人と付き合っていることを一つのステータスのようなものとする人が多かったけど。

〔あのとぎの家族の言葉の意味を考えると〕アメリカより日本は今弱いわけじゃん。強い人たちに女の方が性的に奉仕させられるというケースが、戦争のときにあったことをおばあちゃんは知っていて、それが娘であるうちの母を介して、私に伝えられたんだろうな、と思う。そんなこともあって、戦争とか軍隊のなかで、弱い立場に置かれると、女はそういうことをさせられるということを何となく知った。でも、自分が戦争のなかに入る状況が今後あるの

⁴⁴回答者が接したのは以下の情報。ジャン・ラフ＝オハーン氏がオーストラリア放送協会製作の番組に出演したときの映像（注40参照）、世界各地にある旧日本軍の慰安所跡と元「慰安婦」たちに取材した番組“‘Comfort Women’ One Last Cry,”（2013年3月放送, Arirang TV 製作）。

かどうかわからないけど、それを当時はイメージしづらくて、あんまり真摯に受けとめられなかった。でも、自分が仕事でベースに出入りするようになって思うのは、そのなかで恋愛して結婚していく人もいるから、米兵をみたら気をつけろ、とも一概に言えないな、ということ。たしかに、沖縄でもそうだけど、婦女暴行事件は起きているけどね。

インターネットで〔従軍「慰安婦」についての〕情報を探してみたけど、あまりにも情報があつすぎて、どれが正しいことを言っているかわからない。「それを仕事として、今でいう売春婦みたいな感じで働いていた人がいて、収入をもらっていた」と書いてあるウェブサイトもあるし、「貧しい家の人たちが出稼ぎみたいな感じで送られてきた」と書いてあるウェブサイトもあった。あとは「強制連行されて、強制的に性奴隷にされた」と書いてあるウェブサイトもあるし。どれが正しいのかな……。インターネットの情報をいろいろ見すぎて、逆にわからなくなった。メディアって、それを見た人がデマ情報を流すのを狙って書いている場合もあるんだよね、おそらく。NHKとかもそうだとしたら、もう何も信用できないよね。

〔「慰安婦」問題についての自分の思考回路を考えてみると〕一般論として、人間って誰でもそうだと思うけど、自分とか自分の身内が被害にあったことにはすごく同調できる。狭い範囲で言ったら自分の家族、広い範囲で言ったら自分の国民には同調できる。でも、自分たちが誰かに危害を加えたとして、その相手側の辛さには共感できないんだと思う。例えば、自分の家族が殺人を犯して、相手は死んで、その家族はすごく怒っている。でも、その人たちの悲しみは味わうことができない。どうしても自分の家族が相手を殺害した理由を見つけようとしてしまうんだよ、たぶん人間は……。仲間意識が同調意識よりも強く出ちゃうのかな。

だから、戦争中に、自分の身内であるおじいさんがしたこと、家族がしたことのでいで泣いている人を見て、すごく申し訳ないって思うけど、「国には逆らえないし、おじいさんもそうするしかなかったんだよ」という感情の方が強く出ちゃうんじゃない？それはたしかにショッキングな話だけど、日本もそうするしかなかったんじゃないかな、っていう一筋の希望みたいなものがあつて……。情報をたくさん見すぎて何が正しいかわからなくなったって、さっき言ったけど、例えば「他の国も戦争のときには同じことをやっていた」とか『『慰安婦』の人たちを強制的に連れてきたんじゃないかと、貧しい家の子たちが商売のために連れてこられた」とか、そういう情報の方をつい見えてしまって、そっちのインパクトの方が強く残っちゃうんだよね。被害者側の主張よりも、無意識に〔日本軍がやったことの〕言い訳みたいなものを先に取り入れちゃう。

それって自分がコントロールしているんじゃないかと人間の本能で、相手の被害者の方に同調するというよりも、身内とか自分の近いものを保護しようっていう防衛能力みたいなものが働くのかなと思う。本当だったら、思考回路を作り上げる時点で、自分の悪いところを受

け入れ、理解し、やってしまった悪いことを謝りつつ、自分の誇りとアイデンティティも強く持つことができればいいんだけど……。自分の思考回路をみていると、やっぱり自分の国にはこういう理由があったとかどうしても考えてしまう。例えば、喧嘩して相手に怪我させちゃったときに、暴力を振るっちゃったことはすごく申しわけないと思っただけ、私はあの人を殴るだけの理由があった、あの人にすごく侮辱をされた、という言い訳が出てしまう。でも、向こうの親は「うちの子に怪我させて！」って泣いて怒っている。それは申しわけないなと思うけど、こっちは言い訳を探してしまう。

私は海外に行くことがあるけど、最近は、歴史の話題はタブーなんだってことがみんなわかってきているから、戦争のことを急に話題にされることは少ない。でも、過去に1、2度「戦争のときにこういうことがあったことを知っている？」って言われて、「いや、そんなこと知らないなあ」って思ったことがある。それで「歴史を勉強しなくちゃな」と思ったまま、していないんだけど……。どこでだったかな？高校のときにアメリカにいたときかなあ。一人でサイパンにダイビングのライセンスを取りにいったときだったかなあ。

戦争といえば、シドニーにいたときのことで、今思い出したことがある⁴⁵。小学校3年生ぐらいのときに、家族でキャンベラに行った。キャンベラ近郊のオレンジってところわかる？白い墓がたくさん並んでいるところ。そこに行ったのね。戦争の話ってすごく暗い気持ちになるから、私は昔から戦争のテレビとか『火垂るの墓』なんかも苦手だった。でも、父親がそういうのが好きだから連れて行かれた。そうしたら、〔オーストラリア人の〕おじいさんが出てきて、うちの父親にすごい熱弁しているの。私は何を言っているのかまったくわからないから横でぼーっとしていた。うちの母親も弟も英語がわからないし、父親もたいしてわからないと思うんだけど、1時間くらいにわたって、熱く語られていた。そのおじいさんは怒っている感じだった。すごく興奮していた。あとで「何を話していたの？」って聞いたら、父親もよくはわからなかったらしいんだけど、「戦争のときに日本人が来て、こういうことをした。ああいうことをした」というようなことをずっと語っていたみたい。

第二次大戦のときに、日本軍がオーストラリアに来て、何をしたかっていう事実を、私は勉強したことがなかった。父親に「日本人ってここに来て、戦争したの？」と聞いたら、「実はそうなんだ」と言っていた。でも、私はそこまで歴史に興味を抱く人じゃなかったから、「へえ、そうなんだ。教科書には書いていなかったな」と思って、終わったんだけど……。そこで興味をもって調べたりはしなかった。なんで？こんなに1時間も！とは思ったけど。

あの時のおじいさんにしてみれば、どこに怒りを向けたらいいかわからないのかもしれないけど、私たちとしては、もう戦争の時代に生きていた人たちが少なくなっている。日本の教育では、第二次世界大戦といえば、広島・長崎の原爆のことしか習わないよね。とりあえず

⁴⁵1987年から1992年まで、回答者はオーストラリアのシドニーに暮らした。

この国には、臭い物には蓋みたいところがあるから、自分たちが不利益を被ったことについては申し立てるけど、自分たちが他の国に対して与えた損害とか行なった悪いことについてはほとんど伏せているよね。

(2014年9月 函館)

S. A. J. (学校教員, アメリカ合衆国出身)

アメリカの公立学校では、通常、10歳か11歳くらいのときに、第二次世界大戦のことを教えるが、ほとんどの学校がホロコーストとヨーロッパ戦線での戦争行動をとくに重点的に扱う。通常、カリキュラムには、ホロコースト博物館やそれに類する場所への見学旅行が含まれる。(その年齢の子どもたちの多くにとって、これらの博物館は相当生々しく、忘れがたい印象を残す)。

私の学校では、5年生のときに第二次世界大戦について初めて習ったが、アメリカ軍のヨーロッパ戦線への参加に加えて、太平洋戦域における戦争への関与についても習った。私と同じ学校制度のなかで育った生徒は、中学生の頃までに、戦争捕虜の待遇や中国・インドネシアなどへの侵略といった日本の「明白な」戦争犯罪の多くについては、すでによく知っていた。しかし、性奴隷については、生徒たちの年齢が比較的低かったことと、話題の性質をかながみて、議論の中心にはならなかった。通常、生徒たちは性奴隷についてはもっとあとで学習した(私の場合は、8年生のときだったと思う)。

うちの学校のカリキュラムでは、第二次世界大戦中の性奴隷についての議論は、アメリカの奴隷制度とひとまとめにして、同一の単元として学ぶので、多くの生徒(混血そして/あるいはアフリカ系アメリカ人の出自をもつ生徒)にとっては理解しやすく、両方のテーマに共感することができる。私たちはたくさんのビデオをみて、奴隷制度についての文学をかなり読んだが、これらの媒体はかなり生々しい描写のものだった(あらゆる形態の奴隷制度の恐怖を生徒に伝えるために必要だった)。

〔性奴隷とアメリカの奴隷制度の〕テーマを組み合わせ、綿密な授業計画が構成されていたようには記憶していない。その代わり、二つのテーマは人道主義的な理想を教えるための例として用いられていたようだった。合衆国では、数日間、さらに一ヶ月間(2月)、多文化主義や市民権がしばしば授業内の話題のテーマとして取り上げられる。これらの時期には、過去に勉強した話題(ホロコースト、奴隷制度、合衆国の西方への領土拡張など)を再考したり、それらの出来事の影響について話したりする。さらに、新しい話題や、それほど論じ

られてこなかった話題についても話をする。うちの学校では、このような授業のなかで一度、性奴隷と売春（アメリカ史においても、アフリカの奴隷貿易に関連して、同様のことがしばしば起こった）が取り上げられた。

このような授業計画は、ほかの国で起こった出来事について、生徒たちに教えるうえで効果的だと感じた。小学校や中学校の歴史の先生の多くは、一つの視野／世界観に重点をおき、さまざまな他者の視点からものごとを評価しようとはせず、「視野が狭い」と責められうる。そのことに少しは意識的な先生たちに教わったことはラッキーだった。この種の授業計画で、唯一、気に入らなかったのは「散漫」になる傾向があったところだ。つまり、与えられた副論題に十分な時間が費やされず、文化が評価されることに生徒が慣れるようになるための教育理論の枠組みがほとんどなかった。例えば、大部分の生徒がほとんど知識を持たない国について話をするので、生徒たちにその国の苦境への感情移入を促すのは困難だった（でも、それを、生徒たちにとって馴染みが「あり」、すでに「十分」感情移入しているアメリカの奴隷貿易のような事柄と比べることは、少しはその助けになった）。

〔性奴隷の〕内容についての私の反応を思い出すのは難しい。好奇心が半分、嫌悪感が半分だったのではないかと思う。私も含めて、ほとんどの生徒は、このようなことが世界史において起こったことをまったく「非現実的だ」とか「前例がない」とは思わなかったが（ほとんどのアメリカ人は、彼らの周囲にある暴力的環境から守られていないから）、生徒たちは決して無関心ではなかった。私たちの大部分は、これほどまでに恐ろしいことがそもそもどのようにして起こりえたのかということに困惑した。

うちの高校の歴史の授業では、第二次世界大戦についてさまざまな側面／視点からとらえた膨大な情報が生徒に与えられ、私たちの多くは戦争の多様な局面についてレポートを書かなければならなかった。私の高校には、太平洋地域でのアメリカの戦争（日本と敵対した第二次大戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争など）だけを扱った別の授業があった。私はその授業を履修しなかったが、他のより一般的な歴史の授業でも、これらの戦争についての議論はたくさんあった。

〔性奴隷の〕テーマについての証言はあまり多くは見えていない。でも、高校のときに、一人の証言者がうちの学校に来て、そのときの経験について話してもらったことがある（このイベントでは、ホロコーストの生存者も話した）。奴隷状態にあったときの経験について、その女性が話すのを聞くのは興味深かった。そして、彼女は出来事に関する私たちの質問すべてに答えることをまったく厭わなかった。それは、私たちが前にみたことがある、どの証言ビデオよりもずっと良かった。私は常々、証言ビデオは1) 編集のために必要不可欠な情報を欠いている、もしくは2) 犠牲者にとっては個人的な話題であるにもかかわらず、非個人的であるように感じた。

私の父方の親戚はアフリカ系アメリカ人で、私の曾祖父母は奴隷だった。私の祖母は彼女の母親の経験や、彼女の祖母や母親から聞いた話を、私によく語ってくれた。そういう話を聞くと頭から離れず、ずっと苦しめられたし、奴隷制度（や同様の残虐行為）が現代に起こったことを考えるとシュールな気がする。例えば、私の両親が会う5年前には、黒人男性と白人女性が結婚することは（いくつかの州で）違法だったのだ。

正直なところ、生存者による証言イベントの詳細をすべて思い出すことはできない。すでに述べたように、一人以上の証言者がいて、イベントは性奴隷制度だけを扱ったものではなかった。アメリカ人捕虜、真珠湾攻撃の看護婦、性奴隷だった女性（覚えていないが、韓国人ではなかったと思う）、それからホロコーストの生存者がいたと思う。

私と他の生徒全体は、発表者全員を支持していたことを覚えている。無礼な振舞いをする人はいなかったし、皆、ほとんどの場合、彼らの話を信じた。当時のアメリカ文化の影響で（9.11後だった……一年経っていなかったと思う）、兵士や戦争犯罪の生存者たちを支持する雰囲気があった。だから、大部分の生徒はあとで軍に入隊したいと思い、その意図を表明したり、別の何人かの生徒は（とくに、捕虜、性奴隷被害者、ホロコースト生存者を支持して）話しつづけていた。うちの高校には、通常、一年のうちにたぶん2ヶ月くらい、軍の新兵募集人（ルビ：リクルーター）がいて、エントランスや食堂の近くに座っていた。だから、講堂を出るときに、何人かの生徒たちが「例の軍の新兵募集人（ルビ：リクルーター）」について話したり、話しかけたりしていたのを覚えている。唯一、ホロコーストの生存者だけがちょっとした困難にぶつかったことを覚えている。というのは、うちの高校には、ネオナチ（ヒトラー青年隊）が数人いたから。彼らは生存者の男性の話を信じないか、あるいは、彼の経験は自業自得だと感じていた。それをみるのは悲しかった。

いいえ、〔この話題について日本人の友だちと話したことは〕ありません。この話題について議論する気は大いにあるけど、そういう状況は一度も起こらなかった。以前、日本人の同僚と第二次大戦について話したことはあるけど、そのときでさえ、そういう話題に話が及ぶことはなかった。原爆資料館のことやロシアに対して北方領土を失ったこと（私は北海道で働いているので後者についてよく耳にする）といった別の話題について話した。一部の人たちは〔戦争の被害者であるという〕被害者意識をもっているみたいだけど（彼らはそれを認めようとはしないが）、他の人たちはそのようには感じていないか、あるいは、日本を「被害者」とみなす議論が成立するためには、アメリカを敵の一つとみなさなければならないと考え、私に対して、そういう意見を表明しないように気をつけている。

アメリカ人（少なくとも、政治家ではない人たち）は、日本の歴史修正論者やホロコースト否定論者があまり好きではない。とりわけ、まったく正反対の証拠が多く存在するときに、個人がとりうる立場としては奇妙なものだ。それらの主張をする人たちの背後には、明らかに政治課題（ルビ：アジェンダ）があり、私には日本の学校制度を変える必要があるように

思われる。もしもアメリカで誰かが「アメリカの学校は子どもたちにアメリカの奴隷制度を教えるべきではない」と決定したとしたら、誰もがまったく馬鹿げていると思うでしょう。

(2014年10月 函館)

H. S. (弁護士)

〔戦時中の日本の性奴隷について最初に知ったのが〕いつだったか思い出せない。おそらく、日本の首相が謝罪声明を公式に発表したときに、テレビのニュースか新聞でみたのだろう。私はまだ若かったので、あまりよく理解していなかった。本当の意味を体裁よく覆い隠す「慰安婦」という言葉があまりにも曖昧だったので、日本が戦争中に行なった悪事の一つだと思っただけだったかもしれない。マスコミ報道でも学校の授業でも詳しい説明はなかった。

〔性奴隷の生存者の証言には〕今回もらったビデオを通して初めて触れたと思う⁴⁶。テレビで見たことがあるのかもしれないが、覚えていない。証言自体を聞いたり読んだりしたことはなかったが、性奴隷制度については知っていた。だから、そんなに感情的にはならなかった。映画をたくさん観たり、大学で国際政治を勉強したので、そのせいもあって感情的に動じなかったのかもしれない。その女性たちをレイプした日本兵たちのかなり強烈な証言の方に驚きを感じた。

いいえ〔性奴隷の問題について友人と話をしたことはない〕。韓国人の友人たちと戦争について話したことがあるけれど、とくに性奴隷について話し合ったことはない。今思うと、それは気まずさのせいではなく、ただ話題にならなかっただけ。潜在意識的にその話題を避けていたのかもしれないけれど、それはわからない。

それは真面目な話し合いではなく、むしろ、第二次世界大戦中に日本がやったことについての何気ない会話だった。例えば、私には韓国人の友人が何人かいるが、そのうちの一人の家を訪れたとき、彼女のおばあちゃんが日本語を上手に話した。日本が〔朝鮮半島〕を占領し、人びとに日本語教育を強制したときに、彼女はそこにいたからだった。でも、私たちはそのことをとくに問題にはしなかった。

⁴⁶回答者が接したのは以下の情報。ジャン・ラフ＝オハーン氏がオーストラリア放送協会製作の番組に出演したときの映像（注40参照）、ウェブサイト Fight for Justice における女性国際戦犯法廷での証言映像（注41参照）。

〔戦争の記憶やナラティブが被害者性を強調する傾向にあることについて〕限られた人たちだけが戦場を直接経験したからだと思う。それに対して、一般の人たちは国内で苦勞に耐え、爆撃を目撃した。さらに、マスコミは通常、後者に焦点を当てているようだ。

彼ら〔兵士たち〕が〔戦争の残虐な側面について〕沈黙することを選んだのかどうかはわからない。でも、理屈の上では、人間は自分の関わった悪事について、とくに愛する人たちには話したくないものだ。自分に対する彼らの見方が変わってしまうかもしれないから。

(2014年10月)

R. S. (医療系専門職)

〔従軍「慰安婦」という言葉を〕最初に聞いたのがいつだったか、思い出すのはちょっと難しいね。日本政府が謝罪するとか、しないとか言って、元「慰安婦」の人がチマチョゴリを着て、テレビのニュースに登場する姿をみたのが、たぶん最初だと思う。中高のときだと思うけど……。いつだったか記憶が定かではない。韓国人のおばあさんがチマチョゴリを着て、泣いている光景をみたのは記憶に残っている。だいたいお年を召して、このおばあちゃんにも若いときがあったのかという感じで、「慰安婦」という言葉のイメージとはかけ離れているなあと思った。

「慰安婦」の「慰安」って言葉は、慰安旅行とか言うくらいだから、べつにそれ自体は性的な表現ではない。だから「慰安婦」問題って言われて、「なんで『慰安婦』が問題になっているんだろう」って思った。ただ、そのときは高校生くらいだったから、なんとなく「ああ、そういうことか」と察知した。『慰安婦』って何？」ってママに聞いてはいけないんじゃないかっていう雰囲気を感じとっていた。だから、誰にも聞いたことがなくて、「慰安婦」イコール戦時中に売春を強要された可哀想な立場におかれた人たちだということが明確にわかったのは、何度もニュースを見ているうちになんとか。テレビのニュースでは「この人たちは『慰安婦』です」と言っても、「慰安婦」の具体的な説明は流れない。韓国との関係が悪くなったりして、そういうニュースがいっぱい出てきて、それをみてちょっとずつ分かっていったという感じ。

少なくとも学校で習ったことはないと思う。中学校で「慰安婦」のことを習うということはなさそうな気がするのよね。「慰安」というのが何かという微妙な問題もあるでしょ？高校生になると教えてもいいような感じがなんとなくするけど。しかも、いかんせん理系だった

ので、高校で歴史ってほとんど習っていない。歴史の時間は、化学とか数学の授業にあてられていたから、一般常識的な部分も含めて、歴史にはかなり弱いよね。だから、たぶん学校で「慰安婦」のことは習っていないと思う。

河野談話、村山談話についても、それが出たときには知らなかった。知ったのはここ数年だと思う。ニュースで「すでに過去に決着がついているのに」と取り上げられるのをみて、河野談話、村山談話があったということを知った。村山さんって、たぶん私が高校生のときに首相だったと思うから、最初に「慰安婦」という言葉を聞いたのは村山首相のときだったかもしれない。そうすると、やっぱり高校生のときかな。そのときにチマチョゴリの映像をみたのかどうかまではわからないけど。

ニュース以外のレベルで、「慰安婦」の証言を聞いたのは今回が初めて⁴⁷。韓国人の「慰安婦」のことは知っていたけど、ヨーロッパ人で戦時中に日本軍の「慰安婦」にさせられた人がいたことは、じつは初めて知った。〔ジャン〕ラフ＝オハーンさんの証言番組のなかでは「コンフォート・レディ」と言っていたみたいだけど、最初全然意味がわからなかった。日本語に置き換えてみて「ああ、『慰安婦』のことか」と思った。日本語って結構オブラートに包む表現が得意だから、実態が上手に覆い隠されちゃっている。

恥ずかしさ——映像では「シェイム」という言葉が使われていたけど、恥と真実を秤にかけて、真実を語る方がまさっていて、証言をするようになったとラフ＝オハーンさんは言っていた。でも、それに50年くらいかかった。彼女の生い立ちが語られていたので、その話を聞いていると、ごく普通の家の娘さんだった。何も悪いことはしていないのに、ある日突然連れていかれて、そういう状況におかれることになった。それって想像もできない話だけど、普通に考えたらとんでもないことじゃない？

韓国の「慰安婦」の人にしても、突然連れていかれるとか、そういう状況を具体的に知っていたわけでもないし、その人がどういう家の生まれで、どういうふう to 育ったのかも知らないから、おばあさんが名のり出て、泣いているところを見たりしても、お家がお金に困っていたのかしらとか、その人の社会的な背景に「慰安婦」にさせられる要因が何かあったんじゃないかとちょっと思っていた。差別的な見方かもしれないけど。だから、貧しい家庭の出身で、教育もあまり受けられない女の子が「慰安婦」にさせられたのかなと漠然と思っていた。だけど、さっきのラフ＝オハーンさんの話を聞くと、家庭の要因、貧富の差なんかは関係なかったみたいだね。「慰安婦」というと、貧しい家の出身で苦労した人というバイアスがあったイメージがあったけど、今回オランダ人の証言をみて、韓国の「慰安婦」の場合も千差万別で、いろんなケースがあったんだろうなと思った。

⁴⁷ジャン・ラフ＝オハーン氏がオーストラリア放送協会製作の番組に出演したときの映像 (注 40 参照)。

ラフ＝オハーンさんの証言で印象に残ったのは、彼女が終始笑顔で話していたこと。笑いがあつたりして、ずっと笑顔で話していたところは印象的だった。笑って話せるようなことでもないと思うんだけど……。まあ生い立ちのこととか、慰安所の話だけが中心だったわけではなかったからかな。でも、当時のことはきっと一生忘れることはないだろうし、いろんなきっかけがあるたびに思い出すんだろうね。

子どものときは、戦争の本をよく読んでいた。『飛べ！千羽づる』⁴⁸でしょ、原爆の話。それからタイトルは忘れたけど、原爆にあった子の手記を集めた本でフォア文庫から出ていたものとか。『白旗の少女』とか『ひめゆりの少女たち』とか、沖縄戦と原爆のものが多いかな⁴⁹。あとは、戦争中に動物園の象が殺される話とか、椋鳩十の『マヤの一生』という本⁵⁰。戦争中は贅沢を慎むべしということで、犬を飼っている人は差し出せと言われ、椋鳩十が飼っていた犬も匿いきれなくなって殺されることになる。でも、命をとりとめて家に帰ってくるんだけど、結局死んでしまうという話。戦争の被害にあった動物の話も結構読んでいた気がする。

当然だけど、そういう子ども向けの本には「慰安婦」の話なんかは出てこないよね。でも、そう考えると、看護師として勤労奉仕していたという女子学生の場合なんかは、大丈夫だったのかしらと心配になる。どうだったんだろうね。性暴力の被害にはあわなかったんだろうか。もしかしたら、そこには疑似恋愛みたいなものが生じていて、性暴力とはとらえられていなかったんだろうか。

うちのおじいちゃんは中国に8年行っていた。もう亡くなっているから、今となっては直接聞く術はないけどね。でも、たとえおじいちゃんが慰安所に行っていたとしても、私はおじいちゃんに対する嫌悪感を抱かないと思う。それは自分のおじいちゃんだから。ものすごく特別な環境にいたんだろうなと理解しようと思うけど。でも、だからといって、「慰安婦」問題は仕方なかったとは思わない。それとこれとは別。肉親だから「もう絶対許せないわ」とはならないだけで。社会的な問題としてはやっぱり問題だと思うよ。そこはもう自分勝手な意見だけ。

戦争中の兵士って「俺ってすごい」という錯覚に陥るのかな。だって、人を殺してなんぼなわけでしょ。でも、それって、そもそもどう考えたって異常じゃん。兵士たちにとっては殺すことが仕事だったわけでしょ。戦争を知らない世代からすると、それはもうまったく意味が分からない。その極限の状態っていうのは。人を殺したくて戦争に行った人なんて、そんなにいなかった。兵士に志願する人も一部いたとしても、だいたいの人には赤紙が届いて、出世であるわけなのに「出世」とか「万歳」と言って戦地に行ったわけだよね。何かで読

⁴⁸手島悠介『飛べ！千羽づる——ヒロシマの少女 佐々木禎子さんの記録』講談社、1986。

⁴⁹比嘉富子『白旗の少女』講談社、1989年；那須田稔『ひめゆりの少女たち』偕成社、1977。

⁵⁰土家由岐雄『かわいそうなぞう』金の星社、1970年；椋鳩十『マヤの一生』大日本図書、1970。

んだけど、最初の一人を殺すのにはすごく勇気がいるんだけど、1人、2人殺すとあとは感覚が麻痺して、何も感じなくなるらしい。

戦争って常軌を逸している。普通の精神状態ではたぶん無理じゃないかと思う。とくに戦争末期になると、十分な食べ物もなく、飢えて、武器も不足した状態で、正常な判断ができる状態ではなかった。まあ、戦争のせいにすればすべてが済むわけじゃないと思うけど。これは「慰安婦」のことだけじゃないけど、日本政府がやったとか、どっちの国のほうがひどいとか、他の国もやっていたから日本はそこまでひどくないとか、そういうことではなくて、戦争というものを憎むべき。日本のこれが悪かったとか、あれが悪かったと言うよりも、戦争を憎んで、戦争を起こさないようにするべきだと思う。

(2014年10月 飯田橋)

E. T. (主婦)

〔「慰安婦」問題については〕朴槿恵さんがこの問題に関して〔日本批判〕をするようになったときから、ちょっと関心を示して、河野談話とかあの辺は読みました。しかし、それ以上、自分から何かを調べようということにはしていない。ただ、ニュースのなかで出てくると、各新聞のその関連のニュースは必ず見るようにはしていました。〔この問題をめぐる朴槿恵さんの対応は〕ポイントがずれている話。韓国と日本のあいだの政治問題というのは他にもたくさんあるわけだから、そこにあの人が今さら焦点をあてて、文句を言ってくるのはおかしいと思っている。

なぜならば、当時の両国間で決めてやったことでしょ？戦争はもちろんいけないことだけど。それから何十年も引きずっているわけじゃない？でも、その引きずっているということを考えると、「慰安婦」問題だけではないはず。もっと色々有ると思う。この問題に関しては、ある程度、日本は韓国という国に対してはお金を払っている。「慰安婦」個人には払っていないけど。国に対しては払って、一応、解決しているわけじゃない？「アジア女性基金」だったっけ？それで一応、両国間で解決したわけだから、今さら個人に賠償をなんて言い出したら.....。

〔「慰安婦」裁判の始まった〕1990年代といったらまだ50代だったのかな。子育てなんかで、ゆとりをもってニュースを見ていなかったせいもあるけど、その当時はまだこういう問題に関心がなかったから、〔映画『オレの心は負けてない』をみて〕こういう活動をしていた人もいたのだと思って、その点は面白かったけど.....。でも、さっきの映画では〔宋神道

さんが] どうして「慰安婦」になったのかという部分が抜けているよね。どういう家庭環境で、どういう経緯でそこに行くことになったのか。当時は日本人も貧しくて、日本の国のなかでも〔身売りがあった〕。日本が貧しかったときは、親が子供を売ったりもした。そういうことを考えると、この人がどういう経緯で「慰安婦」になったにしろ、今さら政府が補償しろと言われてたってできない。これを言うと冷たいようだけど、その時代にそういう環境に生まれてしまったのはアンラッキーだったのかなあと思う。若い人は覚えていないだろうと思うけど、日本にも、からゆきさん、吉原、「おしん」の世界、「姨捨山」も有ったのだから、そういう話をいちいち掘り下げていったら、なにも立ち行かなくなってしまう。

悪の部分ではあるけれど、歴史の流れの一部なのかもしれない。必要悪という言葉があるけど、そういう部類の問題なんじゃない？悪だけど必要。そういうふうに考えると、戦争はいけないっていう事実は揺るぎない。でも、もし戦争が存在してしまうとしたら、こういうことも起こりうるのだろうなって。

私も日本人だけど、日本人って、戦争でも終わってしまってから「戦争はいけない」って騒ぐでしょう？54基もある原発にしても、54基も建つ前になんとかすればよかったのに、今頃になって騒いでいる。そうやって後になって騒ぐのは好きだけど、そのときにちゃんと意見を出して立ち上がる人がいない。戦争のときも、終わってから「いけないことだった」と言うけど、あのとき戦争を止められなかったのは国民だし、原発も54基もできるまで放ったらかしておいたのも国民。それで甘い汁を吸っていた人もいるし。そういうふうに考えると、いつも後になってから「悪かった、悪かった」と言う。

〔従軍「慰安婦」という言葉を最初に聞いたのは〕母親との会話かな。母は神戸に暮らした人で、朝鮮・韓国の人たちの部落があった。母は、子供の時代から、そういうところには近づいちゃいけないと言われていたそうで、母はニンニクが嫌いで、あそこの近くに行くとその臭いがするとか、そういう話のなかで、そういうことがあったという話を聞いたような気もする。うちの母は朝鮮人嫌いだった。当時、私は中学校くらいだったと思う。私がお料理をするようになってからも、ニンニクを入れるたびに、母はそんなことを言っていた。だから、私のなかにも母からの影響でどこか韓国人軽視のところがあるのかもしれない。人種差別はいけないのだけど、母は明治の女性だし、ダメなものはダメと言う。当時は〔「慰安婦」という言葉の〕意味はわからなかったし、今になってみれば、「慰安婦」という言葉は適切じゃない表現の仕方。もうちょっと別の言い方があったかもしれないのね。

最近、〔「慰安婦」問題について〕誰かと話すことはないです。それも日本の国民性よ。例えば、アメリカ人やイギリス人なんかだと、本を読んで、読書会があって、そこで自分の意見を言ったりするじゃない？知り合いのイギリス人とお茶を飲んだことがあるけど、70代とか80代の女性もいたけど、すごくしっかり自分の意見を持っていた。働いている人は違うと思うけど。〔日本の主婦で〕70代、80代に近い人は「今日のおかずは？」という話の方が

多い。息子とは、「慰安婦」問題について〕たまに話すけど……。〔息子にしても〕終わった問題だというところから、わたしはそれを「ふーん」と思って、聞いて「私も同じ考えだな」と思うから、それ以上は〔話さない〕。まあ、男と女ではちょっと話しにくいところもあるじゃない？性的な部分があるから。

〔戦争についての話を聴いた経験は〕いっぱいある。というのは、傾聴ボランティアというのをやっているのね。〔老人〕ホームに行くと、お年寄りと話していると、結局、一番鮮明に残っている記憶ってあの頃のこと。多少の認知がある人でもね。今年で、4年目になるけど、そういう話を聞いて「いやだ、戦争って終わっていないのだ。あの時代に生きて苦勞した人たちがまだ90歳とかでご存命で、その人たちの記憶は戦争なのだ」と気がついた。中国からの引き揚げで苦勞した人の話とか、いろいろ聴いたことがある。今もそうだけど、あの当時、日本人は中国にたくさん行っていたのね。満鉄にはじまって沖電気なんかもあったわけだから。いい思い出もしているけど、もちろん苦勞話もある。引き揚げの話では、大変な思いをしたのだなということをとってもリアルに感じた。あとは、買い出しの話。駅で、せっかく買ってきたお米を取り上げられた話とか。

自分自身の戦争経験というのもちょっとはあるのよね。昭和18年生まれだから。食生活が貧しかったという記憶。お昼に、お芋とかカボチャが出てきて、それをみんなで食べた。うちの場合は、それでも母が着物をたくさん持っていたおかげで、それを食べ物に換えることができたという話をよく聞いた。まだ恵まれていたのかもね？だから、当時、もっと大変な人がいたはずなのよね。その程度の戦争の記憶〔はある〕。それと、当時父の仕事先の疎開で、前橋に住んでいて、近くの米軍基地から兵士たちがジープで来て、〔私が〕外で遊んでいると、チョコレートとパイナップルの缶詰と黒砂糖やガムをくれた。それが美味しくて。いまだにパイナップルと黒砂糖とチョコレートが好きなのよ。〔その当時〕よっぽど美味しいと感じて、感動して、その衝撃で、今も好きなのかもしれない。最近、傾聴ボランティアで戦争の話聞くようになって、そんな自分の体験をふと思い出した。

傾聴ボランティアの基本的な方針は、人の話を黙って聞くというもの。聞き役。NPO法人ホールファミリーケア協会というのがあって、鈴木絹英さんという人がやっているのだけど。その人の講習会を受けた。傾聴ボランティアは、その講習会を聞いた人たちのなかで「じゃあ、やってみようか」ということで始まった活動。お天気の話からはじまって、「体調は？」「お生まれは？」「若い頃はどんなふうにお過ごしでした？」とか、現在の趣味の話をしていても、「昔からやっていたのですか？」とちょっと振ると、わりと戦争の頃の話が出てくる。

〔傾聴ボランティアをはじめた理由は〕私は基本的に、子供に迷惑を掛けなくて死にたいと昔から思っている。自分の母親を見て、大変だったから。その話を友達にしたら、「だったら、今、何かボランティアしておかないとダメよ。いつかは、人のお世話にならないと駄目

なのだから、できるときにボランティアをしておきなさい」と言われた。それで、何か自分にできることはないかということで、東京に居た時は給食の配達。転居してから音訳のボランティアの活動。本を読むのが好きだから、これは良いかと思った。活動自体は好きだったけど、雰囲気になじめずやめてしまい、何とかしなければと思って、次に選んだのが、精神保健福祉ボランティア養成講座。ひと月くらい、それに毎週通って、最後に統合失調症の人などが、運営している施設で実習が有り、講座は最後まで受けたけれども、実際に現場に行ってみて、無理だと思って辞めた。それでも、何か自分にできることはないかなと思っていたら、たまたま傾聴ボランティアをみつけた。

鈴木絹英さんは〔傾聴の手法を〕アメリカで勉強してきた方で「新しいことなのだなー、行ってみよう」と思った。基本的に人が好きだし、お話も好きだし。でも、行ってみたら、話をするのが好きでは駄目でした、話を聞くわけだから。今でも、傾聴モードに入ってから行かないと、自分の話をしたくなっちゃったりする。話すモードじゃなくて、聞くモードに自分で切り替えないと。例えば、ホームでは「死にたいです」という言葉や否定的な言葉が出てくるけど、それをはぐらかさないで、きちんと受けとめて、とりあえずは相手が「死にたい」と言っているその気持ちに寄り添う。この人とは何でもしゃべれるという信頼関係みたいなものが出てきて、家庭の事や色々な話が聞ける。それが勉強になることが多い。

(2014年10月 飯田橋)

Y. I. (大学院生, 韓国出身)

日本軍の性奴隷について、最初に学んだ時点を正確に思い出すのは難しいですが、それに関して自分の中で認識し始めたのは14歳か15歳くらいの中学校の歴史の授業を通してでした。韓国は日本に植民地支配を受け、韓国の若い女の子たちが不当に連れて行かれ、性的な奴隷として扱われたという、その事実だけでも、日本と日本人に対して怒りと否定的な認識を持つには十分でした。私の日本という国に対する最初の認識は、これらの植民地支配の経験から作られました。

その後、私は高校に進学し、大学の入学試験の準備をする中で、植民地時代についてさらに詳しく学びました。社会科の科目のなかから三つ選ぶことができたのですが、私は「近代・現代史」「法律・社会」「政治」を選択しました。近代史の部分は、主に日本の植民地支配について、現代史の部分は解放後の韓国政治について学びました。近代史の中で、性奴隷制度は主要なテーマではありませんでしたが、日韓関係の話題の一部として扱われました。植民

地時代の歴史については、日本政府が1910年代、1920年代、1930年代の各時期にどのような政策で朝鮮の人びとを統制しようとしたのかを学びました。例えば、1930年代には、総督府によって朝鮮の国家を壊滅する政策が実施されました。朝鮮の人たちに日本の精神と文化が教え込まれました。日本語教育が行なわれ、朝鮮語を話すことは禁じられました。人びとは日本風の名前に改名させられました。それに従わなければ、学校への入学許可をもらうことができなかつたり、食糧や日用品の配給を受けることができませんでした。試験問題は、例えばこのように出題されます。「次の選択肢の中で1930年代に行われた日本の民族抹殺政策として正しくないものはどれか？」そして、選択肢の一つとして1920年代の政策が提示され、それが正解となります。このように韓国の学生らは日本の学生らと違って、植民地時代について詳しく勉強します。私が高校時代にもっとも好きだった科目は近現代史であり、他のクラスメートよりも敏感に反応したかもしれません。一例として、試験勉強をしながら、教科書で、日本軍が朝鮮の良民たちを教会堂に閉じ込めて火をつけて殺したという話を読んで、悔しくて涙を流した覚えがあります。韓国人でいながら、これらの歴史的な事実を知っても、日本に対して良い認識をもつというのは難しいでしょう。そして、いまだに韓国社会では、公人や芸能人などの人々が親日的な発言をする場合、社会的な話題になったり、批判を受けることが多いです。

〔元「慰安婦」の方の〕証言は何度か聞くチャンスがありました。実際に、韓国社会で「慰安婦」問題が大きな社会問題となったのは、1997年頃、カンボジアで慰安所に入れられた韓国人元「慰安婦」イ・ナムイ氏の話が公開された後からだと思います。当時、韓国社会は大きな衝撃と怒りに満ちました。そして、最近になってから、多くの媒体を通して「慰安婦」の証言に接する機会が増えた気がします。その中で一番記憶に残っているのは2011年につくられた『彼女の物語』というタイトルのアニメーションです⁵¹。実話に基づいた短い映像をみながら、私は悲しみに打たれました。多くの少女たちが、幼い頃に自分がどこに行くかも知らずに連れて行かれ、軍人に一日に何度も性暴力を受けたという事実は、いつ聞いても悲しく、怒りを感じさせます。そして、それを否認する日本政府の態度は、日韓関係の未来をより暗くすると思います。

ところが、個人的には、「慰安婦」問題がきっかけで、私は日本に対して怒りとともに関心を持つようになりました。私が一生懸命日本語の勉強をした理由でした。「知彼知己、百戦不殆」という言葉があります。私は日本について知りたかったので、高校時代から日本語を勉強しました。そのおかげで大学時代に交換留学生として1年間日本で生活することができました。そして、日本人の友達と交流しながら日韓の間にある大きなギャップも感じることもできました。

「慰安婦」について日本人の友達と初めて話してみたのも、交換留学生として福岡にいる時

⁵¹ 『彼女の物語』：キム・ジュンギ監督, 2011.

でした。私は友達と色々な話をしながら道を歩いている際に、自然にその話題について聞いてみました。「日本で『慰安婦』問題について聞いたことある？ 植民地時代の歴史について学んだ？」すると友達は次のように答えてくれました。「ううん、あんまり知らない。日本ではほとんど勉強しないから」その答えは短かったのですが、私に新鮮な衝撃を与えてくれました。私はもうちょっと詳しく話してみたかったのですが、友達は他の話に移りたいようにみえました。結局、話題は変わりましたが、私はその時初めてわかりました。日本の高校生は韓国の植民地支配についてあまり学んでいないという重要な発見をしたのです。

そして、私は大学院への進学のため来日しました。「慰安婦」や靖国神社の参拝はしばしば日韓関係の主な話題となり、それに関して大学の友達と話し合う機会が何度もありました。その中で記憶に残っている見方は、「私たちの世代が行なったわけでもないのに非難されるのは不当である」というものでした。「なぜわれわれが謝罪しなければならないのか。そして、当時、多くの国が植民地支配を行ったし、日本だけが悪いことをしたわけではないのに、なぜ韓国の人々は引き続き日本に対して謝罪を求めるのか」それがあまりよろしくないということでした。

韓国は日本から植民地支配を受け、いまだ解決されていない様々な問題があるため、私たちの目線は日本に向いています。しかし、日本人の視線は韓国よりはアジア全体、そして当時植民地支配を行なった欧米の多くの国々に向いているように感じられました。私は時代的な状況があるからとか他の国も行なったからということで、反人倫的な行為を正当化することはできないと思います。しかも、日本は広島に落とされた原爆による「被害者」認識まで持っています。そもそもなぜ、広島に原子爆弾が投下されたかということからは目を背け、原爆による被害に語りをも特化している姿は私にとって不思議に思われます。

そして、ある日、私は大学の研究員であった日本の方と食事をしたことがありました。当時、橋本市長の慰安婦に対する発言が大きな話題となり、それについて話し合うようになりました。そこで、私は彼の意見を聞いてとても戸惑いました。彼は「日本政府が『慰安婦』として女性を強制的に働かせたという証拠はない。根拠や証拠はありますか？もしあるなら教えてください。もし政府が力づくで少女たちを誘拐したのなら、家族はなぜ自分の娘を救おうとはしなかったのか？それに、日本はすでに賠償金を支払った。もし、『慰安婦』たちが謝罪を求めているなら、どうして賠償とお金を要求するのか？いくつかの証言は真実ではない」と言いました。彼は「慰安婦」を娼婦とみなし、生活のためにすすんで戦場に行った人たちだと考えているようでした。さらに彼は「朝鮮は当時弱かった。あまり力を持っていなかった。日本が植民地化しなくても、強大なロシアが同じことをしただろう」とも言いました。彼のようなことを言う人に出会うのは初めてでした。彼は性奴隷制度の事実を本当に否定していませんでした。真実ではないと彼は考えていました。「感情的に反応するな」とも彼は言いました。私の反応が感情的だと思ったのです。彼は「ロジカル」に議論をしたかったようでした。

結局、彼の意見は、植民地支配であれ「慰安婦」であれ、当時の状況をみるいろんな視点や事例があるので、「一部」をみて間違ったと判断することは難しいというものでした。私は始終一貫した話をしたけれど、結局それも多くの話の一つになってしまい、だからそれを認めることはできないと彼は言います。正直、私は韓国人としての立場だけではなく、日本に来て日本人の立場も理解したいと思いましたが、その時、私はまだ日本人の立場を理解する準備ができていないことに気づきました。「慰安婦」の話でなぜ売春の話がでるのか、到底納得がいかなかったです。私にはむしろ、彼の主張こそがごく「一部」の話だと思われまます。「慰安婦」は日本政府が大々的にそして戦略的に推進した政策であり、重大な犯罪でもあります。それを回避したい気持ちがいろんな言い訳を作り出しているのではないか。それが本当に「ロジカル」なのか私は疑問を感じます。物事に対する様々な見方がありますが、そこにも是非をわきまえる基準というものがあるのです。

私は日韓関係において韓国人だけの視点ではなく、日本人の考えも知らなければならないと思っていました。そして、どうすれば「慰安婦」のような問題を解決し、発展的な関係を構築することができるのか悩んでいました。しかし、日本と韓国の間にある認識の隔たりを知れば知るほどそれが本当にできるかという懐疑を持つことがあります。それゆえに、今韓国社会では日本との関係だけではなく、国際社会に向けて訴えようとする動きが増えているのではないかとも思います。私は次の世代のために政治および非政治的な分野における持続的な努力を通して、この問題が早く解決できることを願っています。これを次の世代には引き継ぎたくありません。私たちの世代で解決できなければ、もっと難しくなるでしょう。そのために、私にできることがあれば最善を尽くしたいと思います。

(2014年11月 日吉)

第3部

日誌

2012年

12月26日

午前9時から12時、資料集め。

12月27日

午前9時から12時、資料集め。

12月29日

午前9時から12時、資料集め、整理。

夕方、新宿で打ち合わせ。

12月31日

午前9時から12時、資料集め、整理。

2013年

1月5日

忘備録（2010年12月8日）より。プロジェクトの出発点として、つねに立ち返るべきものを含んでいるように思う。

証言に臨場する体験。予想をはるかに凌駕する衝撃をもたらす。根源的なざわつき、存在を揺るがす危うさ。眠りに嫌われたまま、横になっていると、あの大量のフラッシュライトが臉に浮かぶ。受けとってしまった証言が肉を食い破り、肉体の組成を組み替えようとしているような奇妙な体感。共感でも感情移入でもない何か。出来事について語ること。語りへの衝迫。語ろうとする意志を挫くものとの葛藤。語る行為が証言者に刻印するスティグマ。記憶の内部沈積。嚥下できず、喉元に異物として留まりつづけるもの。つねにその所在を指先でたしかめずにはいられないものとしての記憶。

1月6日

午前9時から12時、資料集め、整理。

午後3時から8時、同上。

1月7日

吉見義明『従軍慰安婦』より引用：

しかし、その証言は、記憶ちがいや、事実をかくしている場合をのぞけば、大変重要である。文字の世界に生きていないだけに、逆に、強烈な体験はそのときどきの鮮烈な記憶となっており、くりかえし聞くことによって当事者でなくては語り得ない事実関係が浮かびあがってくるからである。軍や政府の文書・記録や統計には決して出てこない生なましい現実
は、彼女たちの証言からしかわからないのだ。(87)

1月8日

岡真理『記憶／物語』より引用：

〈出来事〉の〈真実〉を証す証言に触れたなら、その〈真実〉を、〈出来事〉を否定する歴史修正主義者たちの眼前に突きつけて、お前たちはこれでも抗弁するのかと、言ってみよう。だが、このとき、自らの傷ついたからだを切り裂いて、その内部をえぐり出すような証言であるからこそ、そこに〈出来事〉の〈真実〉が証されているのだとするなら、それは何と、グロテスクなことだろう。厚顔無恥な否定論者たちが、それでも、〈出来事〉を否定したなら、——おそらく、彼らはそうするだろう——私たちは、なおも、彼女たちに、その身をもっともっと深くえぐり、当事者しか知り得ない苦痛を証言せよと要求するのだろうか。だが、いったいどれだけその身を切り裂き、どれだけ深くその肉をえぐり出せば、そして、いったいどれだけ苦痛に身をよじって証言すれば、〈真実〉を語ったことになるのだろうか？

〔略〕

戦後の日本社会における〈出来事〉の歴史的忘却、そして、これら歴史修正主義者たちの〈出来事〉を否定する言説に対する日本人の非力さが、いま、彼女たちに、まさに身を切るような証言を強いているのだということも忘れてはならない。そうである以上、私たちもまた、彼女たちがいま〔傍点：いま〕、被っているその暴力に対してまぎれもない責任を負っている。その拷問に加担していると言いかえてもよい。このとき、それによって得られた証言をもって、歴史修正学者を否定しようとすることは、自分自身の非力さ、自分が彼女たちの拷問に加担しているという事実を見ないですますこと、その非力さを無意識に否認する身ぶりであるのではないか。(31-2)

母と祖母の茶飲み話。それは明確に、国家による戦争が悪であったことを語っていたが、しかし、その戦争で不条理な死を被った者たち、戦争という〈出来事〉の暴力を現在の物語として生きざるを得ない他者の存在を想起する契機を欠落させ、自らの被害だけを記憶し、想

起している点において、戦後のこの社会のナショナルな経験それ自体を反復しており、他者の否認というナショナルな欲望、そしてナショナリズムそれ自体を分有しているのである。

(74)

〈出来事〉を体験し、その〈出来事〉の内部にいたがゆえに、〈出来事〉の暴力を現在なお生き続けているがゆえに、それについて語り得ない者たちがいる。あるいは、虐殺という

〈出来事〉のように、その暴力をその身に十全に体験した者、すなわち死者は、死者であるがゆえにもはや、自らが被ったその暴力、その〈出来事〉について証言することはできない。だからこそ、他者が語らねばならないのではないか。他者が——〈出来事〉の外部にあった第三者が——証言しなくてはならないのではないか。だが、それは、語り得ない者たちに代わって、その〈出来事〉をいかようにも表象してよい、ということでは断じて、ない。言葉では語り得ないはずのその〈出来事〉について語ろうとする私たちが、「語りうる者」として振る舞うとしたら、その瞬間に私たちは〈出来事〉を裏切ることになるだろう。表象不可能な〈出来事〉を表象すること、語り得ない〈出来事〉について語ること、それは何よりもまず、〈出来事〉のその語り得なさこそを証言するものでなくてはならないのではないか。

(77)

1月9日

午後1時から5時、取材準備。

夕方、新宿で打ち合わせ。

1月11日

午前9時から12時、取材準備。

証言集会における通訳の存在。通訳の介在による意味の遅延。とりわけ、証言者の話す言語を理解しない者にとっては、証言者の声や表情、身振りを受け取る瞬間と、つねに遅延して伝えられる意味内容を脳で把握するプロセスの分離は、証言に対する情動的反応を強める効果をもたらす。通訳を介さず、じかに証言を受け取ることができたらという衝動。誰の証言？どの言語？

1月12日

午後1時から3時、インタビュー取材。

午後8時から10時、テキスト作成。

1月14日

午後9時から12時、テキスト作成。

午後3時から5時、同上。

1月15日

伊藤孝司 編著『写真記録 破られた沈黙—アジアの「従軍慰安婦」たち』より：

証言者のひとりが「通訳の韓国人青年が困惑するほど激しい口調」で日本への怒りを語ったという挿話(15)。証言者／通訳者／証言を聞く者。通訳者はそのときどんな時間を生きたのか……。

1月19日

午前9時から12時、資料集め、整理。

午後3時から5時、同上。

1月20日

午前9時から12時、資料集め、整理。

1月26日

午前9時から12時、資料集め、整理。

1月30日

ヴィーナ・ダス「言語と身体---痛みの表現におけるそれぞれの働き」を読む。インド・パキスタン分離独立時の暴力のあと、女性たちは〈出来事〉をどのように受けとめ、どのように語ったのか。以下、引用：

女性たちにインド分割時の経験について話すよう頼むと、出来事の周囲に沈黙の領域があることに気づいた。一般的で比喩的ではあるが、みずからの経験の個別性が把握されないよう具体的描写を避けた言語を用いることにより、あるいは、周辺的事柄について述べ、実際の誘拐やレイプの経験については語らないことにより、この沈黙は守られた。血の川が幾筋も流れたとか、大地は見渡すかぎり白い経帷子で覆われたというような言葉ももちいて、女性たちが分割時の暴力について語るがよくあった。時として、女性が逃げたときのことを覚えている場合もあったが、一人の女性が私に警告したように、思いだすのは危険なことだ

った。それらの記憶は、固体を溶解する強力な流動体のように、女性の内部を溶かしてしまう毒液に警えられることもあった(*andar hi andar ghul ja rahi hai*)。

〔略〕

この沈黙のコードが、軍当局の尽力によって誘拐者の家から取り戻され、家族のもとに帰された女性たちや、身体に暴行を受けたことが公にならなかったため、血縁関係や姻戚関係の水準をおし広げることにより結婚した女性たちを守った。彼女たちはみずから体験した騒乱の証人となるよりも、毒をあおって、それを内に秘めておく女性の隠喩（ルビ：メタファー）をもちいた〔後略〕。（84-85, 私訳）

2月4日

午前9時から12時、資料集め、整理。

2月5日

午前9時から12時、資料集め、整理。

2月17日

アーサー・W・フランク『傷ついた物語の語り手』より引用：

聴くことは困難な作業である。しかしそれはまた基本的な道徳的行為でもあるのだ。脱近代社会における最善の可能性を実現するためには、聴くことの倫理学が要求される。他者の声を聴くことによって私たちは自らの声を聴くのだということを、私は示したいと思う。物語の証人となる瞬間に、互いが互いを必要とする関係が結晶化する。その時、それぞれの人間は、他者のために（傍点：ために）あるのだ。（47）

物語は、傷口の縁をなぞり、ただその周囲を語ってまわることしかできない。言葉は痛みの生々しさをほのめかすものの、傷はまさに身体そのものとしてあり、その屈辱と不安と喪失感を言葉は決してとらえることができない。（140）

2月20日

ある出来事の記憶。その意味を受けとり損ねたままにしている出来事。本人の意志とは無関係に、個人が偶然手にしてしまう歴史の断片。

2月25日

午後9時から12時、取材準備。

2月26日

午後9時から12時、取材準備。

2月27日

朝鮮語講座に登録。

2月28日

午後1時から、インタビュー取材。

午後4時半、同上。

3月1日

池田恵理子「戦争の『記憶』と『記録』」より引用：

性暴力の被害者からその体験を聞くという行為は、語る人にとっても、聞く者にとっても相当な勇気と心の準備が必要で、お互いの信頼関係や強い必然性なしには成り立たない。ただ証言を聞くと言っても、どのように質問を切り出したらいいのか悩む。やっぱり「事件」の頃、その人がどんな風に暮らしていて、どんな少女だったのかを知りたい。その日常がどう引きちぎられたのか、そこへ誰がやってきたのか。でも詳しい状況を話し始めたら生々しい恐怖や苦しさを再現することになって、その人の苦痛を倍加させやしないか。その人が急に沈黙してしまった時、静かに次の言葉を待てるだろうか。

辛すぎる経験を聴く資格や権利が、私にはあるのだろうか、と自問自答する。その人から信用を得られるだろうか。話を聞いているうちに、私の方が辛くてたまらなくなったらどうしよう。聞き終わった後、果たして彼女が望むような援助や行動が私にできるだろうか…。これらの不安にグラグラ揺れるのだ。

ビデオ塾のメンバーの大半は、戦争責任も戦後責任もとらないで、アジア各国の被害者たちから告発を受けている加害国・日本に生まれた人間である。カメラを回しながら、女性たちの悲しみや憤怒を前にして、罪責感や無力感にさいなまれることになる。(49)

3月2日

午後1時から5時、テキスト作成。

取材内容を文字に起こしてテキスト化していく作業の不思議。テープを何度も巻き戻しては聞き直す過程で、話し手の呼吸や身体感覚をなぞる。他者の言葉が私の身体を流れる感覚。

3月16日

午前9時から12時、テキスト作成。

午後3時から5時、同上。

3月30日

午前9時から12時、テキスト作成。

4月3日

午前9時から12時、資料集め、整理。

午後2時から5時、同上。

4月16日

2009年にオーストラリア国営放送 ABC のトーク番組にジャン・ラフ＝オハーン氏が出演した映像を YouTube で見つけた。ラフ＝オハーン氏はインドネシアで「慰安婦」となったオランダ人女性。現在はオーストラリア国籍を取得し、アデレード在住。英語で証言し、手記を執筆しているので、私にとっては、通訳を介さずに証言を理解できる貴重な経験。もちろん、母語で語るのと英語で語るのでは大きな相違があるのだろうけれど。

4月17日

午後1時から5時、取材準備。

5月8日

午後1時から5時、資料集め、整理。

5月9日

午後1時から5時、資料集め、整理。

夕方、打ち合わせ。

5月11日

午前9時から12時、取材準備。

5月13日

午後4時、インタビュー取材。

取材者という立場へのとまどい。問いを投げかけてばかりいることへの罪悪感。自分のことも話しつつゆっくり応答したいのだが、相手の言葉を引き出すことの方に、より多くの時間を費やさなければならない。結果、いくつもの言葉を語らずにのみ込むことになり、持ち帰ったこれらの言葉でこのノートを埋めてしまいたい衝動にかられる。

夜、橋下徹大阪市長が、「慰安婦は必要だった」「どこの国にもあった」と発言したことを知る。啞然。

5月14日

橋下徹大阪市長の発言内容（『SYNODOS』より）：

認めるところは認めて、やっぱり違うところは違う。世界の当時の状況はどうだったのかという、近現代史をもうちょっと勉強して、慰安婦っていうことをバーンと聞くとね、とんでもない悪いことをやっていたとおもうかもしれないけど、当時の歴史をちょっと調べてみたらね、日本国軍だけじゃなくて、いろんな軍で慰安婦制度ってのを活用してたわけなんです。

そりゃそうですよ、あれだけ銃弾が雨嵐のごとく飛び交う中で、命かけてそこを走っていくときに、そりゃ精神的に高ぶっている集団、やっぱりどこかで休息じゃないけども、そういうことをさせてあげようと思ったら、慰安婦制度っていうのは必要だということは誰だってわかるわけです。そこで、日本国が欧米諸国でどういう風に見られているかということ、これはやっぱりね、韓国とかいろいろなところの宣伝効果があって、レイプ国家だって見られてしまっているところ。ここが一番問題だからそこはやっぱり違うんだったら違うと。

5月18日

午前9時から12時、テキスト作成。

5月19日

午前9時から12時、テキスト作成。

午後5時から7時、同上。

5月22日

予定されていたインタビューが延期になる。橋下発言の余波。代わりに「橋下発言に抗議する緊急院内集会」に参加。会場の怒りのボルテージ。

6月5日

午後1時から5時、インタビュー取材。

6月1日

午前9時から12時、テキスト作成。

6月7日

午後1時から3時、テキスト作成。

夕方、新宿で打ち合わせ。

6月8日

午前9時から12時、テキスト作成。

6月9日

午前9時から12時、資料集め、整理。

6月10日

今月中に読む本。

ジャック・デリダ『アーカイヴの病』

マルグリット・デュラス『戦争』

6月11日

今月中に読む本。

李 静和『つぶやきの政治思想』

マリアン・ハーシュ『ポストメモリーの世代』

アネット・クーン『ファミリー・シークレット』

6月15日

午前9時から12時、資料集め、整理。

6月23日

午後2時から6時、資料集め、整理。

6月24日

アネット・クーン『ファミリー・シークレット』より引用：

過去、私たちの過去について語ることは、自己形成の過程において、重要な機会である。記憶が素材を供給する程度に応じて、そのようなアイデンティティの語り（ルビ：ナラティヴ）は、実際に語られる内容と同等に、語りから脱落するもの——忘却したか抑圧されているか——によっても形づくられる。秘密は記憶をめぐる物語につきまとい、形と模様を与える。
(Kuhn 2)

過去は永遠に失われた。そこに戻ることはできないし、今になってそれを昔のままに取り戻すこともできない。しかし、だからといって、私たちがそれを失ったということではない。過去とは犯行現場のようなものだ。行動そのものは回復できないとしても、痕跡はまだ残っている可能性がある。その痕跡から、過去の気配を指し示す印、この場所で生じた何事か、出来事のイメージとはいかないまでも、それを（再）構築したものをつなぎあわせることはできる。記憶の働きは——例えば、探偵の仕事や考古学のように——過去にさかのぼって作業することを必要とする調査方法と共通点が多い。——手がかりを探し、兆しや痕跡を解説し、推論を立て、証拠の断片をつなぎあわせて、そこから出来事を復元する。(同上4, 私訳)

6月29日

午後1時、友だちと「女たちの戦争と平和資料館」（wam）の展示を見に行く。

来館者が多かった。橋下発言の影響。天皇崇拝者だという青年が展示内容に異論を唱えていた。

6月30日

他者にとっての出来事の経験を理解するためには、学びが必要であるような歴史的出来事。その記憶。手がかりはすでに手わたされてある歴史の断片に存する。それらがどんな歴史の全体

を構成するものなのか。それに到達できるまでの気の遠くなるような時間。このプロジェクトを動機づけるもの。

7月1日

午前9時から12時、資料集め、整理。

午後4時、打ち合わせ。

7月5日

午後1時から5時、資料集め、整理。

7月22日

「慰安婦」像が造られたアメリカ合衆国の町に、子どもの頃、暮らしていたという人の話。「もし今もそこに暮らしていたとしたら、同じ共同体の一員として、そのニュースをどのように受けとっただろう」とその人は自問し、「自分の犯した罪ではないけれど、日本人として罪悪感をもったかもしれない」と語った。ある人にとって特別な意味をもつ場所や過去の歳月、郷愁と追慕の対象となる極私的な時間や空間が、大文字の歴史と結びつく瞬間。自分が偶然手にしている歴史の断片。それを見極めること。

7月30日

午後3時から5時、取材準備。

7月31日

午後1時、インタビュー取材。

8月1日

午前9時から12時、テキスト作成。

8月2日

午前9時から12時、テキスト作成。

8月3日

インタビューとは、相手の感情や苦悩に、一時的であれ、寄り添うことであるのかもしれない。胸のうちにずしりとくるものが残った。何かを受けとったという感覚。

8月4日

午前9時から12時、テキスト作成。

8月5日

午前9時から12時、資料集め、整理。

8月7日

取材内容を文字に書き起こし、構成する作業の暴力性が露呈。話者と私の解釈のずれを解消する方向で調整できればよいと思うが……。

8月10日

この間の件で、まだ落ち込んでいる。桜井厚『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』を勧められて読みはじめた。インタビューをするときの基本中の基本について。今の私に必要な本。

8月11日

国際シンポジウム「戦時性暴力被害者から変革の主体へ」に参加。エステリータ・ディ氏（フィリピン）が証言者として登壇。

8月13日

明日は金学順氏が韓国の被害者として初めて名のり出た日。そして、わたしの誕生日。プロジェクトを構想する前から、この一致をひそかに気にかけてきた。

8月14日

元「慰安婦」として、金学順氏が初めて名のり出た22年前の今日。私は12歳で、オーストラリアに住んでいた。8月は南半球の冬。元「慰安婦」の女性が韓国で名のり出たことについて、私は知らなかった。戦争記憶には関心があったが、第二次世界戦争のことで当時知っていたの

は、原爆、沖縄戦、東京大空襲のことだけだった。日本の植民地支配のことも、ダーウィン空襲のことも、日本軍による捕虜虐待のことも、「慰安婦」となるよう強要された女性たちのことも知らなかった。

午後6時、新宿でデモに参加。歴史修正主義者や排外主義者が沿道に立ち、罵詈雑言を浴びせかける。胃袋の底に鉛のように重たくへばりつく感触。夏休みの歌舞伎町で、興奮している彼らの存在と主張は浮いていたけれど、街ゆく人びとの表情には、「厄介事」には関わりたくないという能面のような表情が貼りついていて。物珍しい光景に出くわしたといった感じで、携帯電話で写真を撮る人たちもいた。彼らにとっては、「慰安婦」問題の解決を訴える人たちも、右派の野次馬も同じように映っているのだろう。

8月15日

午前10時、地下鉄九段下駅で降りて、昔の通学路を歩く。迷ったが、やはりこの眼で確かめておきたかった。私の通った高校は、政治家の参拝をめぐって話題になる神社の近くにある。通学中、徒歩で参拝に向かう議員の姿を幾度か目にしたことがある。終戦記念日のことは報道などで知っていたが、いざ自分の眼でみるとなると狼狽した。想像していたより若い人が多いようだった。遠目に眺めるのが精一杯で、かつての通学路に足を踏み入れる気にはなれなかった。

8月17日

1991年8月の新聞記事を集めている。14日の出来事はどんなふうにも報道されたのか。

8月18日

図書館でみつけた新聞記事を転写してみる。韓国の新聞記事も探して、日本語訳を併置することができたらよいのだけれど、今のわたしにはそこまでの語学力はない。

「慰安婦の痛み、切々と――韓国で聞き取り」『朝日新聞』（1991年8月12日）より引用：

【ソウル10日＝植村隆】

日中戦争や第二次大戦の際、戦場に連行され、日本軍人相手に売春行為を強いられた「朝鮮人従軍慰安婦」のうち、一人がソウル市内に生存していることがわかり、「韓国挺身隊問題対策協議会」（尹貞玉・共同代表、十六団体約三十万人）が聞き取り作業を始めた。同協議会は十日、女性の話を録音したテープを朝日新聞記者に公開した。体験をひた隠しにしてきた彼女らの重い口が、やっと開き始めた。

尹代表らによると、この女性は六十八歳で、ソウル市内に一人で住んでいる。

女性の話によると、中国東北部で生まれ、十七歳の時、二、三百人の部隊がいる中国南部の慰安所に連れて行かれた。慰安所は民家を使っていた。五人の朝鮮人女性がおり、一人に一室が与えられた。女性は「春子」（仮名）と日本名を付けられ、毎日三、四人の相手をさせられた、という。

「監禁されて、逃げ出したいという思いしかなかった。相手が来ないように思い続けた」という。数ヶ月後に逃げることができ、戦後ソウルに落ち着いた。結婚したが夫や子供も亡くなり、現在は生活保護を受けて、暮らしている。

「『日本政府は責任を』——韓国の元従軍慰安婦が名乗り」『北海道新聞』（1991年8月15日）より引用：

わけ分からぬまま徴用
死ぬほどの毎日
賠償請求も

【ソウル14日喜多記者】戦前、女子挺身隊（てい）の美名のもとに従軍慰安婦として戦地で日本軍将兵たちに凌（りょう）辱されたソウルに住む韓国人女性が十四日、韓国挺身隊問題対策協議会（本部・ソウル市中区、尹貞玉・共同代表）に名乗り出、北海道新聞の単独インタビューに応じた。儒教思想の強い韓国社会で元従軍慰安婦が自ら過去を語るのは戦後これが初めて。この女性は「女子挺身隊問題に日本が国として責任を取ろうとしないので恥ずかしさを忍んで…」とし、日本政府を相手に損害賠償訴訟も辞さない決意を明らかにした。今日、第四十六回終戦記念日。「天皇の軍隊」にじゅうりんされたアジアの友人にとってまだまだ戦争は終わらない。

この女性はソウル市鍾路区忠信洞、金学順さん（六七）＝中国吉林省生まれ＝。

学順さんの説明によると、十六歳だった一九四〇年、中国中部の鉄壁鎮というところにあった日本軍部隊の慰安所に他の韓国人女性三人と一緒に強制的に収容された。

「養父と、もう一人の養女と三人が部隊に呼ばれ、土下座して許しを請う父だけが追い返され、何がなんだか分からないまま慰安婦の生活が始まった」（学順さん）

一日平均、三人から四人の割合で兵士の相手をさせられたといういまわしい生活に耐えられず、行商に来た韓国人男性の助けで三ヶ月後に慰安所を脱出、この男性と結婚してしばらく中国で暮らした後、四五年、ソウルに帰国した。

韓国挺身隊問題対策協の尹・共同代表（元梨花女子大教授）によると戦前、強制連行などによって従軍慰安婦として韓国から旧満州（中国東北地方）や南方戦線に駆り出された女性の正確な数は分かっておらず、同対策協は十万-二十万人と推定している。生存者の大半が韓国内外に相当いるとみているが、故郷を捨てて、日本とタイに住む二人を除いて韓国内で名乗り出た人はこれまで一人もいない。

学順さんは「夫も、二人の子供もすでに亡くなり、天涯孤独の身なので、恥ずかしくとも死ぬ前にぜひ話しておかねばならないと思ったが、『日本』や『日の丸』という言葉聞くだけで今も胸がつぶれる」と苦しい胸の内を訴えた。

同対策協、韓国女性団体連合会など韓国側団体は昨年十月、日本政府の公式謝罪などを求める海部首相への公開書簡を出したが、これまで日本大使館を通じ「実態を調査中」という中間説明があっただけ。

学順さんが損害賠償訴訟に踏み切った場合、全面支援の構えをみせる同対策協は「学順さんの勇気ある出現で、第二、第三の証言者が現れるはず。日韓が正しい歴史認識を持てるようになるまで運動を盛り上げたい」（尹・共同代表）と言っている。

8月19日

「オーストラリア人、『慰安婦』としての苦難を語る――女性たち、戦時中の性奴隷について聴取で語る」『キャンベラ・タイムス』（1992年12月11日、AP通信）より引用：

東京：あるオーストラリア人女性が、水曜日の公聴会で、第二次大戦中に日本軍の性奴隷だったときの状況を語り、涙を流した。

ジャンヌ・オハーン（69）は、シドニーにいる娘を訪問すると、時折、痛ましい記憶がよみがえると語った。「娘と一緒に、幼い孫娘を乳母車にのせて散歩につれていくたび、バスいっぱいに乗った日本人観光客がボンダイビーチで下車して、中年の男性が降りてくると、そのうちの一人が私をレイプしたかもしれないと思います。

「私たちは奴隷状態におかれ、売春を強要されました」とオハーン氏は語った。第二次世界大戦中は、彼女はオランダ国民だった。「沈黙を破って話せるようになるまでに、50年ほどもかかったのです。」

〔略〕

オハーン氏は、売春を強要されたアジアの女性たちによる報告を読んだあと、自分も証言することを決意したと語った。

「私たちはみな、50年間沈黙を守ってきました。そのことが私たちを結びつけています。50年近くの沈黙が。今、突然、私たちは声を上げることを決意しました。この沈黙は私たちに押しつけられたものです。私たちは日本人に言われました…… 売春宿がなくなったとき、彼らは私たちに言いました。もし日本人がやったことを誰かに話したら、私たちは殺される、と。」（私訳）

8月20日

懐かしい土地の名前。ずいぶん長い間、思い出すこともなかった固有名詞。「ボンダイ」とはオーストラリア先住民の言葉で「岩にくだける波の音」をあらわすと言われている。オーストラリア風に発音してみる。そう、たしかに当時、シドニーには日本からの観光客が押し寄せていた。ボンダイビーチだけでなく、ありとあらゆる場所に。

8月22日

ラフ＝オハーン氏は著書『沈黙の五十年』のなかでも、ボンダイビーチの挿話を記している。以下、引用:

私たちが乳母車をおしながら遊歩道を歩いていると、例のごとく、バスいっぱいの年配の日本人観光客が下車してきた。彼らは高価なカメラやビデオを身につけていた。彼らを見ているうちに、私はその男性たちの多くが戦争中に兵士となった世代だということに気づいた。

そのうちの一人が私に近づき、ルビーを抱いて写真を撮りたいと身振り以示した。私は彼女をつかまえて逃げなければという衝動に駆られたが、そうせずに、礼儀正しくにっこりし、その男性に親切に振る舞っていた。キャロルは何かがおかしいと気づいた。

「ママ、どうかした？」

私はにっこりして、首を振った。ここでもまた真実を打ち明けるチャンスを失ってしまった。(O'Herne 135, 私訳)。

8月23日

金学順氏の記者会見のニュースが報じられたとき、私はどこで何をしていたのだろうか。どのようにその情報を受けとり損ねたのか。

ハイマーケットをさらに南に下ったアルティモという場所にあった父のオフィス。『シドニー・モーニング・ヘラルド』紙と『オーストラリアン・ファイナンシャル・レビュー』紙を発行するフェアファックス・メディア社が所有していた建物内にあり、たしか一階には、印刷所があった。休日出勤する父に同行して、日本語の本を読んだり、人の気配のない週末のビル内を妹と探検したりした。1991年当時、その建物にオフィスをかまえていた世界各国の報道関係者のなかに、元「慰安婦」として初めて名のり出た韓国人女性の問題を気にとめた者が何人いただろう。父のオフィスには、日本語の新聞数紙が、東京からわずか半日遅れで毎日届けられることになっていた。主要な日刊紙には一通り目をとおす習慣のあった父だが、自動受信装置から流れてくるオセアニア関連のニュース速報のほうが重要だったせいもあり、記者会見の記事には気づかなかったという。日本語の新聞を自宅に持ち帰ってくることもあったので、リビングにあった新聞の束のなかにその記事があった可能性はある。

8月25日

ノーマン・アブジョレンセン「殺害された看護師たちは日本軍将校に強姦された可能性がある、と研究者が指摘」『キャンベラ・タイムス』（1993年9月22日）より引用：

第二次大戦中、バンカ島で日本軍に虐殺されたオーストラリア人従軍看護師21名の一団が、殺害前、兵士たちに強姦されたことはほぼ確実だが、その事実は彼女たちの評判を守るために隠匿された、と日本人研究者は指摘する。

看護師のシスター・ヴィヴィアン・ブルウィンケルは、その恐ろしい出来事を唯一生き延びたが、オーストラリア当局への報告では強姦に言及しなかった。

当時、この大量殺戮についての報告は、オーストラリアを動転させ、ショックを与え、怒らせた。

オーストラリア国立大学で開かれる日本をテーマにした国際学会で今日発表が予定されている論文において、現在メルボルン大学で教鞭をとるタナカ・ユリは、シスター・ブルウィンケルが「強姦被害者として知られる不名誉から、亡くなった仲間たちを守るために、調査では真相を語らなかつた」ことを示唆する証拠があると言う。〔後略〕

8月26日

「オーストラリア軍看護婦に対する慰安要求事件」（1945年9月）についての資料、軍看護婦「B」の証言を読む（吉見1992, 565-80）。「解題」によれば、これらの資料は、オーストラリアの戦争犯罪調査委員会が1945年9月に作成したものだという（同上598-99）。

8月27日

歴史学者・田中利幸氏は、戦地から帰還した父親と叔父たちが「慰安婦」問題について沈黙していたこと、1970年代初めまでこの問題について無知であったことに触れ、次のように問う：

慰安婦問題を含む、特定の話題について、私の父と叔父たちが沈黙していたという事実が、彼らが戦時中の生活について嘘をついたということの意味するのかどうかを判断するのは難しい。これは都合のよいことだけを記憶する事例であり、彼らは日本軍の慰安婦と性奴隷を完全に抑圧したのだろうか。あるいは、むしろ、戦争を批判する者でさえもが、敗戦のあと長い間、この問題と日本の植民地主義、戦争のその他の卑しむべき側面について率直に語るができなかつたのではないか？（Tanaka 3, 私訳）

9月8日

屋嘉比収『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす』より引用：

〈大きな物語〉に対して、家族史や個人史的な視点という〈小さな物語〉から考えてみるということ（v）。

自らの私的記憶という〈小さな物語〉から、沖縄戦や米軍占領下の事件という〈大きな物語〉へとつなげて、それらの記憶の断片を想起し重ねて考えるあり方……それは、客観的な事実

認識の継承とともに、前述したような戦後世代の非体験者記憶の断片をつなぎとめながら、「わたしだったらどうするか」という想像力を介した〈当事者性〉を拡張し獲得しようとする視点へとつながるものである。(xi)

10月13日

「慰安婦問題 拡大を阻止、政府 東南アで調査せず、92～93年公式見解と矛盾」『朝日新聞』(2013年10月13日)より引用：

旧日本軍の慰安婦問題が日韓間で政治問題になり始めた1992～93年、日本政府が他国への拡大を防ぐため、韓国で実施した聞き取り調査を東南アジアでは回避していたことが、朝日新聞が情報公開で入手した外交文書や政府関係者への取材で分かった。韓国以外でも調査を進めるといふ当時の公式見解と矛盾するものだ。

10月14日

正午、打ち合わせ。

午後8時から10時、資料集め、整理。

10月19日

朝鮮語学習についての覚書：

あなたの口元と、それが鳴らす音に意識を集中する。唇の形状、舌の位置、破裂音とともに放出される空気の量を音から想像し、自分の器官の状態をそれに近づける。抑揚とリズムを真似しつつ、自分の声にのせて何度も発音してみる。そうすると、言語にやどる「気分」が身体に浸透していくように感じる。同じ意味内容を伝達するのでも、音やリズムの特徴、言語を支える文化の相違により、わたしは異質な感情や思考回路を生きる。

10月26日

午前9時から12時、資料整理。

11月2日

午前9時から12時、資料整理。

11月9日

午前 9 時から 12 時、資料整理。

11 月 13 日

午後 1 時から 2 時、打ち合わせ。

11 月 30 日

久しぶりに再会した友人との会話より：

「従軍『慰安婦』という単語を初めてみたとき、その響きと字面にすごい違和感をおぼえた。『慰安』って具体的に何を指すのかわからなかった。でも、たぶん性的なことだなと直感した。それがどんな人を名指しているのかまったく想像力が働かない、働くのをあえて妨げようとするような物々しい名称が実態を曖昧化している……。」

12 月 14 日

午前 9 時から 12 時、資料整理。

12 月 21 日

午前 9 時から 12 時、資料整理。

12 月 26 日

首相、靖国参拝の報道。

2014 年

1 月 6 日

午後 6 時半、打ち合わせ。

1 月 11 日

プロジェクトの話をする、「『慰安婦』問題について無知だ」「たいした話はできない」と大抵の人が言う。でも「最初に『慰安婦』という言葉聞いたときのことを思い出せますか？」と質問すると、いろいろな反応が返ってくるものだ。

1月13日

大島渚のテレビ・ドキュメンタリー『忘れられた皇軍』（1963年8月放送）をみる。元日本軍在日韓国人傷痍軍人・軍属たちが日本政府に補償を求める活動取材した作品。鳩尾に鉛の塊をおし込まれる。

1月15日

午後1時から5時、資料集め。

1月19日

午後1時から5時、資料集め。

1月25日

ますます国際政治問題化しつつある「慰安婦」問題をめぐって、海外で生活する日本人の子どもたちへの影響を懸念する声があると聞く。大人たちは「いじめ」の有無について議論しているようだが、無意味な議論だと思う。子どもは大人の世界で起きていることを、何らかのかたちで察知するものだ。子どもにとって、「いじめ」を受けること以上に恐ろしいのは、自分が経験した出来事を理解するために必要な知識が与えられない状況である。危険に身をさらして掴みとった真理——他者が憤怒や暴力を振り向ける時、そこには相応の理由がある——に対して、自分の信頼する大人たちから合理的説明が得られないこと、それ以上に子どもを傷つけるものはない。大人の世界で起きている歴史の否認こそが、子どもたちの身を脆弱にしているという事実、親たちが無自覚であることの方が問題ではないか。

2月6日

午前9時から12時、取材準備。

2月7日

午後4時半、wamの台湾展を見学。

午後6時から8時、インタビュー取材。

2月9日

午前9時から12時、テキスト作成。

午後5時から8時、同上。

2月11日

午前9時から12時、テキスト作成。

午後5時、打ち合わせ。

2月12日

録音内容を文字にする作業。他者の言葉や考えを身体に通過させること。理解できない言葉、生理的に受けつけない言葉、消化できずに澱のように溜まっていく言葉もある。どんな言葉や認識であれ、一度、自分の身体のフィルターを通してみること。

2月13日

午前9時から12時、テキスト作成。

午後3時から6時、同上。

2月14日

午後1時から5時、資料集め。

2月15日

午後1時から5時、資料集め。

2月19日

71年前の今日、日本軍の戦闘機がオーストラリア北部ダーウィンを空襲した。2年弱のあいだに計64回の空襲被害があったという。日本ではほとんど知られていない戦争中の日豪関係。当時のわたしに少しでも知識があれば、あの日の記憶を現在まで引きずることはなかっただろう。わたしの家族がシドニーに暮らした1990年代初頭は、ダーウィン空襲の犠牲者たちが、戦時下で自己犠牲を払った英雄としてナショナル・ヒストリーに組み込まれた時期だった(鎌田91)。

2月22日

午後6時半、打ち合わせ。

2月25日

午後1時から3時、取材準備。

午後7時から9時、インタビュー取材。

3月1日

午前9時から12時、テキスト作成。

3月8日

自伝的素描。日本の植民地主義をめぐる他者の記憶との思いがけない出会い。シドニー郊外の老人ホームにて。その人はダーウィン空襲のことを言ったのだったか、日本軍捕虜のことを言ったのだったか……とにかく息子の死について語り、わたしが学校から持参した慰問の花束を受け取ることを拒絶した。直視する気になれず、その日の記憶を20年以上も封印してきた。

寝台がある。ブランケットで覆われた身体と幾筋もの皺を刻んだ横顔がみえる。きれいになでつけたグレイブロンドの短髪。かさねた枕のうえで首だけが動き、濁った魚の眼がギョロリと睨む。視線の先には、退色したローズ柄の壁紙に囲まれたがらんとした空間、その先にあるもう一つの小さな身体。褐色に日焼けした肌に、青緑色のチェック柄ワンピースを身につけている。俯き気味で、その表情はわからない。髪は黒色。鮮やかな色の花束を手に握りしめている。チェック柄の服地の裾からのぞく棒きれのような褐色の脚は、前にすすむことを躊躇しているようにみえる。老婆の険しい表情が向こう側に浮かぶ。二人だけの部屋。陰険な空間。その日、少女の手にだけ、いつまでも残っていた花束。

3月15日

午前9時から12時、資料整理。

3月18日

午前9時から12時、資料整理。

3月19日

午後7時、打ち合わせ。

4月7日

午後8時から10時、取材準備。

4月8日

午後8時から10時、取材準備。

4月9日

午後6時半、インタビュー取材。

4月10日

終日、翻訳作業。

4月12日

午前9時から12時、翻訳作業。

4月19日

午前9時から12時、取材準備。

4月26日

午前9時から12時、取材準備。

4月30日

午前11時、打ち合わせ。

5月10日

午後6時半、インタビュー取材。

5月11日

午前9時から12時、テキスト作成。

午後8時から10時、同上。

5月17日

午前9時から12時、テキスト作成。

5月22日

午後6時半、インタビュー取材。

5月23日

産経新聞が「講義で『日本の蛮行』訴える韓国映面上映」という記事を掲載（5月21日付）。大学教員が講義で「慰安婦」問題を取り上げ、関連映画を上映したことを問題視する内容。教員個人に対する誹謗中傷、大学への脅迫が後を絶たないという。

5月24日

午前9時から12時、テキスト作成。

午後1時から3時半、同上。

6月4日

午後2時から4時、インタビュー取材。

6月6日

午後1時から5時、テキスト作成。

6月7日

午前9時から12時、テキスト作成。

6月14日

午前9時から12時、テキスト作成。

6月21日

母語以外の言語で回答してもらうときには注意を要する。言いまちがい。言いよどみ。適切な語彙を探しているときの間。それを文書に反映させる困難。

7月5日

正午、インタビュー取材。

7月12日

午前9時から12時、テキスト作成。

7月13日

午後2時から6時、テキスト作成。

8月5日

『朝日新聞』が「慰安婦」問題をめぐる自社の初期報道を検討し、内容の誤りを一部修正する特集記事を掲載。それをうけて、『朝日新聞』の誤報が原因で、「慰安婦」問題が捏造されたという主張が横行。

8月7日

午前9時から12時、取材準備。

ハルコ・タヤ・クック、セオドア・F・クック『戦時中の日本：オーラル・ヒストリー』より引用：

実際、日本人の戦争経験について調査するなかで、私たちは戦争を自然災害と同じようなものにとらえ、それは彼らの身に「起こった」ことであるが、彼らによって「引き起こされた」ものでは決してないという感覚にもっとも頻繁に直面した。この感覚はインタビュー対象者の多くに共通してみられるものであった。(Cook 3, 私訳)。

8月8日

午前9時から12時、取材準備。

午後3時、インタビュー取材。

8月9日

午後3時から4時、テキスト作成。

8月11日

午前9時から12時、テキスト作成。

午後3時から6時、同上。

8月13日

午後4時、インタビュー取材。

友人との会話より：

「朝日新聞の特集記事を読んだ？『朝日新聞が嘘を書いたせいで諸外国からこんなに言われている。責任をとらなきゃいけない。国会に呼んで、喚問しなければいけない』って言う人たちは、記事を全部読んだのかしら？私は特集記事を読んで『なるほど、そういうことはあつただろうな』と思った。でも〔「慰安婦」がいたという〕事実は変わらない。記事全体を読むと、総体としての事実認識は何も変わらないわけ。でも、『朝日新聞のせいでそうなたんだから、国会に呼んで喚問しなきゃいけない』と公の場で言っている人たちは、記事を読んでないの？わざとそこだけ針小棒大に取り上げているのかな？それとも読解力がないの？だって政治家でしょう？普通全部読むよね。」

8月14日

午前9時から12時、テキスト作成。

午後5時から6時、同上。

8月15日

午後8時から10時、テキスト作成。

8月17日

午後4時から7時半、テキスト作成。

午後8時半、インタビュー取材。

8月18日

午後1時、打ち合わせ。

8月19日

午後1時から4時、テキスト作成。

8月20日

午前10時から12時、テキスト作成。

午後、映画『日本鬼子 日中15年戦争・元皇軍兵士の告白』をみる。

加害行為を証言する夫の様子を、台所の陰からそとかがう妻をとらえたショット。話の内容をあらかじめ聞いて知っていたのか、知らなかったのか。聞いていたから心配しているのか、聞いたことがないから知りたいと思っているのか。

8月23日

被害者と加害者の語りの相違について考えている。戦後社会における元兵士たちの加害証言の受容。誰かを傷つけたと証言すること。非人道的な軍隊組織のなかで生き延びなければならなかった彼らの恐怖。性をふくめ、あらゆる面で雁字絡めの統制下におかれていた兵士たち。兵士の人権？ 第二次世界大戦をめぐる記憶全体のなかに、彼らの証言をどのように位置づけ、それに耳を傾けることができるのか。

8月26日

午後2時から5時、テキスト作成。

8月27日

午前10時から午後1時、資料集め、整理。

8月28日

鈴木清順「戦争映画と女の顔」（『鈴木清順エッセイ・コレクション』収録）より引用：

戦争の体験談は親が子にするもので他人にすべきものでは本来ないような気がする。しかし親は余りに戦争体験を話したがるらしい。あれこれ親の体面を考えてのことだろうが、話したがる戦争体験者こそ本当に戦争の実相を知っている人たちなのだ。自分一人の経験にだけ実相をとじ込めてしまうことは敗戦の責任を回避するようなものだ。自分が戦争でした（見たではない）ことを、たとえそれが子供にとって驚愕的行為であっても恐れず伝えることだ（145）。

8月30日

西野瑠美子『元兵士たちの証言 従軍慰安婦』より：

元兵士の言葉「あれは仕方なかったというのは、戦争責任の転嫁であり、その考え方が戦争責任をあいまいにしてきたんでしょね」（176）。

8月31日

南アフリカの真実和解委員会にて。アパルトヘイト期南アフリカで、警察分署長という立場にあったジェフリー・ベンジエンの公聴会。ベンジエンのカウンセラーである心理学者リア・コッツェが召喚された。公聴会を取材した詩人クロッホはコッツェの公聴会での発言をうけて、次のように書く：

記憶を再構成すること、記憶を美化することは、ありふれた人間の特性だ、と心理学者は言った。大部分の人たちがそうする。しかし、記憶喪失にも三種類あるらしい。一つは、意識的なもの。脅威を感じる、あるいはその現実をかかえて生きるのに耐えられないという理由で、自分の記憶を変える。二つめは、無意識的なもの。何かが非常に強いトラウマになっているために、それが原因で、記憶に破れ目ができる。あなたはその出来事も、その前後に何が起きたかも思い出すことができない。しかし、さらに三つめの記憶喪失というものがある。人前で証言するときに起こるといふ。コッツェによれば、ベンジエンのストレスの程度は、証言しなければならぬこと、それが妻や子供とおくる余生にどのように影響するかという不安により上がっている。彼が普段よりうまく思い出せないということは大いにあり得る、という。嘘と記憶喪失をどのように見分けるのか？

(Krog 117, 私訳)

9月2日

午前9時から午後2時、第1部作成。

午後5時から11時、同上。

9月3日

午前9時から午後1時、第1部作成。

午後8時から午前0時、同上。

9月4日

午前9時から12時、第1部推敲。

9月5日

午前10時から午後2時、取材準備。

9月6日

午後2時、インタビュー取材。

9月8日

午後1時から3時、テキスト作成。

午後4時、インタビュー取材。

9月12日

午前10時から午後1時、テキスト作成。

9月14日

午前10時から午後1時半、テキスト作成。

午後3時、打ち合わせ。

友人との会話より：

「映画『日本鬼子』のなかで、中国での戦争犯罪を証言する人たちって、あまりにも飄々と淡々と抑揚もなく、本でも読んでいるような感じで話をする。最初は、それが『変なの』と思った。逆に、殺された側、被害にあった側だったらものすごく訴えるでしょ？それと同じようなことが〔加害者の証言でも〕起こりうると思った。でも、あとから考えてみたら、自分が加害者の立場だったということを語るときって、自分の経験として語るよりは、自分じ

やない誰かが〔やったこととして〕一回、〔自分からは〕引き離して語らないと永遠に語れないだろうなと思った。そう考えたら、あのおじいさんたちがすごく冷静だったのは、ある意味、人間的だったんだなと思った」。

9月15日

加害者と犠牲者の語りの相違について考えている。ルワンダ・ジェノサイドの取材をしたジャン・ハッツフェルドは、生存者と殺人者の話し方を比較して、次のように記す：

みずからの経験を語ることで、生存者たちの身に危険が及ぶのを目にするのは痛ましいことだった。生存者たちはためらうことなく記憶、不安、痛みに向きあった。禁断の場所を再訪し、悪夢をよみがえらせることを恐れなかった。以前には決して明らかにしなかった記憶と考えを語ることもしばしばで、自分や他の人が話した内容に驚いているようにみえた。生存者たちはささやくように話し、激怒にかられたり、厳しくなったり優しくなったりした。声のトーンは日によって変化した。語られる話の内容が途中で変わったとしても、あなたは心をこめて耳を傾けなければならなかった。

しかし、殺人者たちには、みずからの経験を語ることでその身を危うくするものは何一つなかった。時の経過にともなう通常の歪みのために、記憶は彼らを欺くことはあるかもしれないが、それは犠牲者たちが述べたトラウマや心理的遮断とは異なる。

いずれの殺人者も、それぞれのやり方で、語りの内容をコントロールする。例えば、エリーは自分の気持ちをできるだけ正確に表わそうと感動的な努力をみせたのに対し、イニャセは、最初に嘘で何気なく返答し、そのあとそれを注意深く精製した。彼らは皆、インタビューが進むにつれて、より誠実に話をするようになり、より率直であろうとする姿勢をみせた。それでも、警戒線は存在し、ほとんどの場合、彼らはそれを踏み越えるのを拒む。殺人者たちは単調な声で話し、それは私たちの不安を増大させるのだが、彼らの声にはそれだけではない何か、はっきりしない何かがあり、この人たちが見た目ほどには無関心ではないのだなと感じることができる。彼らの慎重さは、おそらく抜け目なさや当惑、あるいは奇妙な無感覚状態によるものだろう。それから、礼儀正しく振る舞おうという気持ちのためでもあるかもしれない。（Hatzfeld 143-44, 私訳）

9月16日

午後2時から5時半、テキスト作成、翻訳。

9月17日

午後1時から5時、韓国新聞記事の翻訳作業。

翻訳作業がなかなか進まない。語学力不足のせい……。内容が内容なので、朝鮮語を読み、辞書をひき、言葉のニュアンスや質感をひとつずつ確かめていると、内臓のあたりがだんだん重苦しくなってくる。それなのに、日本語になったテキストは随分のっぺりした印象で、原語の苛烈なニュアンスと格闘した痕跡を感じられない。

9月19日

午後4時から6時、韓国新聞記事の翻訳作業。

午後9時から11時、同上。

朝鮮語を日本語に翻訳するという作業が、英語を日本語にする作業とはまったく異質の経験であるという、ごく当たり前の事実が驚く。漢字に由来する単語が使われているときは、ひとまず漢字語に置き換えてみる。すると、淡白な日本語の文章の体温が上昇し、熱気をおびる。例えば、「暴露 (포로)」「惨状 (참상)」「憤怒 (분노)」といった言葉。

9月27日

午前8時半から9時半、インタビュー取材。

ジェフ・キングストン「朝日問題の誇張は日本ブランドを傷つける」『ジャパン・タイムズ』(2014年9月27日)より引用：

しかし、朝日新聞を中傷するこれらの人たちが、日本の過去について本当のことを言うことが国家のイメージを損ねると考えるのはなぜなのだろうか。とりわけ慰安婦制度にかんして言えば、戦時中の残虐行為について責任を認めることができない歴史否定論者や矮小化する者たちの方が日本の評判をはるかに傷つけている。問題なことに、慰安婦たちの粗末な待遇に加え、歴史を否定しつつけることが事態を悪化させ、国家の戦時中の過去を回復し、美化しようとする彼らの努力を阻んでいる。(私訳)

9月28日

午前10時から午後1時、テキスト作成。

9月30日

午前10時から11時、テキスト作成、
11時半から12時半、資料集め、整理。

10月1日

午後3時から5時、翻訳作業。

10月2日

午後8時半から9時半、資料集め、整理。

10月4日

午前10時から12時、資料集め、整理。

「『従軍慰安婦』誤報で海外発信の方策検討へ」NHK（2014年10月4日）より引用：

自民党は、いわゆる従軍慰安婦の問題を巡って、朝日新聞が一部の記事を取り消したことを踏まえ、日本の名誉を回復する必要があるとして、今後の海外に向けた情報発信の方策などについて検討を急ぐことにしています。

いわゆる従軍慰安婦の問題を巡って、朝日新聞はことし8月、自社のこれまでの報道を検証する特集記事を掲載し「慰安婦を強制連行した」とする日本人男性の証言に基づく記事について、「証言は虚偽だと判断した」として記事を取り消しました。

これを踏まえ、自民党は「虚偽の男性証言を基に、国連の委員会が日本に対し、国家としての責任を認めて公式に謝罪するよう勧告するなどの影響が広がっており、日本の名誉回復に向け、党としても取り組む必要がある」として、党内に特命委員会を新たに設けることになりました。

これに関連して安倍総理大臣は、「国ぐるみで女性を性奴隷にしたとの、いわれなき中傷が世界で行われている。誤報によって、そういう状況が生み出された」と指摘しました。

特命委員会では今後、各国や国連などの国際機関、それに海外の報道機関に向けた情報発信の方策について検討するとともに、一連の男性証言に基づく報道が国際社会に与えた影響などを検証し、政府に働きかけていくことにしています。

10月19日

午前11時から午後1時、翻訳作業。

朝鮮語と日本語のあいだで考えることの難しさ。我が言語力の未熟……。以下、試訳。

「従軍慰安婦、惨状を知らせる」『ハンギョレ』（1991年8月15日）より引用：

従軍慰安婦、惨状を知らせる

国内居住者として初めて過去を暴露、キム・ハクスンさん

いつか明らかにしなければならない歴史的事実

いまでも日本国旗をみると憤怒が込み上げる

17歳という花のように美しい年齢にして、5ヶ月余りのあいだ、日本軍人の従軍慰安婦となったキム・ハクスン(67-ソウル市 鍾路区 忠信洞 1-写真) ハルモニが、14日午後、韓国女性団体連合の事務所で、当時の惨状を暴露する記者会見を開いた。日本帝国主義による強制占領下で、従軍慰安婦の生活を強要された韓国人のうち、解放後、国内に住み、自身の痛ましい過去を暴露する事例はキム・ハクスンさんが初めてだ。

「ずっと言いたくても、勇気がなくて、口を開くことができませんでした。いつかは明らかにならなければならない『歴史的事実』なので打ち明けることにしました。かえって気持ちがさっぱりしました。」

皺がふかく刻まれ、ハルモニになったキムさんは、50年前の思い出したくない過去で胸が痛むように、絶えず眼を潤ませながら話しはじめた。

「いまも『日の丸』をみると、くやしくて、胸がむかむかします。テレビや新聞で、この頃も、日本が従軍慰安婦を連れていった事実がないという話を聞いて、悲しくて胸がつぶれそうです。日本を相手に裁判でもしたい心境です。」

現在、一ヶ月に米10キロと3万ウォンを支給される生活保護対象者として、なんとか生活しているキムさんの人生は数奇だ。

1924年、満州吉林省で生まれたキムさんは、父親が生後百日で亡くなった後、生活が困難になった母親により、14歳のとき平壤の妓生学校に売られた。3年間の学校生活を終えたキムさんが初めて職に就くのだと思い、妓生学校の養父について行ったところは、中国北部鉄壁鎮の日本軍300人余りがいる小部隊の前だった。

「わたしを連れて行った養父も、当時、日本軍人からお金も受けとることができず、無力で、わたしをそのまま奪われたようでした。その後5ヶ月間、ほとんど毎日4-5人の日本軍人たちを相手にすることが生活のすべてでした。」

キムさんがいたところは、小部隊の前につくられた仮設の建物で、10代の韓国女性5名が一緒にいた。米とおかずは部隊で提供され、24時間監視された状態で過ごした。何度も脱出を試みたキムさんは、そのたびに日本軍人たちに見つけられて、殴られたりしたと打ち明けた。

当時、韓国と中国を行き来して、銀錢業をやっていた韓国人チョ・ウォンチャン(31)さんがちょうど慰安所に立ち寄ったとき、彼に頼んでやっと逃げ出してくることができた。その後、チョさんと一緒に満州に行き、中国・上海などの地を転々としながら生活し、解放後、チョさんとソウルに来て、その地に定着した。キムさんは息子と娘を一人ずつ産んだが、朝鮮戦争直後に息子と娘を失い、53年には夫もこの世を去り、家政婦や物売りの仕事などをしながら、苦しい人生を送ってきたと、涙に声をつまらせて話した。

キムさんは、最近、就労事業を出て行って知り合った原爆被害者イ・メンヒ(66-女)さんと韓国挺身隊問題対策協議会の勧誘で、事実を明らかにすることを決心したということだ。キムさんは「政府は従軍慰安婦問題に対する公式謝罪と賠償などを日本に要求しなければならない」と力強く語った。

一方、挺対協は「キムさんの証言をはじめ、生存者、遺族たちの証言をとおして、歴史の裏側に追いやられていた挺身隊の実情が明らかにされなければならない」と強調した。

10月25日

午後10時から11時、インタビュー取材。

10月26日

午後1時から3時、取材準備。

午後9時から11時、翻訳作業。

10月27日

午前10時から午後1時、翻訳作業。

午後3時から7時、テキスト作成。

10月28日

ドイツ現代史・ユダヤ現代史専門家、武井彩佳氏による興味深い論考を読む。「第二次世界大戦後、ドイツを中心とした欧米諸国がナチズムやホロコーストなど負の歴史と向き合う中で、偽証は避けて通れない問題であった」と述べ、戦後ドイツにおける偽証の事例を引きながら、朝日新聞バッシングと修正主義的世論の高まりの問題点を論じている。とくに、ホロコーストの「加害者でも犠牲者でもない第三者」による偽証（吉田証言と同じ）の事例として挙げられている「ホロコースト体験を創作し、自伝と偽って出版するケース」が興味深い。なぜ被害者になりすまして創作するのか。武井氏は「犠牲者に付与されたより高い価値の場に身を置こうとする願望」「自身を何かの犠牲者であると考えずにはいられない現代社会の風潮」を理由として挙げている。吉田清治の場合は、加害者として虚偽の証言を行なったのだが、彼が偽証した理由については心惹かれるものがある。

武井彩佳「偽証との向き合い方、修正主義の受け止め方——ホロコーストと比較して」より引用：

歴史解釈とは、長年の研究の積み重ねによって確立するものであり、一人の偽証によって無に帰すことなどありえない。特定の偽証を理由に歴史全体を否定する者があるとしたら、それは学術に対する冒涇である。史料の山に何十年も向かって得られた知見と、そうしたものを手に取ったこともない人たちの個人的な見解が、同じ土俵でたたかわされることを許している現在の日本の知的貧弱、いわば反知性主義こそ、最も懸念すべきものだ。

10月30日

午後5時から8時、翻訳作業。

11月3日

午前8時から10時、文献表整理。

11月6日

午後6時、打ち合わせ。

11月17日

午後3時から5時、インタビュー取材。

11月18日

午前9時から11時、資料整理。

11月28日

読売新聞が同社の英字紙で「慰安婦」を「性奴隷」などとする「不適切」な表現があったと謝罪したとの報道。

「本社英字紙で不適切な表現 慰安婦報道でおわび」読売新聞(2014年11月28日)より引用：

いわゆる従軍慰安婦問題の報道で、読売新聞発行の英字紙「デイリー・ヨミウリ」（以下DY、現ジャパン・ニュース）が1992年2月から2013年1月にかけて、「性奴隷」（sex slave/servitude）など不適切な表現を計97本の記事で使用していたことが社内調査で明らかになりました。

読売新聞は、誤解を招く表現を使ってきたことをおわびし、記事データベースでも該当の全記事に、表現が不適切だったことを付記する措置をとります。本日付ジャパン・ニュースにもおわびを掲載し、ウェブサイト（<http://the-japan-news.com/>）で対象記事のリストを公表しています。

慰安婦問題に関する読売新聞の翻訳やDYの独自記事で、「性奴隷」にあたる単語を不適切に使用していたものは85本あった。

「慰安婦」(comfort women)という表現が関連知識のない外国人読者には理解困難だったため、外国通信社の記事を参考に「性奴隷となることを強制された慰安婦」などと、読売本紙にはない説明を、誤った認識に基づき加えていた。

たとえば97年8月30日付の1面コラム「編集手帳」は、「『従軍慰安婦』などの記述について」としているのに、DYの英訳記事では「the issue of “comfort women,” who were forced into sexual servitude by the Imperial Japanese Army」(大日本帝国陸軍によって性奴隷となることを強制された慰安婦の問題)と記述した。

「性奴隷」という言葉は用いていないが、慰安婦を「日本軍によって売春を強要された女性たち」などと定義し、政府・軍による強制を客観的事実であるかのように記述した記事も、12本あった。93年に発表された河野談話について、当初は「官憲等が直接これ(慰安婦募集)に加担したこともあった」と正確に訳していたが、その後、「軍当局による強制連行を認めた」と単純化し、誤解を招く表現を用いたこともあった。

ジャスティン・マッカーリー「日本の新聞が「性奴隷」という語を戦争報道から撤回——主流の歴史観に反し、売春宿で働かされた女性たちを自ら志願した売春婦と記述する企図」『ガーディアン』(2014年11月28日)より引用：

日本で一番の販売部数をもつ新聞が、第二次世界大戦前・戦中に日本軍の売春宿で働くことを余儀なくされた何万人もの女性たちについて、過去に「性奴隷」という語を使用したことを謝罪した。

一日1000万部以上の発行部数をもつ保守派の高級紙『読売新聞』の動きは、この国の一部の報道機関が、日本の戦時下の歴史を書き換え、アジア大陸での日本の行動をより好意的に記述する政府主導の宣伝活動に協力しているという懸念を高めた。

民間業者に雇われた自らの意志で働く売春婦と女性たちをみなす修正主義者の努力は、日本政府と、犠牲者の多くの出身国である韓国の関係を難しいものになっている。日本首相安倍晋三は、2012年12月の就任以降、ソウルの朴槿恵大統領といまだに二国間首脳会議を開催できていない。

日本語版、英語版に掲載した声明文のなかで、読売新聞は「いわゆる慰安婦」という、批評家は女性たちの苦難を過小評価すると指摘している、より曖昧な言い回しを継続して使用すると書いた。

多くの主流の歴史家や海外メディアは、1945年の日本の敗北まで、最前線の売春宿で働くことを余儀なくされた200,000人もの女性たち——大部分は朝鮮半島出身——について、「性奴隷」という語を用いている。

読売新聞によれば2013年までに10年以上にわたり、現在は『ジャパン・ニューズ』として知られる『デイリー・ヨミウリ』英語版に「不適切」な記述が何度も掲載されたと言う。同紙は、編集方針を変更するようという外部からの圧力はなかったと言う。

9月に、リベラル派の朝日新聞が、1990年代に出した戦時下の性奴隷をめぐる複数の記事を撤回したのを機に、日本の歴史修正主義者たちは勢いづいた。

〔朝日新聞が撤回した〕報道は、韓国済州島の女性たちが連れ去られ、軍売春宿で働かされるのを目撃したと主張する元兵士、吉田清治による虚偽の証言に基づくものだった。吉田は2000年に亡くなったが、学者や他社報道機関の独自調査により根拠を欠くものとみなされている。

朝日新聞社長が辞任し、その後、同紙は、情報の信憑性をめぐり、読売新聞をふくむ保守派の競争相手による継続的な攻撃の対象になった。

読売新聞は、軍が強制した証拠はないとする保守派の有力政治家たちの主張を踏まえて、以前の表現は性奴隷状態が戦時下の公的方針だったという誤った印象をつくったと書いた。

「読売新聞は、誤解を招く表現を使ってきたことをおわびし、記事データベースでも該当の全記事に、表現が不適切だったことを付記する措置をとります」という声明を金曜日の『ジャパン・ニューズ』に掲載した。

同紙は、1992年から2013年に書かれた、「性奴隷」や「その他の不適切な表現」を使用した97の記事を列挙している。

政府与党である自由民主党の強力な支持媒体である読売新聞は、日本語版では〔それらの語を〕使用したことはないと言う。

「『慰安婦』という表現が関連知識のない外国人読者には理解困難だったため、外国通信社の記事を参考に「性奴隷となることを強制された慰安婦」などと、読売本紙にはない説明を、誤った認識に基づき加えていた」と同紙は説明した。安倍首相は、日本の国際評価を損ねたとして、朝日新聞——さらに、朝日の誤報にもとづき性奴隷問題を報道したと主張し、海外メディアを非難している保守派政治家の一人である。しかし、1993年の政府による被害者への謝罪声明を見直すことは思いとどまった。

一方で、主流の歴史家は、朝日新聞による最近の記事撤回は、戦時下の日本政府と軍部による強制があったという主張を無効にするものではないと指摘している。（私訳）

12月1日

午後8時から11時、テキスト作成。

12月3日

午後8時、打ち合わせ。

12月11日

午後6時、打ち合わせ。

12月30日

午後5時から10時、文献表整理。

引用文献

- 池田 恵理子「戦争の『記憶』と『記録』——ビデオ塾の映像記録運動から」『女たちの21世紀』23(2000-7): 48-50.
- 伊藤 孝司 編著『写真記録 破られた沈黙—アジアの「従軍慰安婦」たち』風媒社, 1993.
- 「橋下徹大阪市長『米軍の風俗業活用を』はいかなる文脈で発言されたのか(2013年5月13日) 大阪市長・橋下徹氏ぶらさがり取材全文文字起こし」『SYNODOS』Web. 2013.5.14.
- ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン『青色本・茶色本(ウィトゲンシュタイン全集6)』大修館書店, 1975.
- クリスタ・ヴォルフ「日本の読者へ」『残るものは何か?』保坂一夫 訳, 恒文社, 1997, 1-4.
- 大島 渚『忘れられた皇軍』日本テレビ, 1963, テレビドキュメンタリー.
- 岡 真理『記憶／物語』岩波書店, 2000.
- 鎌田 真弓「国防の最前線: ダーウィン空襲を追悼する」鎌田真弓編『日本とオーストラリアの太平洋戦争—記憶の国境線を問う』御茶の水書房, 2012, 80-96.
- 桜井 厚『インタヴューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房, 2002.
- 鈴木 清順『鈴木清順エッセイ・コレクション』四方田犬彦 編, 筑摩書房, 2010.
- 武井 彩佳「偽証との向き合い方、修正主義の受け止め方—ホロコーストと比較して」『SYNODOS』 Web. 2014.10.28.
- ヴィーナ・ダス「言語と身体——痛みの表現におけるそれぞれの働き」アーサー・クラインマン, ヴィーナ・ダス, マーガレット・ロック編『他者の苦しみへの責任——ソーシャル・サファリングを知る』坂川雅子訳, みすず書房, 2011, 33-67.
- ジャック・デリダ『アーカイヴの病——フロイトの印象』福本修 訳, 法政大学出版局, 2010.
- 富山 一郎 編『記憶が語り始める』ひろたまさき, キャロル・グラック監修, 東京大学出版会, 2006.
- 西野 留美子『元兵士たちの証言 従軍慰安婦』明石書店, 1992.
- . 「証言にどう向き合うか」アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」編, 西野 留美子, 金富子 責任編集, 「証言 未来への記憶——アジア『慰安婦』証言集 I——南・北・在日コリア編 上」明石書店, 2006. 228-49.
- アーサー・W・フランク『傷ついた物語の語り手——身体・病い・倫理』鈴木智之 訳, ゆみ出版, 2002.
- 松井稔『日本鬼子 日中15年戦争・元皇軍兵士の告白』映画, 2001.
- 屋嘉比 収『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす』世織書房, 2009.
- 吉見 義明 編『従軍慰安婦資料集』大月書店, 1992.
- . 『従軍慰安婦』岩波新書, 1995.

- 李 静和『つぶやきの政治思想：求められるまなざし・かなしみへの、そして秘められたものへの』青土社, 1998.
- Cook, Haruko Taya and Theodore F. Cook. *Japan at War: An Oral History*. New York: New Press, 1992.
- Duras, Marguerite. *The War: A Memoir*. Trans. Barbara Bray. New York; London: New Press, 1986.
- Hatzfeld, Jean. *A Time for Machetes: The Rwandan Genocide: The Killers Speak*. Trans. Farrar, Straus and Giroux, Editions du Seuil, 2003. (『隣人が殺人者になる時 加害者編』西京高校インターアクトクラブ・服部欧右 訳, かもがわ出版, 2014.)
- Hirsch, Marianne. *The Generation of Postmemory: Writing and Visual Culture of After the Holocaust*. New York: Columbia UP, 2012.
- Krog, Antjie. *Country of My Skull*. London: Vintage Books, 1999, 117. (『カントリー・オブ・マイ・スカル——南アフリカ真実和解委員会〈虹の国〉の苦悩』山下渉登訳, 現代企画室, 2010.)
- Kuhn, Annette. *family secrets: Acts of Memory and Imagination*. London; New York: Verso, 2002.
- Morris-Suzuki, Tessa. “Lest We Remember...The Future of the Past in Japan and Australia.” *On the Western Edge: Comparisons of Japan and Australia*. Ed. Masayo Tada, Leigh Dale. Perth: Curtin University of Technology, 2007, 23-33. (「記憶と記念の強迫に抗して」『世界』693 (2001-10): 34-43.)
- O' Herne, Jeanne. *50 Years of Silence*. Sydney; Amsterdam; New York: Editions Tom Thompson, 1994. (『オランダ人「慰安婦」ジャンの物語』木犀社, 1999.)
- Tanaka, Yuki. *Japan's Comfort Women: Sexual Slavery and Prostitution during World War II and the US Occupation*. Oxon: Routledge, 2002.

* 第2部で回答者が言及した資料は、脚注内に出典を記した。

* 第3部で引用した新聞記事は、本文中に出典を記した。